3．　遺　　物

江戸時代の出土遺物は、陶磁器類（土器製品等を含む）が大半を占め、その他に焼塩壺、瓦・石製品・金属製品・木製品等がある。本節では、戦国時代同様陶磁器類を中心にその概要を見ることとし、その他の遺物についての説明は後述の各節に委ねるものとする。そして陶磁器類の扱いに際しては、各遺構から出土した遺物の一括性を重視し、用途分類に基づく器種組成を明らかにすることをその第一義とした。

(1)陶磁器類の分類と概要

分類

出土した陶磁器類の分類にあたっては口縁部計測法を利用した。まず、遺物の口縁を、用途を第１項目、器種を第２項目、器形を第３項目として分類し、個々の遺物を３桁数字で表示した。遺物観察表の器種がこれに当たる。また口縁部破片での分類のため器種・器形の分類に不統一な面が見られる点、通有の遺物名称と分類上の名称とのずれが多少存在する点を初めに断っておく。

用途については、１－供膳具、２－調理具、３－貯蔵具、４－灯火具、５－火具、６－化粧具、７－神仏具、８－喫煙具、９－調度具、０－その他に分類することとした。

それぞれの用途に基づく分類は以下の通りである。

１．供膳具

１椀　　口径が8.5cm以上のもの

1	天目椀	いわゆる天目形の椀。これに段付天目を含む。
2	丸椀	体部が丸みをもって立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。尾呂茶椀、御室茶椀を含む。
3	腰折椀	体部下方は丸みを帯び、上方は直立し、その境に稜線がはいる。
4	平椀	高台部からほぼ直線的に大きく開く体部を有する椀。
5	筒椀	腰が張って体部が円筒状を呈する椀。
6	端反椀	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部が外反して開くタイプの椀。
7	広東椀	体部は内湾気味に立ち上がる。高台が逆三角形状を呈する。ここには小杉椀を含んでいる。
8	腰鎬椀	体部下方は丸味を帯び、上方はほぼ直立し櫛描き沈線が施される。鉄釉と灰釉の掛け分けがなされる。
0	その他	

２小椀　小杯　猪口　　口径が8.5cm以下のもので、１－天目椀、２－丸椀、３－平椀、４－筒椀、５－端反椀については椀の分類をそのまま踏襲している。

6	猪口	高台から体部にかけて直線的に開き、高台は断面三角形状を呈する、見込

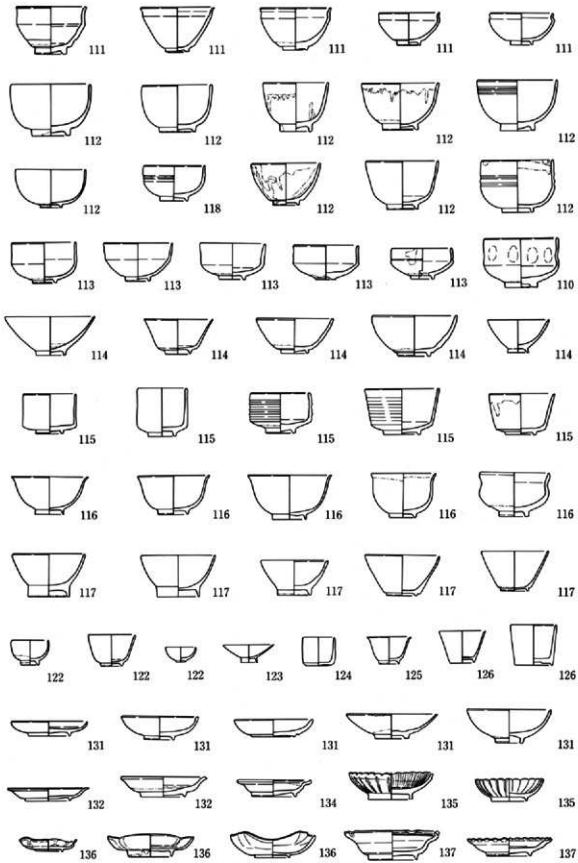


図95　近世陶磁器類分類図(1)

みの深い小型のもの。

7　筒丸

0　その他

3皿　　1－丸皿、2－端反皿、3－稜皿、4－折縁皿、5－菊皿、7－ひだ・稜花皿は、器形的には戦国時代の皿の分類をそのまま踏襲している。

6　型打皿　　成形用の型を用いて作られるもの。

0　その他

4鉢　　1－丸鉢、2－端反鉢、3－折縁鉢、4－平鉢、5－型打鉢、6－稜花鉢は皿と同様の分類である。丸鉢と丸皿との区別は口径15cm以上のものを便宜的に鉢とした。また通有の大平鉢・黄瀬戸鉢は2－端反鉢に、笠原鉢は3－折縁鉢に分類した。

7　織部　　銅緑釉、鉄釉系、灰釉系等の釉薬を用いて従来みられなかった器形をなすもの。向付、鉢等がある。

0　その他

2．調理具

1鍋、釜　1　内耳鍋　　半球形の体部を有し、内面の口縁部直下に対となる横耳が付く。

2　羽釜　　半球形の体部に鍔が付く。量的には少ない。

3　焙烙　　底が丸く、器高に対し口径が大きい。内面に耳が付くものと付かないものとがある。

4　行平　　体部は湾曲しながら立ち上がり、口縁は受口状を呈する。注口と把手、蓋が付く。

5　鍋　　湾曲した体部に一対の吊り手がつく。

0　その他

2　鉢　　1　片口鉢　　円筒状の体部に片口がつく。食物の攪拌・混合、汁物の移替に用いる。

2　こね鉢　　体部は丸みをもって立ち上がり、口唇部は内面に肥厚化して平坦面を持つ。食物等を手でこねる際に用いる。

0　その他

3　擂鉢　　1　Ⅰ類　　戦国時代の分類のⅡ類に相当する。

2　Ⅱ類　　戦国時代の分類のⅢ類に当たる。

3　Ⅲ類　　体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部を肥厚化させ、口縁内面に突起もしくは段をもつ。17世紀に比定される。

4　Ⅳ類　　体部は直線的で、上端部はやや外反し、口縁端部が立ち上がりながら膨らみを持つ。17世紀後葉に比定される。

5　Ⅴ類　　体部は直線的に開き、上端は外折し、口縁端部が折り返されて縁帯を形成する。18世紀前半に比定される。

6　Ⅵ類　　折り返された口縁が体部と密着し、幅広の縁帯が形成される。18世紀後半に比定される。

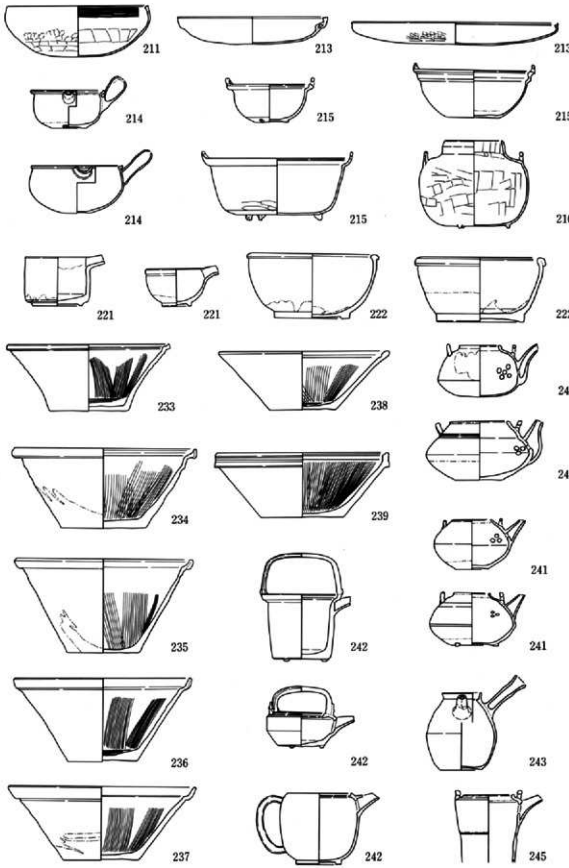


図96　近世陶磁器類分類図(2)

	7	Ⅶ類	Ⅵ類に類似するが、口縁は折り返さない。18世紀後葉に比定される。
	8	Ⅷ類	体部は直線的に開き、口縁端部がやや膨らみを持つ。19世紀代に比定される。
	9		いわゆる備前擂鉢、堺擂鉢と呼ばれているもの。
	0	その他	
4瓶	1	土瓶	丸い体部の一方に注ぎ口がつき、体部上半に一対の耳を付け、その間に把手用の蔓が付けられるようにされているもの。
	2	銚子	体部上方または側面にアーチ上の把手が付き、注ぎ口はU字状を呈す。
	3	急須	丸い体部に把手と注ぎ口が90度の角度をもって取り付けられている。
	4	燗徳利A	平底で胴部中央まで直立し、頸部にかけて緩やかにすぼまる。頸部以上はやや外反する。
	5	燗徳利B	円筒形の体部にU字状の注ぎ口と一対の吊り手またはアーチ状の把手が付く。ちろりと言われる。
	0	その他	

3．貯蔵具

1瓶	徳利（1～6）	徳利については、1－徳利A（高台を有するもの）、2－徳利B（平底のもの）、3－徳利C（体部に凹みを有し、横断面が三角形を呈する）4－徳利D（体部に凹みを有し、横断面が四角形を呈する）、5－徳利E（いわゆる高田徳利）、6－油徳利に分類した。
	汁次（7～9）	体部にアーチ状の把手を有し、筒状の注ぎ口が付く。体部が丸みを持つものを7－汁次A、円筒形のものを8－汁次B、その他が9－汁次C。
	0 その他	しびん等
2壺	壺に関しては、蓋の有無により1－蓋付壺、2－無蓋壺に分類し、いわゆる茶壺形のものは3－茶壺とした。さらに茶入れと称される小型品は4－茶入とし1器種とした。さらに材質により5－土師壺を設定した。	
	0 その他	
3甕A	1～6	いづれも常滑産の甕で、口縁の形態により分類を行った。1はN字形の最末期、2はY字形の初期段階、3はいわゆるY字形口縁、4はT字形口縁、5は「字形の口縁断面を呈する。6としてその他の甕を扱った。
4甕B	1 半胴A	高台を有し、体部はやや内湾気味に立ちあがる。口縁が肥厚する。
	2	半胴Aに対し、口縁が肥厚せず、外反する。
	3 銭甕	平底で、体部は丸みをもって立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。
	4	胴丸形の甕で、体部上方に沈線が巡る。口縁は外へ折り返されている。
5鉢	1 蓋物A	蓋付きの鉢で、口縁端部が無釉で蓋受けの無いもの。
	2 蓋物B	蓋付きの鉢で口縁部に蓋受けがあるもの。
	0 その他	

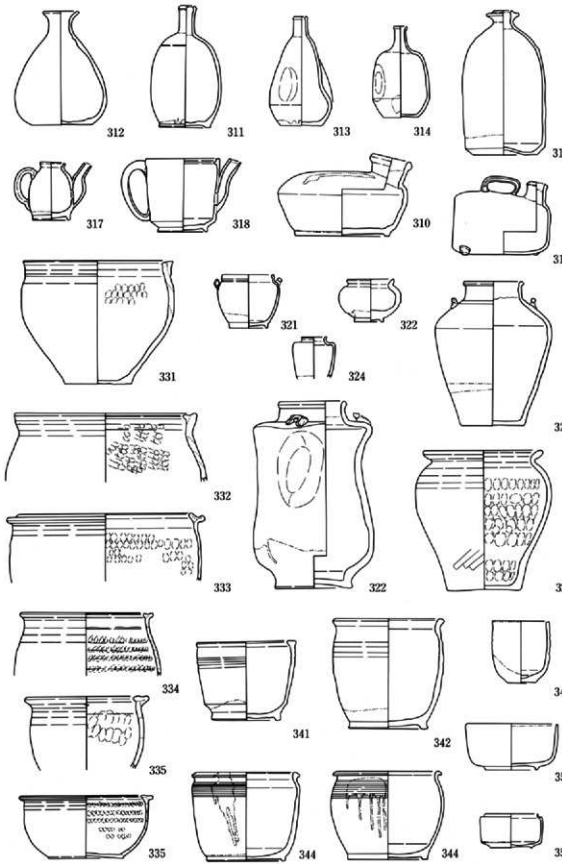


図97　近世陶磁器類分類図(3)

4．灯火具

1皿　1　灯明皿　口縁部に油煙等が付着している皿は、いずれもここに分類した。また、呪具などの特殊な目的に使用されている場合を除き、土器皿は灯明皿として使用されたと判断し、ここへ含めた。本来的には灯明具は皿2枚で一組であるため、灯さんとして使用されていた可能性もあることを注記しておく。

2　灯さん　体部内面に1、2ケ所U字形に切り込みの入った桟が設けられる。受皿。

3　行灯皿　盤形の皿で口縁の立ち上がりは少ない。

0　その他

2ひょうそく　1　受皿と灯芯立てとが接合された形式の灯明皿。

2　脚付き　中央に灯芯を支える立ち上がりを持つ坏部に台がつく。台部に未貫通の穿孔がみられるものもある。

3　中央に灯芯を支える立ち上がりを持つ坏部のみで、脚はない。タンコロ。

4　窓あきの蓋のつくもの等。

5　軟陶系。器形はタンコロに丸味をもたせた形状。

0　その他

3瓦燈　1　瓦燈　傘部と皿部に分かれ、皿部に灯明皿やひょうそくを置いて傘を被せると傘の格子と穴から明かりが漏れる仕組みになっている。

0　その他

4燭台　皿状または盤状の蠟燭を乗せる台で、中央に蠟燭を固定する為の軸用の穿孔がされる。

0その他

5．火具

1鉢　火鉢等を全てここに分類し、1－火鉢、2－瓶掛、3－風炉、4－こん炉A（内部構造が一重）、5－こん炉B（内部構造が二重）、6－火いぶし、7－火容（小型、窓付き）、8－火桶、0－その他とする。

2壺　1　火消し壺　蓋付きの火鉢

0　その他

3くど　可動式のかまど。1－くどA（口唇部円筒状）、2－くどB（口唇部がL字に外部へ屈曲）に区分。

0その他　1－五徳（三脚の環状台）

6．化粧具

1紅皿　小型で浅い皿状のものが多い。中に紅を入れて伏せておく。

2壺　1　おはぐろ壺　口縁の一箇所が蕎口状を呈する。

2　髪油壺

3　転用品

0　その他

3びんだらい　0　平面が細長い楕円形を呈する盥状の容器。

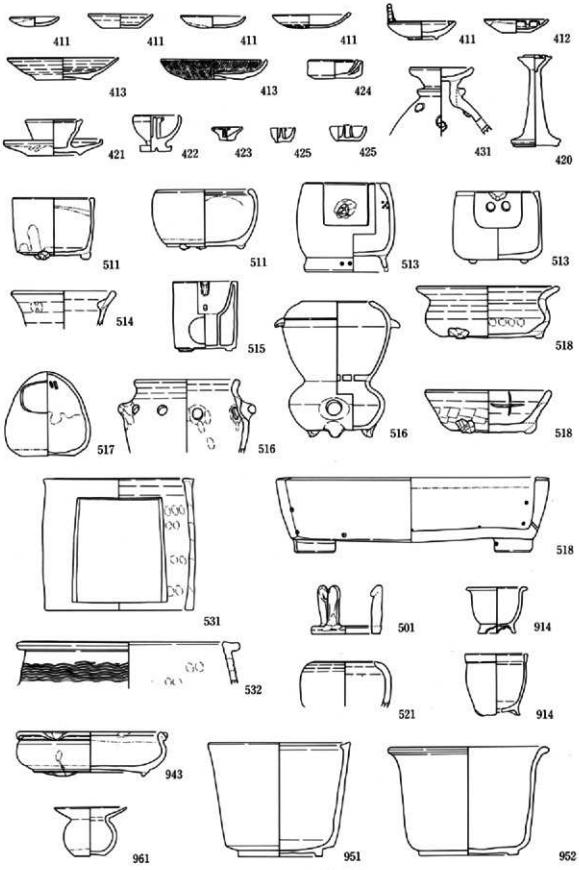


図98　近世陶磁器類分類図(4)

0その他

7．神仏具

1瓶　1－神酒徳利A（鶴首、磁器に多い）、2－神酒徳利B（口唇部外反または玉縁状、陶器に多い）、0－その他

2香炉　体部の形態により、1－筒型、2－袴腰型、0－その他、に分類する。

3仏飯具　下方が丸く、上方がほぼ直立した坏部と末広がりの脚部からなる。

4香合　蓋物Bの小型製品

5線香筒　細い円筒形の体部を有する、竹の形状を模したもの。

0その他

8．喫煙具

1火容　基本的には口縁部における煙管等による敲打痕の有無により、香炉との区別を行った。その結果、小型の火鉢状を呈する火容を1－筒型、2－香炉型、0－その他、に区分した。

2灰落とし

0その他

9．調度具

1植木鉢　1－植木鉢、2－半胴（半胴甕の転用品）、3－転用（他の器種からの転用品）、4－蘭鉢、0－その他。

2餌鉢　1－餌鉢(半筒形の小型椀、体部に固定用の環状の摘み)、2－餌すり鉢(擂鉢の小型製品)、0　その他

3花生　1－筒型（体部から口縁にかけて直線的）、2－壺型（口縁が開く）、0－その他

4水指　1－水指（深鉢、壺形で有蓋）、2－建水（深鉢、壺形で無蓋）、3－水盤（浅鉢状、器高低く、口縁折り返し）、0－その他

5水甕　1－（口縁端部が張り出す）、2－（口縁が外反する）、0－その他

6壺　1－唾壺（器高低く、頸部から口縁が開く）、0－その他

0その他　1－柄杓、2－筒型、3－（手桶）、4－土管

0．その他

1蓋　1－（落とし蓋、つまみ無し）、2－（落とし蓋、円形つまみ有り）、3－（円形つまみ有り、かえり無し）、4－（円形つまみ有り、かえり有り）、5－（環状つまみ有り、かえり無し）、6－（上面偏平、肩部直角に折れる、つまみ無し）、7－（つまみ無し、かえり有り）、8－（湾曲した傘部、円形つまみ有り）9－（有孔）、0－その他、

材質・産地の略記号について

材質については、各実測図の通番右側に、D：土器、T：陶器、J：磁器、N：軟質陶器、G：瓦質のアルファベットで表記した。また、産地は一覧表に、瀬：瀬戸・美濃、常：常滑、京：京都（信楽を含む）、肥：肥前（北九州を含む）、中：中国、朝：朝鮮、丹：丹波、備：備前、堺：堺、不：不明の漢字1文字の表記を行った。

概要

今回の発掘調査の過程で出土した近世遺物は検出段階の遺物を含めると、口縁部破片数で37179点あり、総個体数は3686.50個体にのぼる。ここでは以下の個別遺構の個体数組成の前提となる近世全体を通じての概要をまとめておきたい。

先に見た戦国時代の個体数組成と比較した場合、近世の遺物における組成の最大の相違点は、やはりその用途・器種の多さにあると言える。供膳具・調理具・貯蔵具を基本的生活様式を構成する遺物群と考えた場合、副次的生活様式に関連する遺物群と思われる化粧具・喫煙具の登場や、供膳具・調理具・貯蔵具等の同一用途内での器種の多様化であろう。この事は近世陶磁器産業が多種多量の生産を可能にし、それらを流布させる為の流通網の発展に裏付けられているのであろう。更に言及するならば、化粧具・喫煙具と同様に副次的生活様式の一部を構成する神仏具・調度具が近世遺物全体でそれぞれ3％・6％と高い比率を占める点も注目される。この点とかかわって、戦国時代には14.4％、11.0％に留まっていた陶磁器の比率が66.5％・18.9％に増加し、土器製品は代わって19.8％に減少している。但し、減少した土器製品の84.0％を灯火具の土器皿が占める点は前代と同様である。

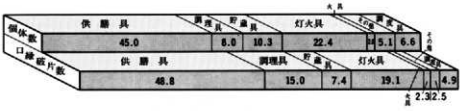


図99　近世陶磁器類の用途組成

集計表D

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		8	11322	6289	6	17605	8	12243	5459	13	17723
	椀	0	6290	2688	1	8979	0	7153	2565	3	9721
	小椀	1	780	2236	1	3018	1	864	1658	3	2526
	皿	7	3583	1129	0	4719	7	3311	1043	1	4362
	鉢	0	669	236	4	909	0	915	193	6	1114
調理具		678	2398	24	40	3140	2260	3140	8	50	5458
	鍋、釜	678	735	0	35	1448	2260	797	0	50	3107
	鉢	0	386	7	0	393	0	488	3	0	491
	擂鉢	0	491	0	0	491	0	1255	0	0	1255
	瓶	0	781	17	5	803	0	595	5	0	600
	その他	0	5	0	0	5	0	5	0	0	5
貯蔵具		32	3681	304	12	4029	25	2451	195	5	2676
	壺	0	1166	19	0	1185	0	262	5	1	267
	壷	29	680	35	3	747	24	367	27	2	420
	甕A	0	397	0	0	397	0	518	0	0	518
	甕B	3	753	4	9	769	1	741	3	2	747
	鉢	0	684	246	0	930	0	564	159	0	723
	その他	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
灯火具		5308	3379	24	59	8770	5693	1206	3	21	6923
火具		197	589	0	12	798	179	635	0	12	826
化粧具		5	214	299	0	518	1	96	83	0	180
神仏具		16	747	475	0	1238	16	302	142	0	460
喫煙具		0	391	55	0	446	0	234	15	0	249
調度具		10	2448	105	5	2568	16	1717	48	3	1784
蓋		63	4239	800	24	5126	22	2523	349	4	2900
合計		6317	29408	8355	158	44238	8220	24649	6302	108	39179

表10　近世出土陶磁器類集計表

また、各種の遺物に対応するであろう蓋を一括して扱ったが、その出土量が口縁部破片数で6923点、総個体数427.17個に及ぶ点も特筆すべきことがらとしてあげることができる。

以上近世遺物の概要を述べてきたが、ここで示した数値は今回の発掘調査で出土した全遺物における比率・割合であり、必ずしも近世の遺物組成の推移を示してはいない。そこで以下の個別遺構の記述に際しては、ここで挙げた比率・割合を近世遺物群のあり方の平均値と考え、それに対してどう変化しているかを中心に記述を進めていきたい。

但し、蓋については、その使用が複数の用途にかかわる場合が多く、明確な用途の特定が困難であるため、用途組成図及び本文中比率は総出土遺物から蓋を除外した数値を表わしている。

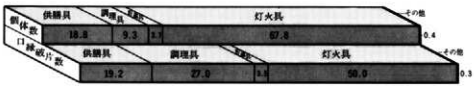
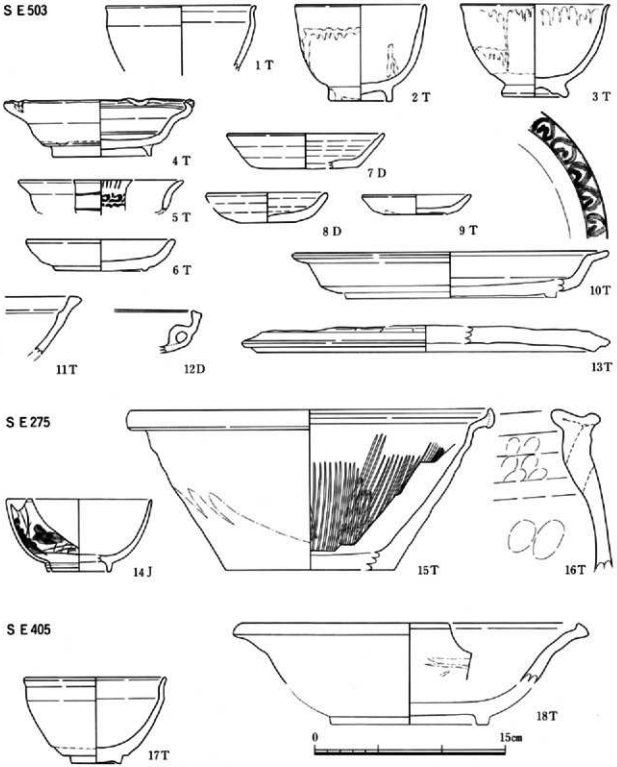


図100　近世遺構出土陶磁器類の用途組成(1)

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		7	8648	4394	2	13051	7	8514	3463	6	11990
	椀	0	4921	1878	1	6800	0	4970	1562	3	6535
	小椀	0	575	1617	1	2193	0	672	1187	3	1862
	皿	7	2610	714	0	3331	7	2216	582	0	2805
	鉢	0	542	185	0	727	0	656	132	0	788
調理具		470	1799	11	39	2319	1630	2132	3	47	3812
	鍋・釜	470	549	0	34	1053	1630	554	0	47	2231
	鉢	0	269	0	0	269	0	357	0	0	357
	擂鉢	0	361	0	0	361	0	773	0	0	773
	瓶	0	616	11	5	632	0	444	3	0	447
	その他	0	4	0	0	4	0	4	0	0	4
貯蔵具		27	2660	207	12	2906	20	1646	129	5	1800
	瓶	0	832	19	0	851	0	180	6	1	187
	壺	24	499	24	3	550	19	233	12	2	266
	甕A	0	317	0	0	317	0	384	0	0	384
	甕B	3	474	4	9	490	1	440	3	2	446
	鉢	0	538	160	0	698	0	409	108	0	517
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		3446	2608	12	54	6120	3685	852	2	20	4559
火具		176	407	0	11	594	142	440	0	11	593
化粧具		0	194	227	0	421	0	82	60	0	142
神仏具		0	569	376	0	945	7	221	110	0	338
発煙具		0	279	55	0	334	0	148	15	0	163
測定具		10	1617	86	4	1717	7	1083	31	2	1123
蓋		47	3137	569	1	3754	12	2128	249	2	2391
合計		4183	21918	5937	123	32161	5510	17246	4062	93	26911

表11　近世遺構出土陶磁器類集計表(1)

(2)各遺構土の陶磁器類



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1	111	鉄釉		瀬	
2	112	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
3	112	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
4	136	灰釉	五輪花・高台内トチン痕３ヶ所	瀬	32
5	132	鉄絵＋灰釉	内面唐草文	瀬	
6	411	長石釉	内面トチン痕３ヶ所	瀬	28
7	411			その他	34
8	411	底部糸切り痕		その他	
9	411	長石釉		瀬	20

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
10	143	灰釉	陰刻文	瀬	
11	233	鉄釉		瀬	29
12	213			その他	43
13	014			常	
14	112	染付	草花文・高台砂目痕あり	肥	
15	234	鉄釉下等輪ハケ目	高台	瀬	
16	332	外面赤色・内面緑		常	40
17	111	鉄釉	窯変あり	瀬	
18	143	灰釉・鉄釉		瀬	

図101　近世井戸出土陶磁器類実測図

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	17	0	0	17	0	15	0	0	15
	椀	0	7	0	0	7	0	7	0	0	7
	小椀	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	皿	0	10	0	0	10	0	7	0	0	7
	鉢					0					0
調理具		0	0	0	0	0	2	1	0	0	3
	鍋，釜	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2
	鉢					0					0
	擂鉢	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	瓶					0					0
	壺					0					0
	甕A					0					0
	甕B					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		8	14	0	0	22	25	3	0	0	28
盞		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計		8	31	0	0	39	27	20	0	0	47

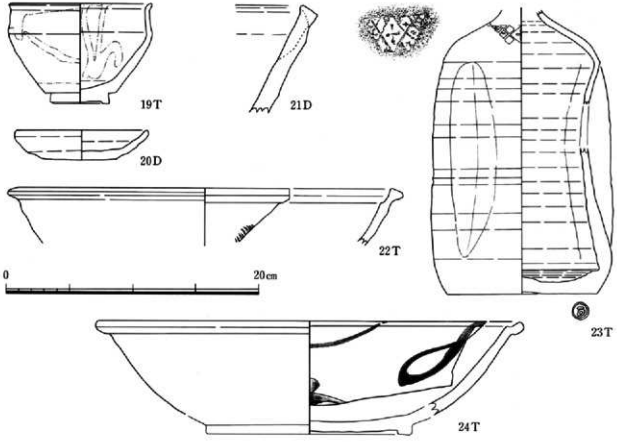
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	2	1	0	3	0	10	3	0	13
	椀	0	1	1	0	2	0	4	2	0	6
	小椀					0					0
	皿	0	1	0	0	1	0	6	1	0	7
	鉢					0					0
調理具		0	1	0	0	1	1	2	0	0	3
	鍋，釜	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	鉢					0					0
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	瓶					0					0
	壺					0					0
	甕A	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	甕B					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		1	0	0	0	1	3	0	0	0	3
合計		1	3	1	0	5	4	13	3	0	20

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	24	1	0	25	0	10	2	0	12
	椀	0	10	0	0	10	0	3	0	0	3
	小椀					0					0
	皿	0	13	0	0	13	0	4	1	0	5
	鉢	0	1	1	0	2	0	3	1	0	4
調理具		2	1	0	0	3	4	5	0	0	9
	鍋，釜	2	0	0	0	2	4	0	0	0	4
	鉢					0					0
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	5	0	0	5
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	瓶					0					0
	壺					0					0
	甕A					0					0
	甕B					0					0
	鉢	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	その他					0					0
灯火具		7	0	0	0	7	9	0	0	0	9
調度具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
合計		9	26	1	0	36	13	17	2	0	32

表12　近世井戸出土陶磁器類集計表

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	6	0	0	6	0	5	0	0	5
	椀	0	5	0	0	5	0	2	0	0	2
	小椀					0					0
	皿	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	鉢	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
調理具		0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	鍋，釜					0					0
	鉢					0					0
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	壺					0					0
	壺A					0					0
	壺B					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		33	0	0	0	33	14	0	0	0	14
火具		0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
合計		33	7	0	0	40	14	9	0	0	23

表13　ＳＤ402出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
19	111	鉄釉＋灰釉		瀬	22
20	411	底部糸切り	内面煤付着	その他	
21	518		口縁内面煤付着	常	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
22	233	鉄釉		瀬	
23	314			その他	
24	143	鉄釉・縄釉・長石釉		瀬	

図102　ＳＤ402出土陶磁器類実測図

ＳＤ104：本遺構の時期は大きく２時期に区分され、埋土上層は18世紀前葉に、下層は17世紀の第３四半期に比定される。

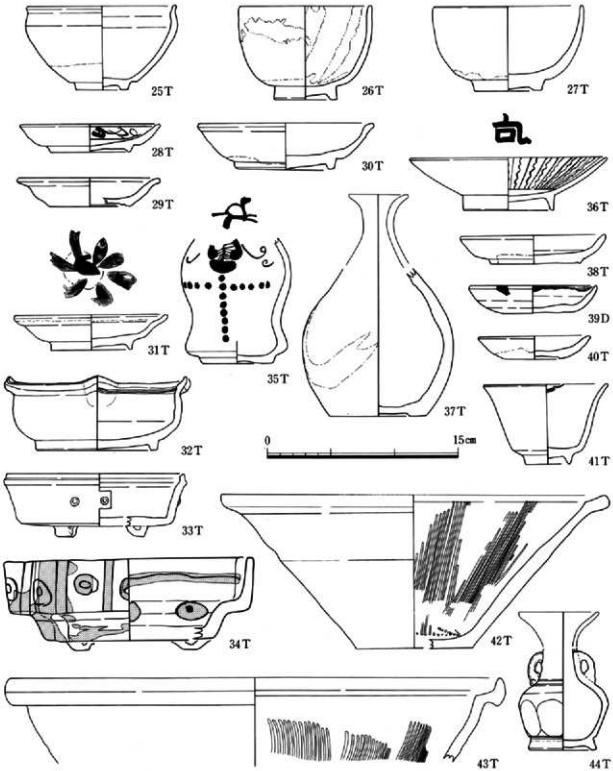
本遺構出土の遺物は口縁部破片数で703点、総個体数68.25個体である。この内供膳具が54.8%、個体数34.67個体出土しており、平均値を上回っている。これに対し、灯火具が32.3%、個体数20.42個体と、割合としては依然多くを占めてはいるが、この時期以前の遺構の比率と比較した場合、やや低下の傾向を読み取ることができる。このことは土器製品の占有率が25.8%に低下している要因となっている。この反面、磁器の占有率が11.4%と上昇傾向にあり、この点に関しては近世的遺物組成の一面を表していると思われる。併せて副次的生活様式に関する遺物群が２%の出土に留まっているということも、上記の側面を補強すると考えられる。

器種別比率を考えた場合、供膳具の椀と皿の比率が１：1.02とその差を縮め、調理具における鍋の割合が擂鉢と比較すると１：0.81と従来になく低くなっている点が注目される。また貯蔵具では甕Ａに分類された常滑産の甕が１個出土しており、総個体数から考えれば多いと思われる。

図103　ＳＤ104出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	331	85	0	416	0	265	78	0	343
	椀	0	138	25	0	163	0	118	41	0	159
	小椀	0	3	28	0	31	0	2	10	0	12
	皿	0	173	18	0	191	0	116	17	0	133
	坏	0	17	14	0	31	0	29	10	0	39
調理具		24	25	0	0	49	49	55	0	0	104
	鍋，釜	24	2	0	0	26	49	7	0	0	56
	坏	0	0	0	0	0	0	5	0	0	5
	擂鉢	0	21	0	0	21	0	41	0	0	41
	瓶	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
	その他					0					0
貯蔵具		0	16	0	0	16	0	15	0	0	15
	瓶	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
	壺					0					0
	甕Ａ	0	12	0	0	12	0	9	0	0	9
	甕Ｂ	0	0	0	0	0	0	3	0	0	3
	坏	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	その他					0					0
灯火具		183	62	0	0	245	170	18	0	0	188
火具		4	3	0	0	7	6	6	0	1	13
化粧具		0	8	0	0	8	0	4	0	0	4
神仏具		0	8	2	0	10	0	8	2	0	10
喫煙具		0	5	0	0	5	0	4	0	0	4
調度具		0	3	0	0	3	0	4	0	0	4
不明		0	54	6	0	60	0	17	1	0	18
合計		211	515	93	0	819	225	396	81	1	703

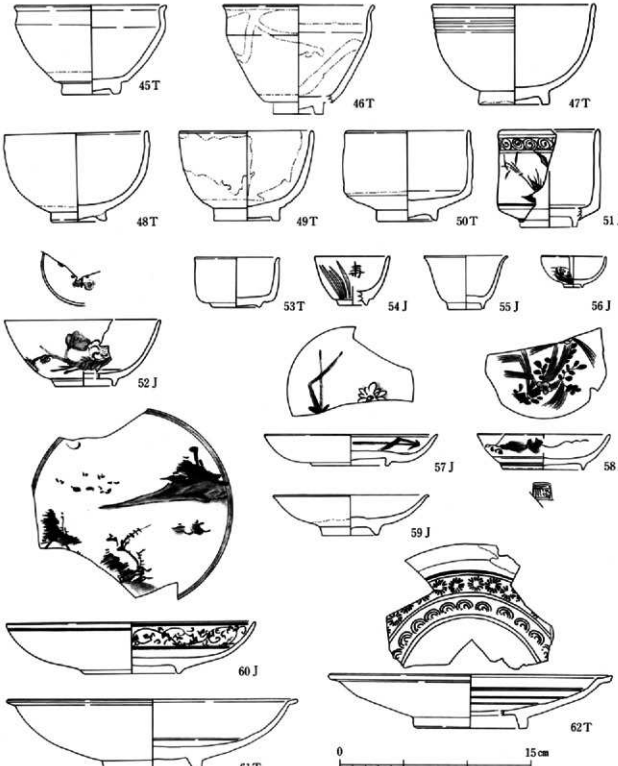
表14　ＳＤ104出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
25	111	鉄釉		瀬	
26	112	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	22
27	112	灰釉		瀬	
28	131	鉄絵＋長石釉	高台内無釉	瀬	25
29	132	長石釉	見込印花	瀬	
30	132	内面輪ハゲ・長石釉		瀬	瀬戸
31	134	鉄釉＋灰釉	花文・底部煤付着	瀬	30
32	146	鉄釉		瀬	31
33	147	長石釉	内面鉄絵	瀬	
34	147	織部	白土ねりこみ(アミ部)	瀬	可児

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
35	147	織部	つる草文5分・馬文	瀬	29
36	131	呉須絵		肥	31
37	315	鉄釉	灰釉筆書き	瀬	
38	131	長石釉	高台内釉ふきとり	瀬	
39	411	底部糸切り	口縁・底部油煙付着	不	
40	411	灰釉	油煙付着	瀬	
41	420	灰釉		瀬	23
42	233	鉄釉		瀬	
43	234	鉄釉		瀬	
44	932	鉄釉		瀬	42

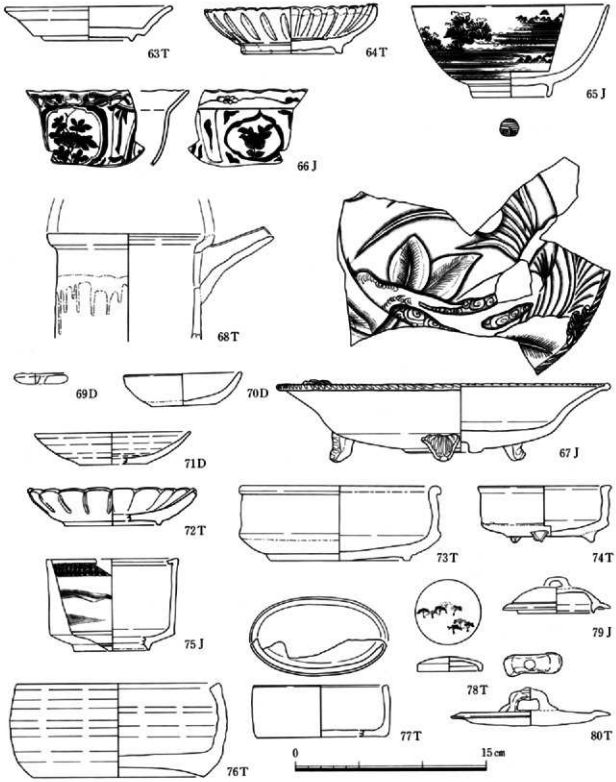
図104　ＳＤ104下層出土陶磁器類実測図



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
45	111	鉄釉		瀬	22
46	111	鉄釉＋灰釉		瀬	
47	112	灰釉		京	
48	112	長石釉		瀬	22
49	112	鉄釉＋灰釉		瀬	22
50	115	鉄釉		瀬	23
51	115	染付	1520～1620年代 ルーツ文＋牡丹文	肥	
52	112	赤絵	1520～1620年代 牡丹文＋「蘭亭序」花文	肥	18
53	125	灰釉		瀬	24

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
54	125	染付	1630～1640年代 鳥	肥	
55	125		17C後半 石橋	肥	
56	122	赤絵	18C末～19C前半 海老文	肥	17 25
57	131	染付	1730～1740年代 網状地に唐草文帯付碗	肥	25
58	131	染付	1630～1640年代 鳥牡丹文＋外縁・底花文	肥	26＋ 27＋
59	132	見込輪ハゲ	17C後半 唐草	肥	27＋
60	131	染付	1620～1640年代　桃月唐草文＋縁 鳳凰水文？酒台盃付砂目痕	肥	26
61	132	灰釉＋銅緑釉	17C 見込輪ハゲ痕	肥	
62	132	灰釉	17C 台高	肥	29

図105　ＳＤ104上層出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
63	132	灰釉	1400年代	瀬	
64	135	灰釉＋鉄絵釉		瀬	
65	141	染付	1660～1670年代 外－竹・梅文＋蛇ロ唐草	肥	28
66	145	青花	1590～1630年代 高麗青土・瀬戸・早焼丈・瀬戸早焼丈	中	31
67	143		1650～1670年代 青磁・瀬戸焼	肥	29
68	242	鉄釉＋灰釉		瀬	33
69	40-	手捏ね	焼成後穿孔	不	38
70	411	灰釉		瀬	
71	411	底部糸切り		不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
72	411	長石釉	油徳付壺	瀬	
73	722	鉄釉		瀬	27 37
74	721	鉄釉		瀬	
75	721	染付	17C後半 瀬戸丈	肥	
76	813		壁の転用か	瀬	39
77	630	灰釉		瀬	34
78	016	灰釉＋糸底絵＋鉄絵	松文	京	36 37～38
79	014		17C後半 17世紀	肥	23
80	013	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	37 38

図106　ＳＤ104上層出土陶磁器類実測図(2)

ＳＤ106：本遺構の時期は17世紀の第３四半期から18世紀前葉に位置づけられる。

本遺構出土の遺物は口縁部破片数で550点、総個体数55.83個体である。この内供膳具が20.67個体で全遺物中の38.8％を占める。この割合は近世の用途別割合の平均値に近い数値である。これに反し、近世の平均値では20％にとどまっている灯火具がこの遺構では50.4％、個体数26.83個体にのぼっており、うち84.8％が土器皿によって占められている。更にこの点が影響し、土器皿は出土遺物全体の42.1％を数え、磁器は僅か3.0％に過ぎない。

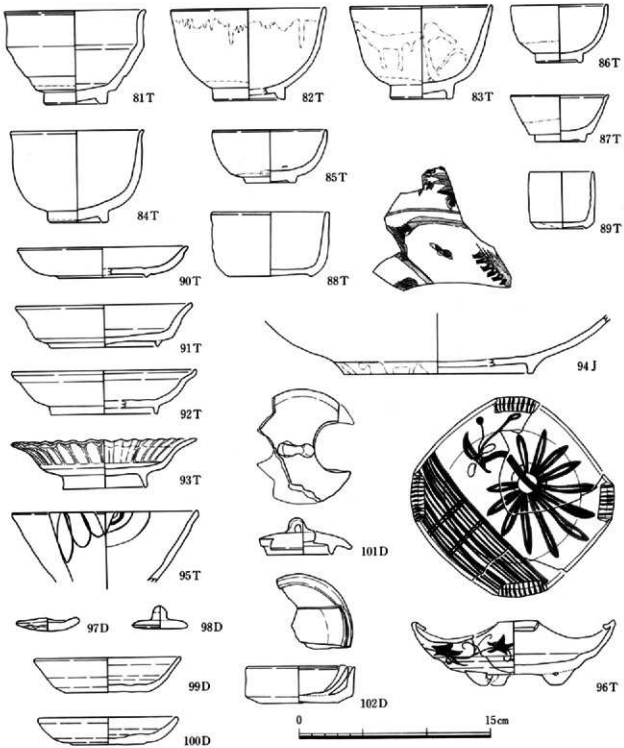
また、この遺構からは化粧具・喫煙具・調度具が口縁部破片８点、個体数0.67個体と極めて少量の出土に留まっていることも注目される。

器種別の出土比率を見た場合、供膳具では椀：皿＝１：1.46と皿が依然として椀を上回っていることが看取される。また鉢の出土量が椀、皿に比して多い点も注目される。調理具においては、鍋・釜に比して本遺構では、擂鉢が多く出土している。

図107　ＳＤ106出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	231	17	0	248	0	229	28	0	257
	椀	0	88	14	0	102	0	83	19	0	102
	小椀	0	18	0	0	18	0	9	0	0	9
	皿	0	80	2	0	82	0	81	8	0	89
	鉢	0	45	1	0	46	0	56	1	0	57
調理具		6	15	0	0	21	23	49	0	0	72
	鍋，釜	6	0	0	0	6	23	0	0	0	23
	鉢					0					0
	擂鉢	0	15	0	0	15	0	49	0	0	49
	臼					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		3	32	0	0	35	1	11	0	0	12
	瓶	0	12	0	0	12	0	1	0	0	1
	壺	0	13	0	0	13	0	5	0	0	5
	甕Ａ	0	6	0	0	6	0	3	0	0	3
	甕Ｂ	3	1	0	0	4	1	2	0	0	3
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		273	49	0	0	322	154	34	0	0	188
火具		0	5	0	0	5	0	4	0	0	4
化粧具						0					0
神仏具						0					0
喫煙具		0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
調度具		0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
不明		0	28	3	0	31	0	7	2	0	9
合計		282	368	20	0	670	178	342	30	0	550

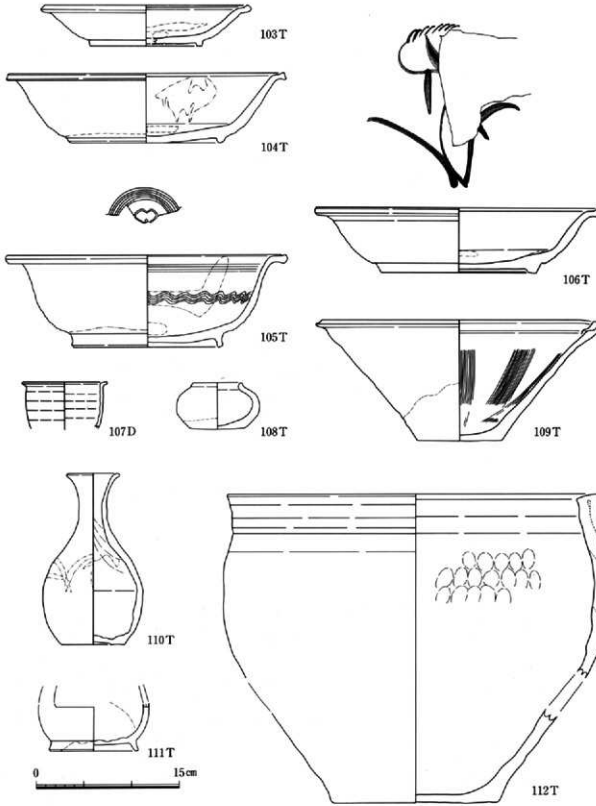
表15　ＳＤ106出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
81	111	長石釉		瀬	22
82	112	鉄釉+灰釉流し掛け	体部下半・高台鉄化粧	瀬	27
83	112	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	22
84	116	灰釉		瀬	22
85	122	長石釉		瀬	29
86	122	灰釉		瀬	24
87	123	鉄釉		瀬	25
88	141	長石釉		瀬	
89	124	長石釉		瀬	
90	131	見込輪ハゲ・灰釉		瀬	
91	132	長石釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
92	134	長石釉		瀬	
93	136	長石釉		瀬	
94	131	赤絵	口径 未～10.0cm程 高台文・直径 [illegible]釉付着	中	28
95	147	縁部	唐草文・同心円文	瀬	
96	147	縁部	鉄絵（花唐草）	瀬	31
97	410	手捏ね		不	
98	013	灰釉		瀬	
99	411	底部糸切り		不	
100	411	底部糸切り		不	
101	019	長石釉	かとし部鉄付着	瀬	
102	424	長石釉	油煙付着	瀬	

図108　ＳＤ106出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
103	143	灰釉＋銅緑釉		瀬	
104	143	灰釉＋銅緑釉		瀬	29
105	143	灰釉＋銅緑釉	波状文・見込印花	瀬	
106	143	灰釉	鉄絵（草花文）	瀬	29
107	340			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
108	322	灰釉	底部糸付痕・古瀬戸	瀬	36
109	233	鉄釉		瀬	
110	315	鉄釉＋灰釉掛け		瀬	
111	517	鉄釉		瀬	39
112	331			常	

図109　ＳＤ106出土陶磁器類実測図(2)

ＳＫ210：本遺構の時期は17世紀の第３四半期であると考えられる。

本遺構出土の遺物は口縁部破片数で466点、総個体数58.50個体である。この遺構は供膳具が全体の64.4%、32.58個体を占め、次いで灯火具が20.4%、10.3個体を占める。併せて化粧具・神仏具が出土しておらず、喫煙具もわずか0.3%であることは戦国時代の遺物組成に近いと考えることができる。このことは椀：皿＝１：2.19であることからも理解しうる。

反面、土器製品が12.1%に減少し、代わって磁器が16.5%に増加している点から近世的遺物組成を読みとることが出来る。

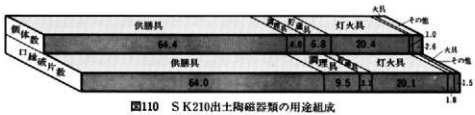
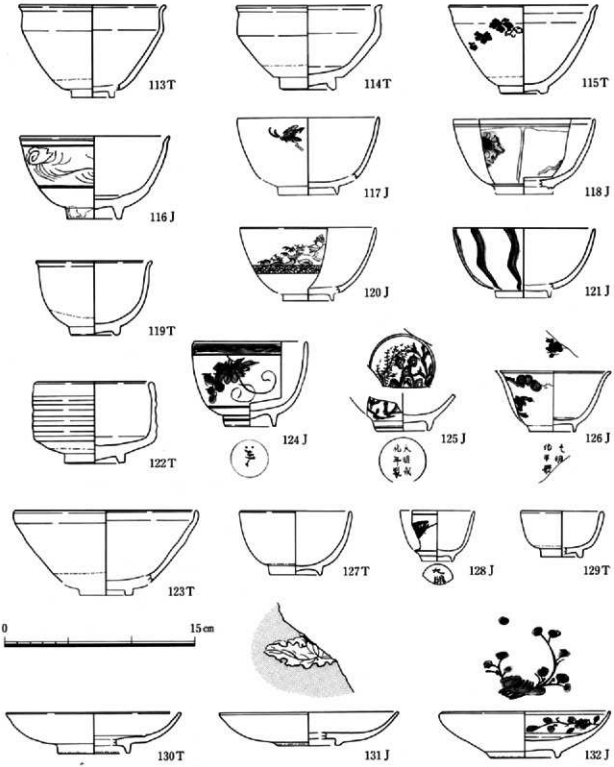


図110　ＳＫ210出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	235	106	0	391	0	201	89	0	290
	椀	0	46	51	0	97	0	45	41	0	86
	小椀	0	7	10	0	17	0	2	10	0	12
	皿	0	216	43	0	259	0	125	34	0	159
	鉢	0	16	2	0	18	0	29	4	0	33
調理具		15	14	0	0	29	15	28	0	0	43
	鍋、釜	15	0	0	0	15	15	0	0	0	15
	鉢	0	1	0	0	1	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	11	0	0	11	0	24	0	0	24
	瓶	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		0	41	0	0	41	0	14	0	0	14
	瓶	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	壺	0	36	0	0	36	0	9	0	0	9
	壺Ａ	0	3	0	0	3	0	4	0	0	4
	壺Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		70	54	0	0	124	65	26	0	0	91
火具		0	4	0	2	6	0	6	0	2	8
化粧具						0					0
神仏具		0	3	10	0	13	0	5	1	0	6
喫煙具		0	3	0	0	3	0	1	0	0	1
調度具						0					0
不明		0	95	0	0	95	0	12	1	0	13
合計		85	499	116	2	702	80	293	91	2	466

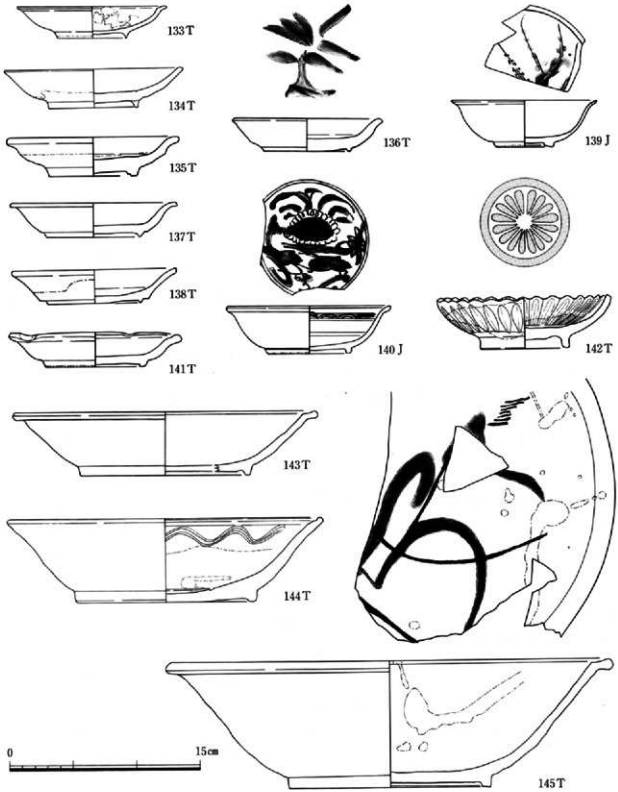
表16　ＳＫ210出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
113	111	鉄釉		瀬	
114	111	鉄釉	高台内墨書仮	瀬	22
115	111	長石釉＋鉄絵	つた文	瀬	22
116	112		1530～1640年代 内面：花文	肥	22
117	112	赤絵	1590～1620年代 鳥文	肥	
118	112	赤絵	1590～1620年代 花文＋無絵 無絵	肥	
119	116	鉄釉		肥	
120	112	赤絵	1590～1620年代 植物文＋ヒモ状なぶ	肥	
121	112	染付	1590～1640年代 ムロ：波文	肥	18
122	115	鉄釉	千段巻風	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
123	114	鉄釉		瀬	
124	112	染付	1650～1680年代 ムロ：文	肥	18
125	112	染付	1640年代 内面：明成化年製上竹と竹文	肥	
126	125	染付	1650～1670年代 胴：文 ムロ：明成化年製と梅文	肥	
127	112	灰釉		瀬	
128	122	染付	1650年代前後 ［入札］	瀬	
129	122	灰釉		瀬	
130	131	長石釉		瀬	30
131	131	染付・吹き付け	1640～ 口縁：草花文	肥	26
132	131	染付	1640年代 胴部内面：竹と草花文	肥	27

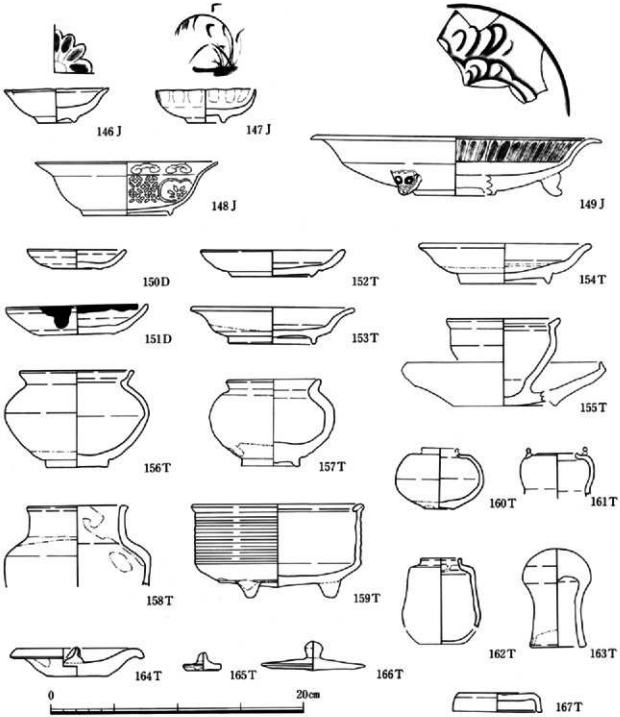
図111　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
133	132	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	30
134	131	灰釉		瀬	
135	132	内面輪ハケ・灰釉		瀬	
136	132	灰釉＋鉄絵		瀬	26
137	132	灰釉		瀬	30
138	132	灰釉		瀬	
139	132	染付	18世紀～19世紀前半代 唐草文（輪ゼビ）	肥	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
140	132	染付	1820年～1830年代 唐草文	肥	26
141	137	長石釉		瀬	40
142	135	灰釉＋銅緑釉	菊花文	瀬	30
143	143	灰釉		瀬	
144	143	灰釉＋銅緑釉	高台内煤付着	瀬	
145	143	灰釉＋銅緑釉		瀬	29

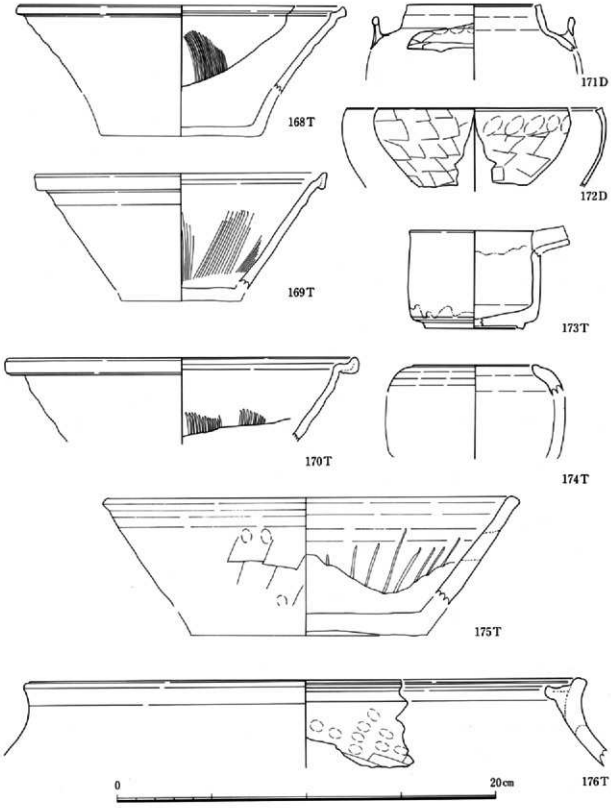
図112　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
146	137		1650～1740年代 胎土・有孔天・灰白砂粒粒	肥	
147	136	染付	1610～1640年代 天・ひび入・灰白胎土粒	肥	30
148	132		1500～1550年代 白磁・龍文 型押し	中	
149	142		1610～1640年代 胎土・灰白・粒粒	肥	
150	411	底部糸切り		不	38
151	411	底部糸切り	油煙付着	不	
152	411	長石釉		瀬	38
153	411	灰釉		瀬	30
154	411	輪ハケ・長石釉		瀬	25
155	421	鉄釉	口縁無釉	瀬	
156	321	鉄釉		瀬	36

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
157	322	鉄釉		瀬	36
158	321	口縁灰釉・体部鉄釉		瀬	
159	721	灰釉		瀬	
160	324	鉄釉		瀬	
161	320	鉄釉		瀬	
162	324	鉄釉		瀬	
163	000	鉄釉		瀬	42
164	011	鉄釉		瀬	43
165	013	鉄釉		瀬	43
166	013	鉄釉		瀬	43
167	016	鉄釉		瀬	

図113　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
168	233	鉄釉		瀬	
169	234	鉄釉		瀬	
170	234	鉄釉		瀬	
171	210			不	
172	211			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
173	221	鉄釉		瀬	
174	521			常	
175	518			常	
176	332			常	

図114　ＳＫ210出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ209：本遺構の時期は17世紀末に比定される。

この遺構は出土遺物の総量が少なく、統計的な処理によって正確な比率が導き出されるとは言いがたい側面を有していることを考慮に入れる必要があると思われる。この事を前提として以下遺物比率を見てみると、供膳具・灯火具が35.2%、2.08個体を占め、他の遺構同様この２用途が中心と成っていることが理解される。これに対し調理具が11.3%、貯蔵具が14.1%と17世紀第３四半期の遺構と比較するとその割合を増加させている。さらに貯蔵具のうち甕Ａに分類した常滑産の甕が90%を占めている点は注目に値する。

器種別の比率を見てみると、供膳具の椀と皿は１：1.27と同数に近づき、調理具では擂鉢：鍋が１：２となり近世の平均値に近づきつつある。この事は遺物の組成が戦国時代の様相と異なりはじめていることを示している。但し、化粧具・喫煙具・調度具の出土がないが、これは貯蔵具が多くを占める本遺構の立地に左右されている可能性が高い。

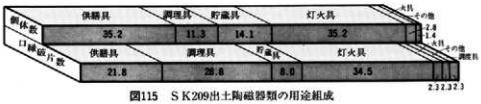
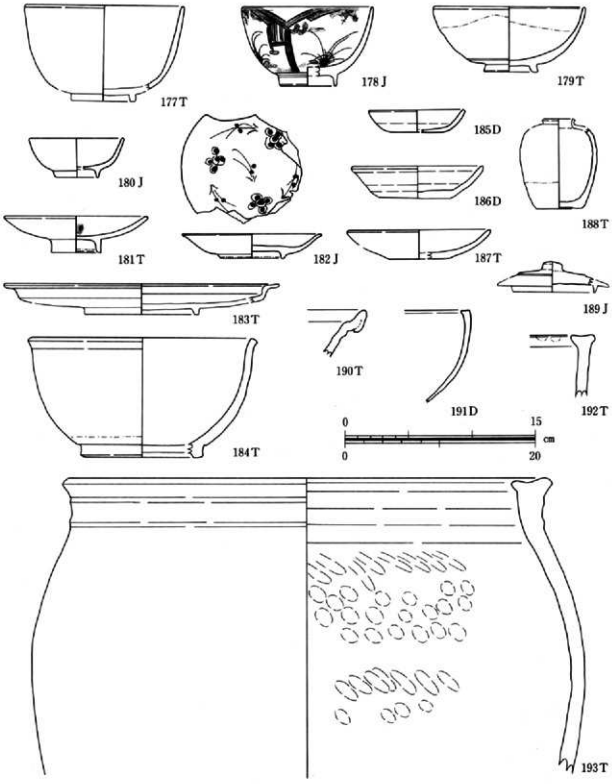


図115　ＳＫ209出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	15	10	0	25	0	12	7	0	19
	椀	0	5	4	0	9	0	3	3	0	6
	小椀	0	0	2	0	2	0	0	1	0	1
	皿	0	10	4	0	14	0	8	3	0	11
	鉢	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
調理具		2	6	0	0	8	15	10	0	0	25
	鍋，釜	2	0	0	0	2	15	0	0	0	15
	鉢	0	2	0	0	2	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	1	0	0	1	0	6	0	0	6
	瓶	0	3	0	0	3	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		1	9	0	0	10	1	6	0	0	7
	瓶					0					0
	壺	1	0	0	0	1	1	0	0	0	1
	甕Ａ	0	9	0	0	9	0	6	0	0	6
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		19	6	0	0	25	24	6	0	0	30
火具		0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
化粧具						0					0
神仏具		0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
喫煙具						0					0
調度具		0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
不明		0	1	0	0	1	0		0	0	1
合計		22	40	10	0	72	40	41	7	0	88

表17　ＳＫ209出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
177	112	灰釉		瀬	
178	112	染付	1650～1750年代	肥	18
179	112	鉄釉		瀬	22
180	122		17C末～18C初	肥	
181	131	灰釉＋呉須タンパン		瀬	
182	132	染付	17C後半～18C前半	肥	26
183	132	灰釉	17C前半	肥	
184	221	鉄釉		瀬	
185	411			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
186	411	底部糸切り		不	38
187	411	鉄釉	口縁油煙付着	瀬	
188	324	鉄釉＋化粧掛		瀬	
189	014		17C後半	肥	
190	234	鉄釉		瀬	
191	211			不	
192	950	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	
193	332			常	

図116　ＳＫ209出土陶磁器類実測図

ＳＫ021：本遺構の時期は18世紀前葉に比定される。

この遺構からの出土遺物は、口縁部破片数で216点、総個体数で20.5個体が出土している。用途別の割合は供膳具が11.25個体、55.1％、調理具が0.92個体、4.5％、貯蔵具が0.17個体、0.8％であり、貯蔵具が極端に少ないことがみて取れる。これは器種において、貯蔵具が壺の口縁部破片２点のみの出土に留まっていることが最大の要因であると思われる。これに対し灯火具が6.17個体、30.2％と同時期の遺構に比してやや多めである。また化粧具、神仏具の出土が見られない。さらに蓋が１点のみの出土に留まっていることは特筆すべき点である。各器種に対応する遺物であるが故に、常に一定の比率で出土していたが、それが出土を見ないということは、対応する器種の使用が少ないと言えるのではなかろうか。

また器種の組成については、椀：皿=1.26：１と椀の比率が低下している。また調理具は比率から判断すると、鍋の使用が少ない事が要因と思われる。

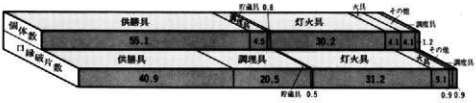
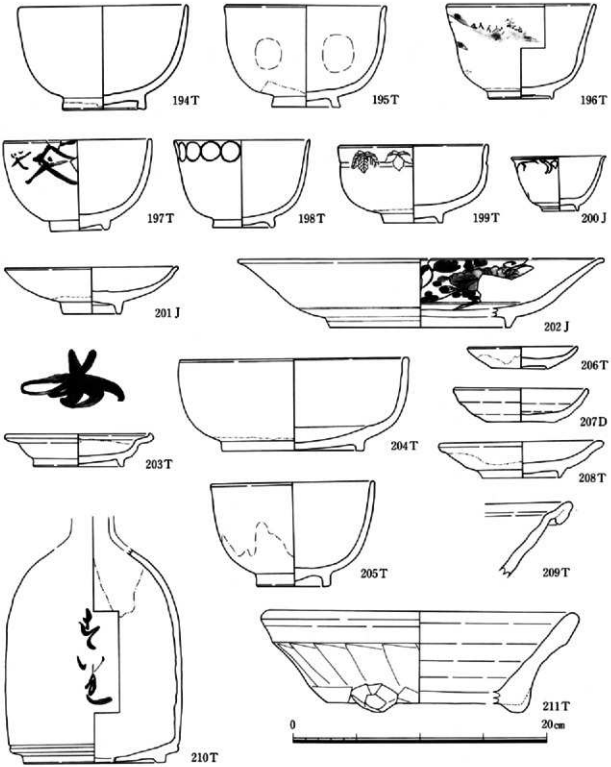


図117　ＳＫ021出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	115	20	0	135	0	67	21	0	88
	椀	0	57	4	0	61	0	39	6	0	45
	小椀	0	0	7	0	7	0	0	5	0	5
	皿	0	46	8	0	54	0	22	9	0	31
	鉢	0	12	1	0	13	0	6	1	0	7
調理具		3	8	0	0	11	29	15	0	0	44
	鍋，釜	3	0	0	0	3	29	0	0	0	29
	鉢	0	3	0	0	3	0	4	0	0	4
	擂鉢	0	5	0	0	5	0	11	0	0	11
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	瓶	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	壺	0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
	甕Ａ					0					0
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		31	43	0	0	74	58	9	0	0	67
火具		2	8	0	0	10	2	9	0	0	11
化粧具						0					0
神仏具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
喫煙具		0	10	0	0	10	0	1	0	0	1
調度具		0	3	0	0	3	0	2	0	0	2
蓋		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
合計		36	190	20	0	246	89	106	21	0	216

表18　ＳＫ021出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
194	112	灰釉		瀬	
195	113	灰釉＋鉄釉筆塗り	ヘコミ５ケ所(小)	瀬	
196	112	灰釉＋鉄絵	17C後半 崩れた文 乱ノ目的な白点	肥	
197	112	灰釉＋鉄絵		瀬	18
198	112	長石釉＋鉄絵	丸文	瀬	18
199	112	長石釉＋鉄絵	つた文	瀬	22
200	135	染付	1600～1660年代 草花文	肥	26
201	131	輪ハゲ	17C前半 崩れ・粗な高台内蛇目釉	肥	
202	132	染付	1600～1660年代 松竹梅文	肥	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
203	134	灰釉＋鉄絵	笹文	瀬	28
204	141	灰釉		瀬	
205	813	灰釉＋鉄釉流し掛け	大入れ転用	瀬	18
206	411	灰釉		瀬	
207	411	底部糸切り	口縁部油煙付着	不	
208	411	灰釉	内外面油煙	瀬	
209	234	鉄釉		瀬	
210	311	長石釉＋鉄釉	17世紀末～18C前半 「ヒジリ焼」	瀬	34
211	518		内面煤付着	常	

図118　ＳＫ021出土陶磁器類実測図

ＳＫ401：本遺構の時期は17世紀の第３四半期であると考えられる。

本遺構出土の遺物は口縁部破片数で572点、総個体数44.33個体である。一見して理解し得る点は、供膳具と灯火具が22.7%、69.7%と最も多いことである。このうち灯火具については、98.9%が土器皿であり、この事が全体の比率にも影響を及ぼし、この遺構では72.9%が土器に換って占められている。また、化粧具・喫煙具・調度具が未出土である点も注目される。

以上の面から本遺構の遺物組成は戦国時代のそれに類以しており、前代の様相を色濃く残す遺構であると考えることができる。但し、戦国時代においては従来から椀：皿＝1：2と言われているが、この遺構では椀：皿＝1：1.56とややその比率差が接近してきており、新しい時代の様相と考えられる側面も有しており、注目に値する。

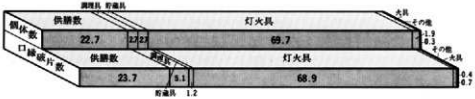
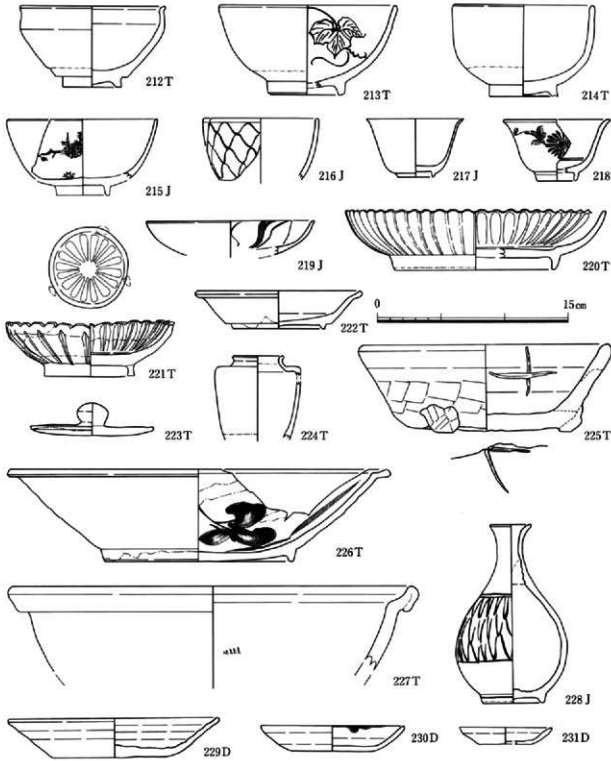


図119　ＳＫ401出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	88	30	0	118	0	92	43	0	135
	椀	0	22	7	0	29	0	28	23	0	51
	小椀	0	0	12	0	12	0	0	9	0	9
	皿	0	58	6	0	64	0	49	7	0	56
	鉢	0	8	5	0	13	0	15	4	0	19
調理具		6	8	0	0	14	13	16	0	0	29
	鍋，釜	6	0	0	0	6	13	0	0	0	13
	鉢					0					0
	擂鉢	0	8	0	0	8	0	15	0	0	15
	瓶	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		0	2	12	0	14	0	3	4	0	7
	瓶	0	0	12	0	12	0	0	4	0	4
	壺	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	甕 A	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	甕 B					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		354	8	0	0	362	388	5	0	0	393
火具		0	10	0	0	10	0	4	0	0	4
化粧具						0					0
喫煙具		0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
喫煙具						0					0
調度具						0					0
他		0	13	0	0	13	0	2	0	0	2
合計		360	130	42	0	532	401	124	47	0	572

表19　ＳＫ401出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
212	111	鉄釉		瀬	22
213	112	灰釉＋鉄絵	馬文	瀬	
214	112	長石釉		瀬	
215	112	赤絵	1670～1690年代 梅と柳文	肥	
216	112	染付	1660～1670年代 網文	肥	
217	125	染付	1650～1680年代 幻想・蘭石獣付砂目痕	肥	
218	125	染付	1640～1650年代 草花文	肥	
219	131	染付	1630～1640年代 ねじり菊文	肥	
220	135	灰釉		瀬	
221	135	灰釉＋銅緑釉	唐花文	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
222	132	灰釉		瀬	
223	013	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	44
224	324	鉄釉		瀬	
225	518		ヘラ刷み	常	
226	143	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	キビ文	瀬	29
227	234	鉄釉		瀬	
228	315	染付	1650～1670年代 網目文・蘭石獣付砂粒付痕	肥	
229	411			不	
230	411		口縁油煙付着	不	
231	411			不	

図120　ＳＫ401出土陶磁器類実測図

ＳＫ304：本遺構の時期は18世紀前葉に比定される。

本遺構の出土遺物は口縁部破片数で1077点、総個体数で142.5個体である。このうち供膳具が68.5個体、50.7%と全体の約半数を占め、調理具8.0個体、5.9%、貯蔵具5.38個体、4.3%を併せると約６割に達する。ついでやはり灯火具が35.33個体、26.1%と多くを占めている。さらに、化粧具・喫煙具・調度具を併せれば、10.83個体、7.6%を有し、これらの比率はほぼ近世の平均値に等しいものである（平均値は供膳具・調理具・貯蔵具で56.0%、灯火具が19.8%、化粧具・喫煙具・調度具で8.0%）。また磁器が28.58個体、20.1%と増加しており、これらの点から用途にみる組成は近世の標準的な比率をみせている。

器種毎の比率で見た場合、供膳具では椀と皿が2.36：１となり、やはり近世的様相を窺うことができる。また調理具で考えた場合、擂鉢・鍋・釜が１：2.86とこれも平均値（１：2.95）に近い数値を見せており、先に見たことを補強し得ると思われる。

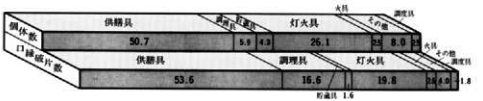
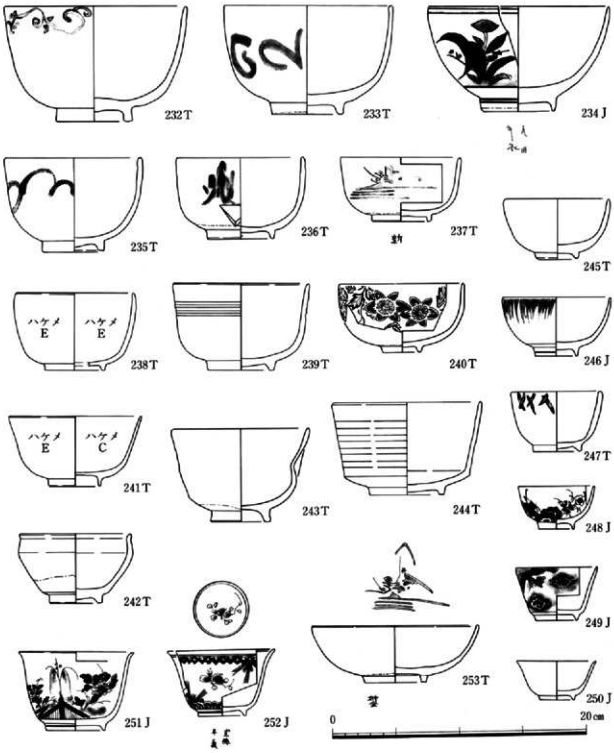


図121　ＳＫ304出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	557	265	0	822	0	405	163	0	568
	椀	0	336	137	0	473	0	269	81	0	350
	小椀	0	16	54	0	70	0	5	38	0	43
	皿	0	167	63	0	230	0	82	32	0	114
	鉢	0	38	11	0	49	0	49	12	0	61
調理具		63	33	0	0	96	136	40	0	0	176
	鍋，釜	63	0	0	0	63	136	1	0	0	137
	鉢	0	11	0	0	11	0	10	0	0	10
	擂鉢	0	22	0	0	22	0	29	0	0	29
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	52	18	0	70	0	13	3	0	16
	瓶	0	41	0	0	41	0	4	0	0	4
	壺	0	3	12	0	15	0	2	1	0	3
	壺Ａ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	壺Ｂ	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2
	鉢	0	6	6	0	12	0	4	2	0	6
	その他					0					0
灯火具		292	132	0	0	424	176	34	0	0	210
火具		12	28	0	0	40	9	19	0	0	28
化粧具		0	48	0	0	48	0	7	0	0	7
神仏具		0	22	18	0	40	0	9	11	0	20
喫煙具		0	21	21	0	42	0	11	4	0	15
調度具		0	40	0	0	40	0	19	0	0	19
蓋		0	67	21	0	88	0	12	6	0	18
合計		367	1000	343	0	1710	321	569	187	0	1077

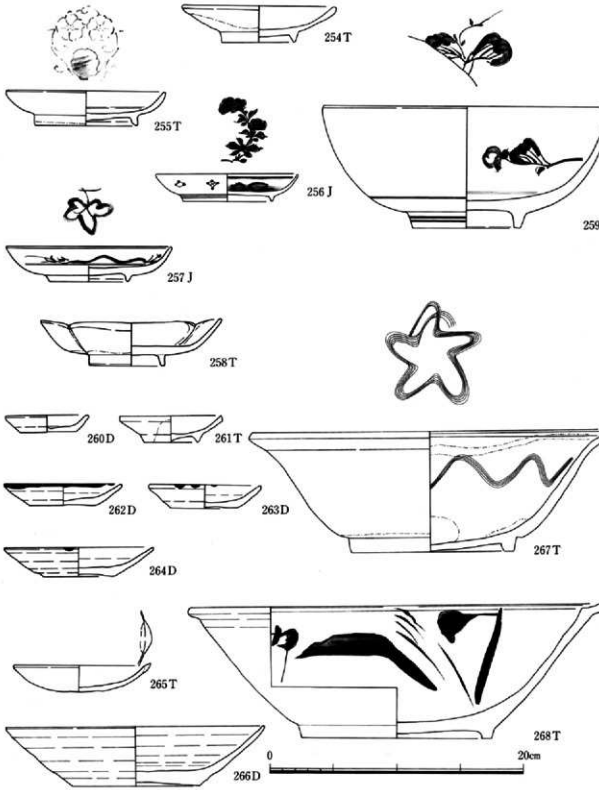
表20　ＳＫ304出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
232	112	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	18
233	112	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	
234	112	染付	17C末～18C前半 口縁文：文様帯間、唐草文	肥	18
235	112	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	22
236	112	灰釉＋呉須絵	山水文	瀬	18
237	112	灰釉＋呉須絵	17C末 桃園山水文・1個（1個?）	肥	18
238	112	透明釉	1690～18C前半 蛸唐草	肥	22
239	118	鉄釉＋灰釉		瀬	
240	112	灰釉＋鉄釉＋呉須＋赤絵	18C前半	京	18
241	116	透明釉	1690～18C前半 蛸唐草	肥	
242	111	鉄釉		瀬	22

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
243	110	透明釉	17C後半～18C前 宝尽み鳥獣紋・鉢合部黒紋	肥	21
244	115	灰釉		瀬	23
245	122	長石釉		不	24
246	112	染付	18C後半 鳥獣文	肥	18
247	122	灰釉＋呉須絵	幾何文	瀬	18
248	122	染付	17C末～18C前半 石に草文・輪違し文	肥	26
249	126	染付	17C末～18C前半 石に草文・輪違し文	肥	25
250	125		17C末～18C 山水・人物	肥	
251	116	染付	17C末～18C前 竹林に小鳥文	肥	26
252	125	染付	18C前半 蛸唐草・文様帯間・鉢合部	肥	25
253	131	灰釉＋呉須絵	17C中 山水文	肥	

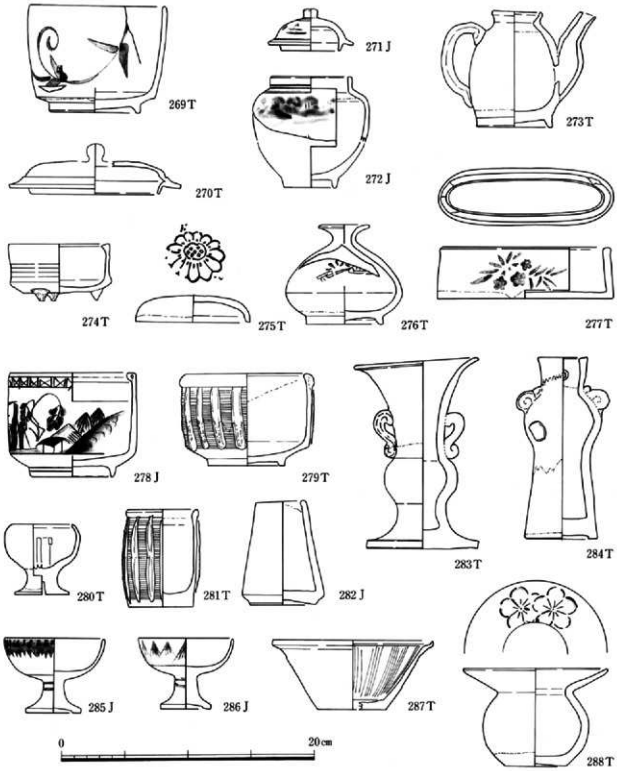
図122　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
254	131	灰釉		瀬	
255	131	灰釉＋鉄釉	花唐草文(スリ絵)	瀬	26
256	131	染付	1650～1690年代 ルソン・ルイ氏系スペインサイ文	肥	26
257	131	染付	17C後半 つた草文＋つた文	肥	26
258	136	灰釉		瀬	
259	141	染付	18C前半～中 草花文＋花文	肥	31
260	411	底部糸切り		不	
261	411	灰釉		肥	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
262	411	底部糸切り	油煙付着	不	
263	411	底部糸切り	油煙付着	不	
264	411	底部糸切り	油煙付着	不	
265	411	鉄釉		瀬	38
266	411		内外面油煙付着	不	
267	143	灰釉＋銅緑チンバン		瀬	29
268	143	灰釉＋鉄絵	きびに鳥文	瀬	29

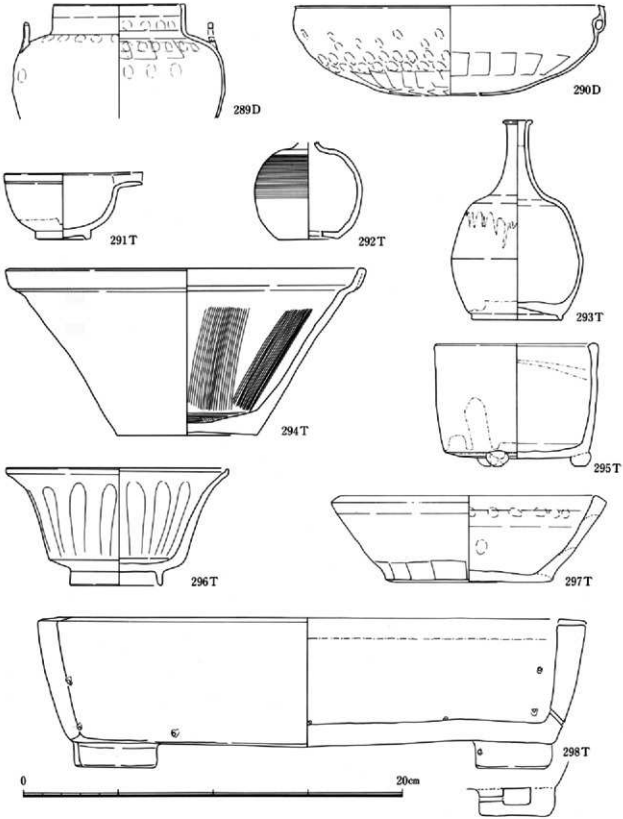
図123　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
269	351	灰釉＋鉄絵	草文	瀬	35
270	014	灰釉	漆継不收	瀬	
271	014	染付	17C 末～18C 前半 出光文	肥	44
272	321	染付	17C 末～18C 前半 出光文	肥	34
273	317	鉄釉		瀬	35
274	721	灰釉		瀬	41
275	016	灰釉＋鉄絵	菊花文	瀬	44
276	622	灰釉＋鉄絵	菊流水文	瀬	39
277	630	灰釉＋鉄絵	（草花文？）	瀬	35
278	721	染付	17C 末～18C 前半 梅和文・樹脂出光文	肥	41 基

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
279	811	鉄釉＋灰釉		瀬	41
280	422	鉄釉		瀬	
281	821	鉄釉＋灰釉		瀬	
282	82-		17C 後半～18C 前 内面：1Mm前後打痕	肥	42
283	932	鉄釉＋灰釉		瀬	40
284	932	鉄釉＋灰釉		瀬	40
285	73-	染付	18C 前半 山路文	肥	35
286	73-	染付	17C 後～18C 初 梅花文	肥	41
287	922	鉄釉		瀬	33
288	961	灰釉＋鉄釉	桜文	瀬	42

図124　ＳＫ304出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
289	210			不	
290	211		外面煤付着	不	32
291	221	灰釉		瀬	
292	312		丸ダスキ	備	33
293	311	鉄釉＋灰釉		瀬	33

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
294	235	鉄釉		瀬	
295	721	鉄釉＋灰釉		瀬	39
296	143	灰釉		瀬	43
297	518		無釉	常	39
298	511	鉄釉	長方形	瀬	39

図125　S K304出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ211：本遺構の時期は18世紀前葉に比定される。

この遺構からの出土遺物は口縁部破片数307点、総個体数30.08個体である。この内供膳具が13.08個体、49.7%と最も多くを占め、調理具が2.08個体、8.0%、貯蔵具が1.58個体、6.0%である。この３者で全遺物の半数以上を占めている。次いでこの遺構では割合的には灯火具が7.17個体、27.2%に達するが、江戸時代当初に比すればその割合は低下している。このことが土器製品の割合を17.7%と大幅に減少させたことの要因になっている。その反面、陶器が75.9%と圧倒的多数を占めるようになっている。

器種別に見た場合、供膳具では椀と皿の比率が2.04：１と逆転し、椀の使用量が明確に増加していることが理解できる。この点を鉢を含めて考えてみると、椀と鉢の比率は8.91：１と近世の平均値13.18：１より比率差が小さく、皿：鉢は4.36：１と平均値の5.19：１に近い比率を示す。このことからして、供膳具に占める椀・皿・鉢の使用量のうち、この時点で椀は未だ増加の途中にあり、皿・鉢は比率的には近世の平均的使用量に近づいているとすることが可能であると言える。

また調理具では鍋・釜が88%と他の器種を圧倒している。

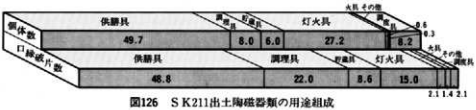
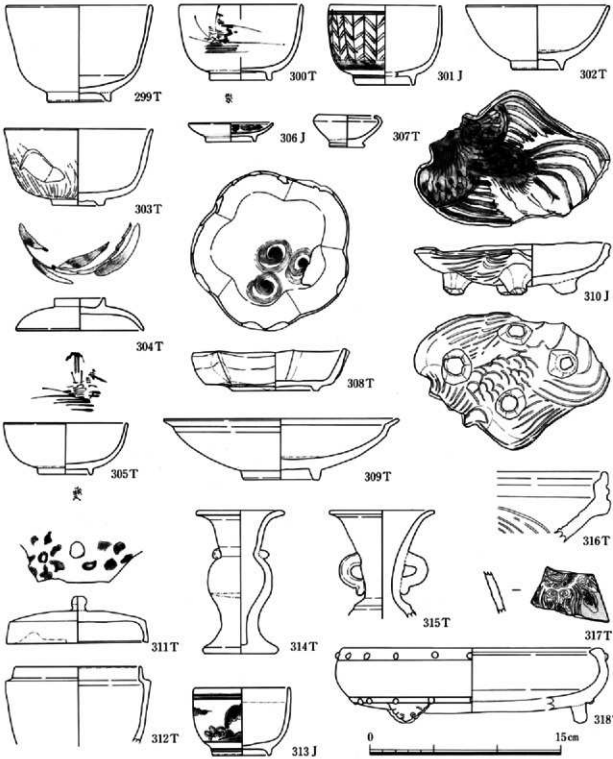


図126　ＳＫ211出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	140	17	0	157	0	136	6	0	142
	椀	0	52	6	0	58	0	54	4	0	58
	小椀	0	40	0	0	40	0	25	0	0	25
	皿	0	37	11	0	48	0	41	2	0	43
	鉢	0	11	0	0	11	0	16	0	0	16
調理具		22	3	0	0	25	50	14	0	0	64
	鍋，釜	22	0	0	0	22	50	0	0	0	50
	鉢	0	1	0	0	1	0	4	0	0	4
	擂鉢	0	2	0	0	2	0	10	0	0	10
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	13	6	0	19	0	23	2	0	25
	瓶	0	3	0	0	3	0	2	0	0	2
	壺	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	甕Ａ	0	2	0	0	2	0	9	0	0	9
	甕Ｂ	0	4	0	0	4	0	6	0	0	6
	鉢	0	4	6	0	10	0	4	2	0	6
	その他					0					0
灯火具		40	46	0	0	86	18	26	0	0	44
火具		2	0	0	0	2	5	1	0	0	6
化粧具		0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
陳仏具						0					0
喫煙具		0	1	0	0	1	0	3	0	0	3
調度具		0	26	0	0	26	0	6	0	0	6
銭		0	45	0	0	45	1	15	0	0	16
合計		64	274	23	0	361	74	225	8	0	307

表21　ＳＫ211出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
299	112	鉄釉		京	
300	112	灰釉＋鉄彩絵	17C 後 山茶碗（型上部） [illegible]	肥	18
301	112	染付	1610～18C 初頭 [illegible]	肥	18
302	114	透明釉	17C 末～18C 前半 [illegible]	肥	22
303	110	灰釉		瀬	24
304	015	灰釉＋鉄釉＋鉄彩絵		瀬	
305	131	灰釉＋鉄彩絵	17C 後 山茶碗（[illegible]） [illegible]	肥	27
306	131	染付	1670～1700年代	肥	
307	900	灰釉		京	38
308	136	灰釉＋鉄彩絵		瀬	31

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
309	132	輪ハゲ・灰釉＋鉄釉	17C 後半～18C 初 [illegible]	肥	39
310	136	染付	1650年代～1670年代 [illegible]	肥	28
311	018	灰釉＋鉄釉	花文	瀬	
312	352	灰釉		瀬	
313	351	鉄彩絵	17C 末～18C 前半 [illegible]	肥	34
314	932	灰釉＋鉄釉		瀬	
315	932	灰釉		瀬	42
316	239			備	
317	310	三彩	16C 前後 [illegible]	その他	35
318	943	灰釉		瀬	43

図127　ＳＫ211出土陶磁器類実測図

ＳＫ206：本遺構の時期は18世紀中葉から後葉に比定される。

ここから出土した遺物は口縁部破片数で1314点、総個体数で140.56個体である。用途別では、供膳具67.42個体、53.4%、調理具9.25個体、7.3%、貯蔵具11.75個体、9.3%で、この３者で全体の64.1%を占める。このうち供膳具は平均値に比してそれを上回っているが、他の２用途はほぼ平均値である。この遺構でも灯火具の減少が見られ、18個体、14.3%となっている。さらに従来、灯火具においては土器製品がその多くを占めていたが、ここでは25.5%で、陶器が74.5%と大半を占めるという逆転現象が起きている。当然のことながら、これが出土遺物全体に占める土器製品比率の低下（7.3%）に繋がっている。また化粧具・喫煙具・調度具で13.49個体、9.6%と平均値よりも多くの遺物が出土していることが知られる。このことは３用途のうち、調度具が多く出土している点に起因していると考えられ、この傾向は近世全体に当てはまる可能性を秘めている。

器種別では、やはり椀と皿が3.75：１でありその使用量に大きな差が見られ、また鍋が調理具の66.7%を占めていることが特徴的である。

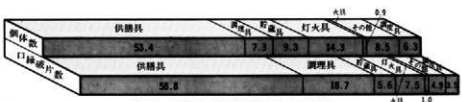
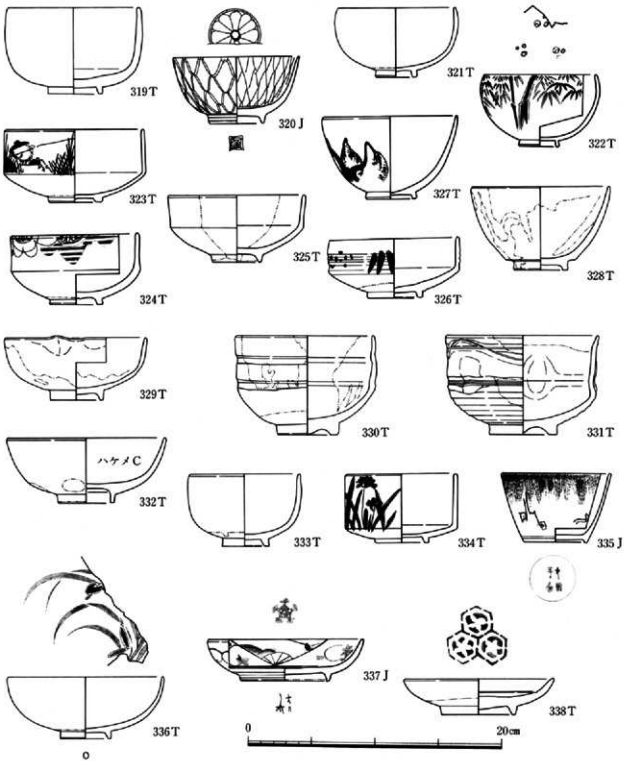


図128　ＳＫ206出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	627	182	0	809	0	601	138	0	739
	椀	0	456	24	0	480	0	432	24	0	456
	小椀	0	11	120	0	131	0	7	86	0	93
	皿	0	150	13	0	163	0	141	16	0	157
	鉢	0	10	25	0	35	0	21	12	0	33
調理具		57	54	0	0	111	141	94	0	0	235
	鍋，釜	57	17	0	0	74	141	18	0	0	159
	鉢	0	11	0	0	11	0	13	0	0	13
	擂鉢	0	20	0	0	20	0	55	0	0	55
	瓶	0	6	0	0	6	0	8	0	0	8
	その他					0					0
貯蔵具		3	114	24	0	141	3	50	17	0	70
	瓶	0	28	0	0	28	0	8	0	0	8
	壺	3	27	0	0	30	3	12	7	0	22
	甕Ａ	0	2	0	0	2	0	3	0	0	3
	甕Ｂ	0	16	0	0	16	0	8	0	0	8
	鉢	0	41	24	0	65	0	19	10	0	29
	その他					0					0
灯火具		55	161	0	0	216	44	50	0	0	94
火具		2	11	0	0	13	2	10	0	0	12
化粧具		0	8	17	0	25	0	8	4	0	12
神仏具		0	50	17	0	67	0	26	5	0	31
喫煙具		0	37	0	0	37	0	19	0	0	19
調度具		0	91	2	3	96	0	42	1	1	44
蓋		6	118	15	0	139	1	46	11	0	58
合計		123	1271	257	3	1654	191	946	176	1	1314

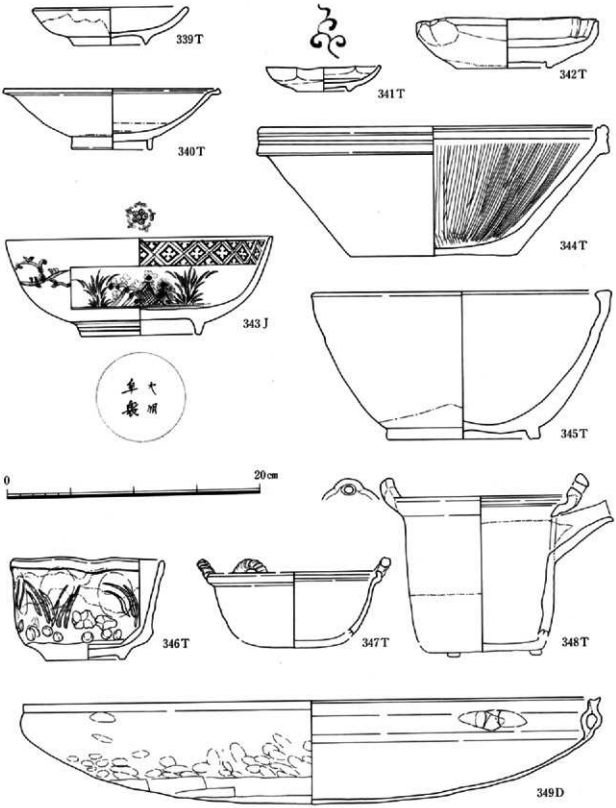
表22　ＳＫ206出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
319	112	灰釉		瀬	22
320	112	絵付	内面：ヘラ状工具による調整。外面：櫛目文＋鋸歯文	肥	18
321	112	灰釉		京	22
322	112	灰釉＋上絵付	竹文・丸文	京	18
323	113	灰釉	葦・サギ文か	京	20
324	113	灰釉＋鉄釉＋その他		京	20
325	113	鉄釉＋灰釉		瀬	23
326	113	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	笹文	瀬	20
327	112	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	柳文	京	20
328	117	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	21

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
329	110	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	18
330	116	灰釉＋鉄釉		瀬	18
331	110	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	21
332	112	透明釉＋長石釉	刷毛目	肥	18
333	112	鉄釉		瀬	24
334	115	灰釉＋鉄絵	蔦唐草文	瀬	20
335	126	絵付	内面：[illegible]。外面：[illegible]＋[illegible]	肥	26
336	131	灰釉＋上絵付	蔦唐草文＋高台内墨書〇」	京	
337	131	絵付	内面：[illegible]。外面：[illegible]	肥	27
338	411	灰釉＋鉄絵	梅亀甲文、油煙付着	瀬	27

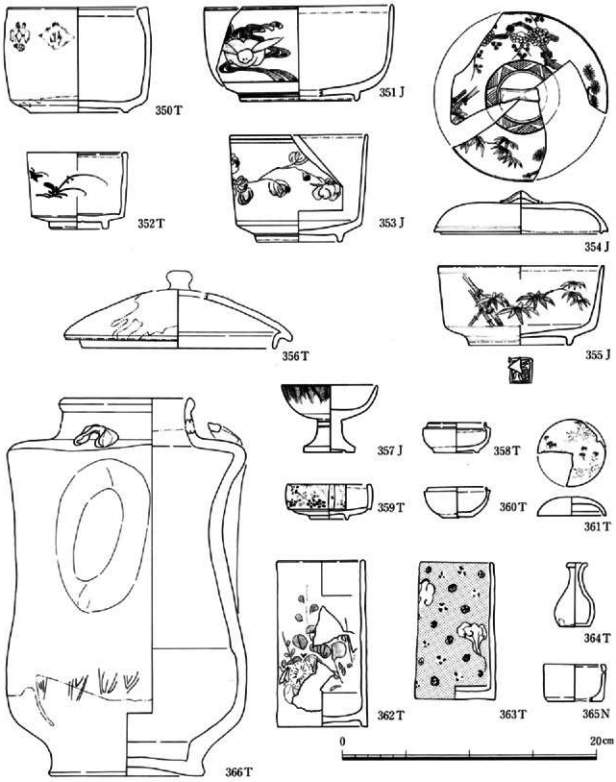
図129　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
339	411	灰釉	外面体部下半施釉付着	瀬	
340	411	輪ハゲ・灰釉	無釉部分油煙付着	瀬	
341	136	灰釉＋鉄絵	唐草文	瀬	28
342	136	灰釉	内面口縁部布目痕	瀬	
343	141	染付	口縁一条線・底部天一＋太唐草	肥前	32
344	239		鍔・縦＋蕨＋九谷焼	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
345	222	鉄釉		瀬	32
346	110	灰釉＋鉄釉流し掛け	草文	瀬	21
347	215	鉄釉		不	32
348	318	鉄釉		瀬	33
349	213			不	

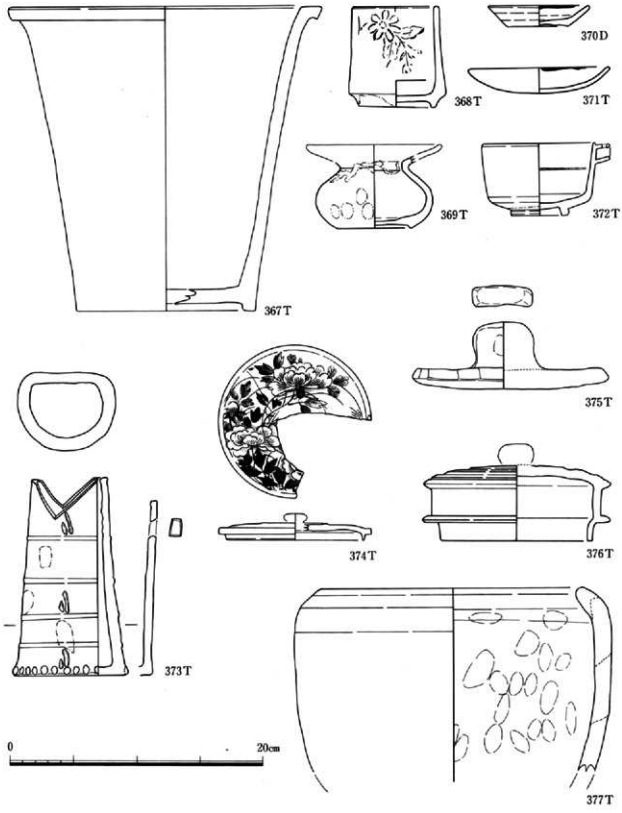
図130　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
350	351	灰釉＋鉄絵		瀬	34
351	351	染付	18C前半～中葉 見込渦点文	肥	34
352	351	灰釉＋鉄絵	瓶に草花文、底部銘付き(銘無)	瀬	
353	351	染付	1800～18C前半 蓮文渦押点	肥	35
354	014	染付	松竹梅文	肥	
355	351	染付	1800～18C前半 松竹梅文＋渦線	肥	34
356	014	鉄釉＋灰釉流し掛け		京	
357	730	染付	18C後 回線文	肥	41
358	740	灰釉		瀬	37

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
359	351	灰釉＋上絵付	竹と梅文＋竹と梅文	京	35
360	740	灰釉	底部墨書銘	京	
361	016	灰釉＋上絵付	瓶文	京	35
362	902	灰釉＋鉄絵	梅花文	瀬	40
363	902	灰釉＋上絵付	花散し文	京	40
364	712	灰釉		瀬	41
365	921	黄釉		不	
366	322	灰釉		丹	34

図131　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
367	950	灰釉		瀬	
368	82-	灰釉＋鉄絵	桜花文・琉脚	瀬	35
369	961	鉄釉＋灰釉流し掛?		瀬	40
370	411	底部糸切り	油煙付着	不	
371	411	底部糸切り・鉄釉	油煙付着	不	
372	901	灰釉＋鉄釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
373	931	灰釉＋呉須散らし		瀬	42
374	014	灰釉＋呉須絵	牡丹文	京	35
375	013		底に煤付着	常	
376	014			不	
377	521			常	

図132　ＳＫ206出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ219：本遺構の時期は18世紀中葉から後葉に位置づけられる。

本遺構からの出土遺物は口縁部破片数814点、総個体数68.35個体である。用途別では供膳具が35.0個体、57.4％と最も多く、次いで灯火具が平均値より少ないものの、7.67個体、12.7％を占める。調理具は5.42個体、9.0％、貯蔵具は4.92個体、8.1％とほぼ平均値を示している。この比率を遺物の材質で見てみれば、灯火具の少なさが影響し、土器製品が4.0個体、5.9％と少なく、磁器が12.42個体、18.3％とその比率を高めている。

器種別に見てみると、椀と皿の比率は2.67：１とさらにその差が開いている。調理具では鍋・釜が5.49個体、90.8％を占め、その他の器種の出土が少量であるため、比率は大きく開いている。貯蔵具は甕の出土を見ず、その他の瓶、壺、鉢が均等に出土している。

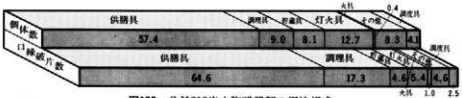
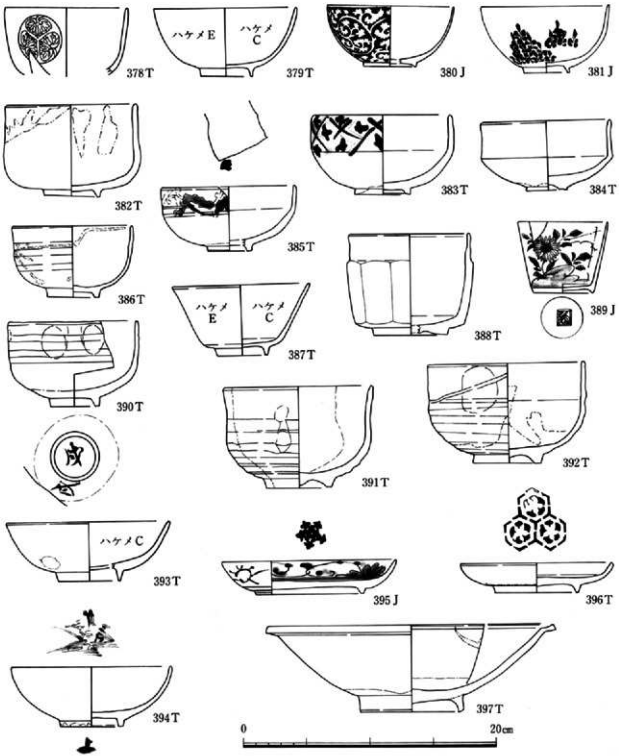


図133　ＳＫ219出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	310	106	0	416	0	248	62	0	310
	椀	0	188	37	0	225	0	161	33	0	194
	小椀	0	0	55	0	55	0	0	23	0	23
	皿	0	91	14	0	105	0	56	6	0	62
	鉢	0	31	0	0	31	0	31	0	0	31
調理具		26	39	0	0	65	62	21	0	0	83
	鍋、釜	26	33	0	0	59	62	13	0	0	75
	鉢	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	擂鉢	0	4	0	0	4	0	6	0	0	6
	瓶	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	その他					0					0
貯蔵具		0	55	4	0	59	0	20	2	0	22
	瓶	0	21	0	0	21	0	2	0	0	2
	壺	0	20	0	0	20	0	5	0	0	5
	甕Ａ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	甕Ｂ					0					0
	鉢	0	14	4	0	18	0	12	2	0	14
	その他					0					0
灯火具		21	71	0	0	92	13	13	0	0	26
火具		1	2	0	0	3	1	4	0	0	5
化粧具		0	6	12	0	18	0	1	1	0	2
神仏具		0	22	1	0	23	0	10	1	0	11
喫煙具		0	8	11	0	19	0	7	2	0	9
調度具		0	30	0	0	30	0	12	0	0	12
不明		0	74	15	0	89	0	16	3	0	19
合計		48	617	149	0	814	76	352	71	0	499

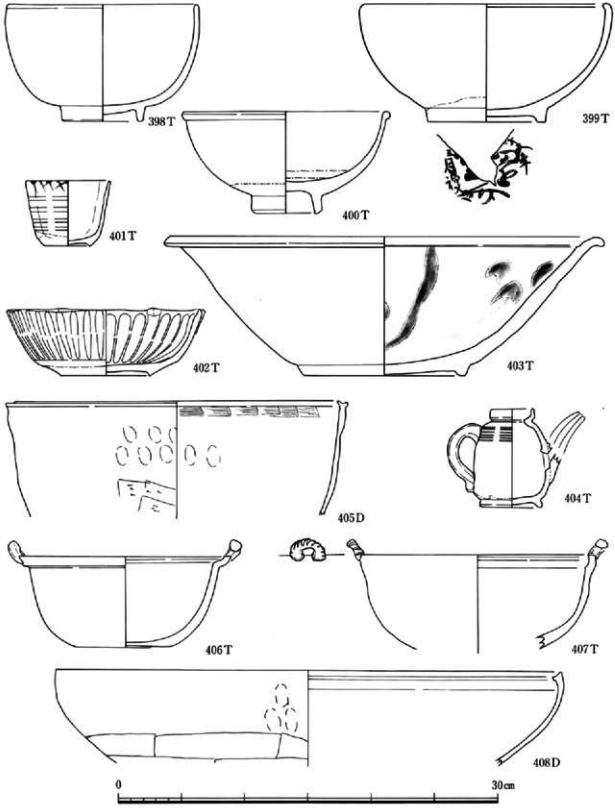
表23　ＳＫ219出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
378	112	灰釉＋鉄絵	三ツ巴文	瀬	18
379	112	透明釉	1090～1140 前半 鳴石群	肥	
380	112	染付	1140 前半 鳴石群	肥	18
381	112	染付	1140 前半 「空五々月九明年賀」	肥	18
382	112	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	21
383	113	灰釉＋鉄絵	雅楽文	瀬	20
384	113	灰釉	鎬込み	京	20
385	113	灰釉＋鉄釉＋鉄釉流し掛け	1140 前半	京	
386	112	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	21
387	116	透明釉	1140 前半 鳴石群	肥	20

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
388	140	灰釉	鎬込み	京	21
389	126	染付	1151 前半 鳴鹿五ヶ瀬川一帯鉄釉	肥	
390	110	灰釉＋鉄釉	「虎」(墨書銘一覧)	瀬	
391	110	鉄釉＋灰釉		瀬	
392	110	鉄釉＋灰釉		瀬	24
393	114	透明釉	1151 前半	肥	
394	131	灰釉＋鉄絵	1140 前～中葉 「五月雨の三郎岡山合戦	京	30
395	131	染付	1140 前～中葉 「雅楽文・唐草文・唐草文・花弁文・反弁花(ランニング)」	肥	26
396	131	灰釉＋鉄絵	梅に亀甲文	瀬	
397	143	灰釉＋鉄釉流し掛け	1140 前半	瀬	31

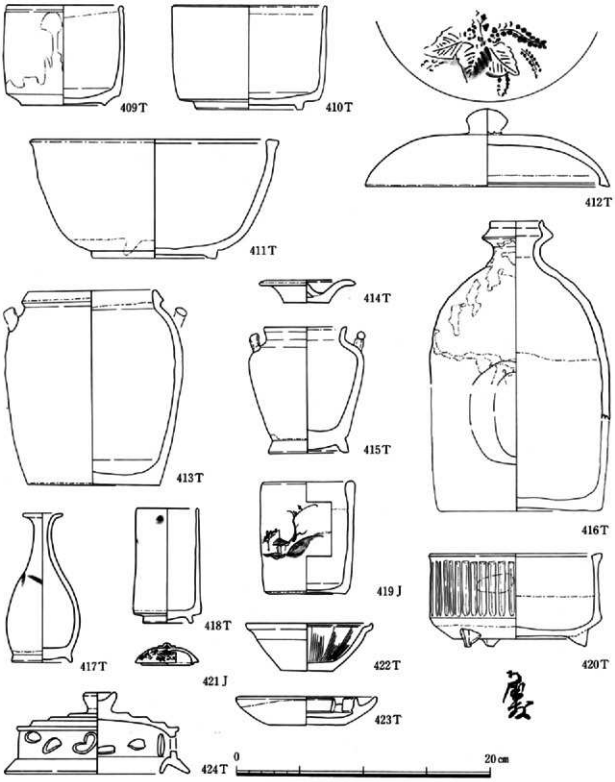
図134　SK219出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
398	141	灰釉		瀬	
399	141	灰釉	16C前半～中葉	瀬	31
400	141	輪ハゲ・灰釉	16C前半～中葉	肥	
401	145	灰釉＋鉄絵	斜格子文	瀬	
402	145	灰釉	高台内墨書板	瀬	
403	143	灰釉＋鉄絵	きび文	瀬	31

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
404	317	鉄釉		瀬	36
405	211			不	
406	215	鉄釉		瀬	32
407	215	鉄釉		瀬	
408	213			不	

図135　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
409	351	鉄釉＋灰釉		京	
410	351	灰釉		瀬	
411	351	灰釉		瀬	32
412	016	灰釉＋鉄絵	桐文	瀬	44
413	321	灰釉		瀬	39
414	011	鉄釉		瀬	43
415	321	鉄釉		瀬	36
416	316	鉄釉		瀬	36

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
417	712	灰釉＋呉須絵		瀬	41
418	902	灰釉＋鉄釉		瀬	42
419	821	青磁釉＋染付	12C末～13C前半 龍泉窯系	肥	40
420	812	灰釉＋呉須	「御屋敷」	瀬	41
421	014	呉須絵	12C前半 龍泉窯系	肥	
422	922	鉄釉		瀬	33
423	412	鉄釉		瀬	38
424	019		内面煤付着	不	

図136　ＳＫ219出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ123：本遺構の時期は18世紀中葉から19世紀初頭に位置づけられる。

本遺構からの出土遺物は、口縁部破片数で782点、総個体数で102.58個体である。ここでもやはり供膳具が44.12個体、45.7%を占め最も多く、次いで灯火具が36.75個体、38.1%を占める。これに対し、調理具4.0個体、4.2%、貯蔵具3.67個体、3.8%とその割合が低下しており、その他の同時期の遺構とは様相をやや異にしている。先にも述べたように、灯火具の比率の増減は土器製品、即ち土器皿に拠るところが大きく、本遺構の灯火具のうち74.4%がそれに拠って占められており、全体でも29.5%とその割合を増加させることにつながっている。そして、この様な組成を持つ遺構は土器皿の使用頻度の高い空間に隣接して構築されていたと言える。但し、戦国時代との相違は、全体に占める割合がそれでもなお少数であること、そして磁器製品の割合が18.3%に増加していることにある。

器種別では、椀と皿の比率が3.88：１とほぼ４倍に近づいている。これは鉢との比率比較から、皿の若干の減少と椀の増加の両面からの結果である。また擂鉢と鍋の比率は１：3.18とほぼ平均値となっている。

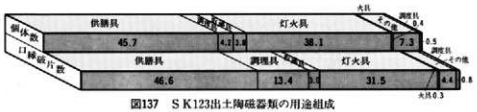
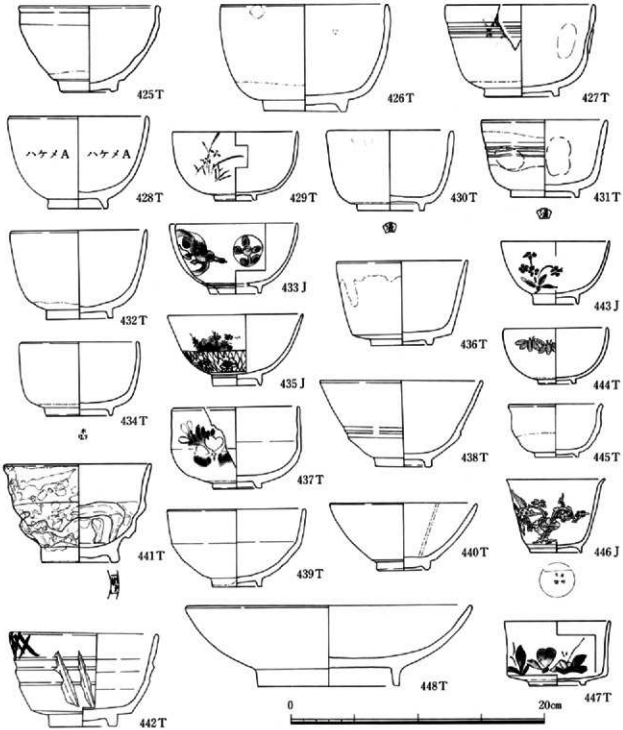


図137　ＳＫ123出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	363	167	0	530	0	235	119	0	354
	椀	0	232	63	0	295	0	152	65	0	217
	小椀	0	25	72	0	97	0	15	34	0	49
	皿	0	73	28	0	101	0	45	15	0	60
	鉢	0	33	4	0	37	0	23	5	0	28
調理具		35	13	0	0	48	79	23	0	0	102
	鍋，釜	35	0	0	0	35	79	0	0	0	79
	注	0	2	0	0	2	0	8	0	0	8
	擂鉢	0	11	0	0	11	0	15	0	0	15
	瓶					0					0
	その他					0					0
貯蔵具		0	35	9	0	44	0	20	3	0	23
	瓶	0	26	0	0	26	0	4	0	0	4
	壺	0	5	9	0	14	0	3	2	0	5
	甕Ａ	0	3	0	0	3	0	12	0	0	12
	甕Ｂ	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	鉢	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	その他					0					0
灯火具		328	113	0	0	441	202	37	0	0	239
火具		0	5	0	0	5	0	2	0	0	2
化粧具		0	0	8	0	8	0	0	4	0	4
神仏具		0	54	2	0	56	0	20	2	0	22
喫煙具		0	12	9	0	21	0	2	5	0	7
調度具		0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
他		0	42	30	0	72	0	13	10	0	23
合計		363	643	225	0	1231	281	358	143	0	782

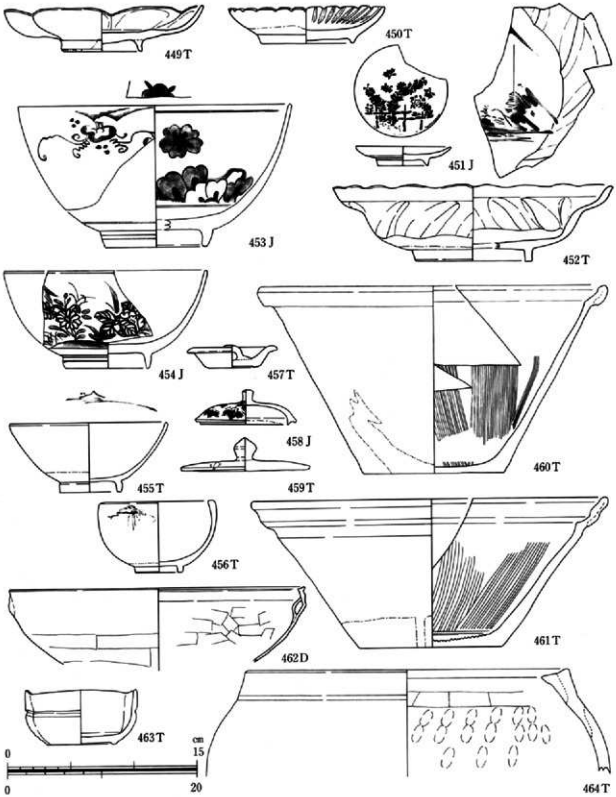
表24　ＳＫ123出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
425	111	鉄釉		瀬	22
426	112	灰釉＋鉄釉		瀬	18
427	112	灰釉＋呉須絵		瀬	
428	112	灰釉	17C 後半～18C 初 瀬戸	肥	18
429	112	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	高麗文	京	18
430	112	灰釉＋呉須絵	「清」（刻印）	瀬	18
431	118	鉄釉＋灰釉	「清」（刻印）	瀬	21
432	112	灰釉		瀬	22
433	112	透明釉＋染付	18C 後半～19C 肥前系陶器産地	肥	22
434	112	灰釉＋呉須絵	18世紀 京焼 京都 八坂 八坂（刻印）	京	
435	112	染付	網目に花文（桜一部型紙）	肥	18
436	116	鉄釉＋灰釉		瀬	19

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
437	113	灰釉＋鉄絵＋白泥	桜花文	京	20
438	114	灰釉		瀬	21
439	113	灰釉		瀬	
440	114	鉄釉＋灰釉		瀬	20
441	110	灰釉＋鉄釉	「瀬戸」（刻印）	瀬	21
442	710	灰釉＋鉄絵	斜格子文	瀬	21
443	112		17C 末～18C 初 有田	肥	26
444	122	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	笹文	京	
445	125	鉄釉		瀬	25
446	125	染付	18世紀～19世紀 瀬戸・美濃 肥前系陶磁産地・（宮明考察）	肥	26
447	124	灰釉＋鉄釉＋白泥	桜文(?)	京	20
448	131	高台内釉ハギ・灰釉		肥	

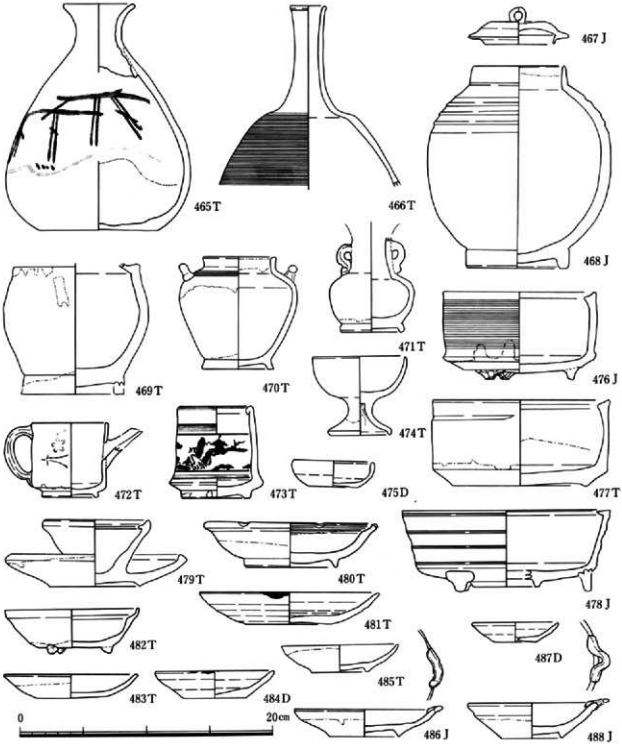
図138　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
449	136	灰釉		瀬	28
450	135	灰釉＋緑釉流し掛		瀬	28
451	131	染付	底面＝輪ビ痕有 見込蛇ノ目釉剥ぎ（焼成）	肥	27
452	145	灰釉＋呉須絵	内面＝ヘラ 底面＝ヘラ	京	
453	041	染付	底面＝輪ビ痕有 内面＝ヘラ・蛇ノ目文・縁つなぎ線	肥	28
454	141	染付	底面＝輪ビ痕 蛇ノ目文	肥	28
455	141	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	ヘラ・後ケズリ・輪ビ痕有 山水文	京	20
456	141	灰釉＋鉄絵	草文	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
457	011	鉄釉		瀬	43
458	014	染付	飛文	肥	44
459	013	鉄釉＋銅緑釉流し掛		瀬	43
460	235	鉄釉		瀬	
461	236	鉄釉		瀬	
462	213			不	
463	146	灰釉	四角形	瀬	31
464	332		内面赤褐色・外面黒褐色	堺	

図139　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
465	315	灰釉＋鉄絵	12後～13初まで 大鹿窯跡	瀬	34
466	312		18C 前半どまり	常	
467	014		青磁	肥	34
468	321		15C～16C中代 青磁・高台砂目跡	肥	34
469	321	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	34
470	822	鉄釉＋灰釉流し掛け	口縁部敲打痕	瀬	34
471	932	灰釉		瀬	42
472	318	灰釉＋鉄絵		瀬	29
473	82-	呉須絵	17C末～18C初 陸路絵付手	肥	35
474	73-	灰釉		京	
475	411		底部墨書板	不	
476	721	鉄釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
477	721	鉄釉		瀬	37
478	721		16C～18初代 青磁・神仙台跡	肥	
479	421	鉄釉		瀬	38
480	411	灰釉＋鉄絵流し掛け		瀬	28
481	411	底部糸切り	油煙付着	不	38
482	410	鉄釉	転用品	瀬	
483	411	灰釉	油煙付着	瀬	
484	411	底部糸切り	油煙付着	不	38
485	411	灰釉	油煙付着	瀬	38
486	411	鉄釉		瀬	
487	400		焼成後穿孔・カキ立に転用	不	38
488	411	灰釉		瀬	38

図140　ＳＫ123出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ212：本遺構の時期は18世紀後葉から19世紀初頭に比定される。

出土遺物は口縁部破片数で881点、総個体数で53.83個体である。この遺構では灯火具が25.42個体、51.9％と最も多く、次いで供膳具が10.42個体、21.3％の出土をみている。さらに調理具が2.5個体、5.1％とやや少なめであるのに対し、貯蔵具は5.75個体、11.7％と多めに出土している。これは本来低比率に留まっていた常滑産の甕Ａが1.75個体、貯蔵具の30.4％に達していることにその原因を求めることができる。その反面、供膳具が低率である点については、皿が0.75個体、鉢に至っては出土０という状況が大きく影響している。従って当然のことながら、椀と皿の比率は12.89：１という数値になる。貯蔵具の増加は瓶の出土量の増加に拠るもので、さきにみた近世後半へ向けての増加傾向をここでも見て取ることができる。

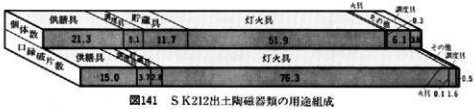
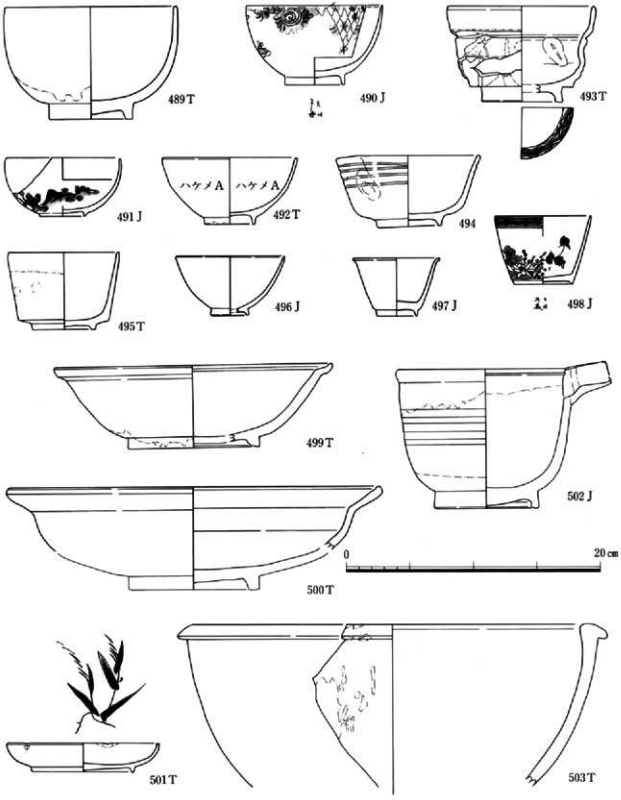


図141　ＳＫ212出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	55	70	0	125	0	76	54	0	130
	椀	0	45	26	0	71	0	56	17	0	73
	小椀	0	3	42	0	45	0	1	34	0	35
	皿	0	7	2	0	9	0	18	3	0	21
	鉢	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
調理具		12	18	0	0	30	16	16	0	0	32
	鍋，釜	12	2	0	0	14	16	5	0	0	21
	鉢	0	5	0	0	5	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
	瓶	0	5	0	0	5	0	2	0	0	2
	その他					0					0
貯蔵具		0	69	0	0	69	0	25	0	0	25
	瓶	0	36	0	0	36	0	5	0	0	5
	壺	0	12	0	0	12	0	1	0	0	1
	甕Ａ	0	21	0	0	21	0	19	0	0	19
	甕Ｂ					0					0
	鉢					0					0
	その他					0					0
灯火具		290	15	0	0	305	658	4	0	0	662
火具		0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
化粧具		0	4	12	0	16	0	1	1	0	2
喫煙具		0	4	10	0	14	0	5	6	0	11
喫煙具		0	6	0	0	6	0	1	0	0	1
調度具		0	12	8	1	21	0	2	1	1	4
他		0	56	2	0	58	0	12	1	0	13
合計		302	241	102	1	646	674	143	63	1	881

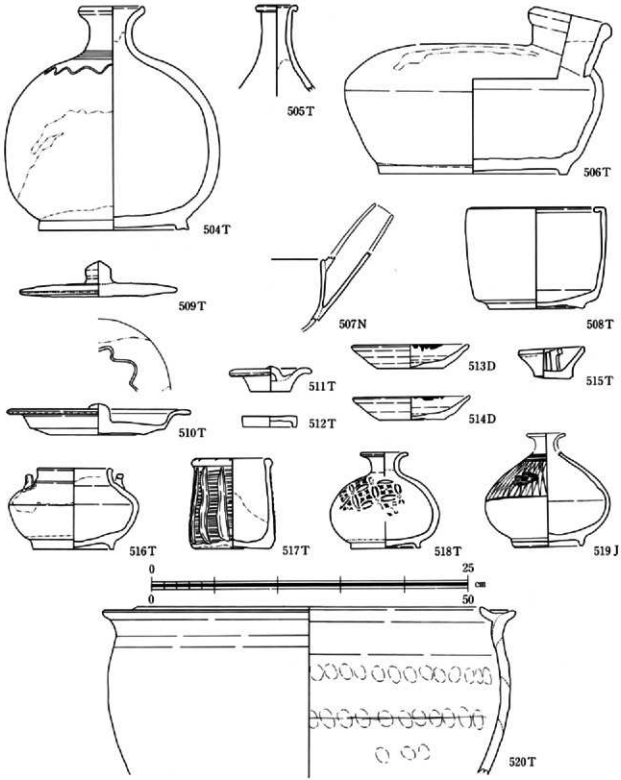
表25　ＳＫ212出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
489	112	灰釉		瀬	18
490	112	染付	16世紀～17C 初 二重圏線 [1]、文様不鮮	肥	19
491	112	染付	18C 前半中葉 山水文	肥	18
492	114	灰釉	胡毛目	肥	
493	110	鉄釉＋灰釉		瀬	24
494	110	灰釉		瀬	24
495	115	鉄釉＋灰釉		瀬	23
496	124		18C 前半 円盤口縁・外面沓痕	肥	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
497	125		17C 後半～18C 前半 口縁	肥	
498	126	染付	17C 末～18C 前半　外面 [1]＋ [2] 内花文＋文様不鮮、唐草？	肥	26
499	143	鉄釉		瀬	
500	143	灰釉		肥	
501	411	灰釉＋鉄絵	きび文・油滴付着	瀬	28
502	221	鉄釉＋灰釉流し掛？		瀬	
503	222	灰釉＋鉄釉流し掛？		瀬	

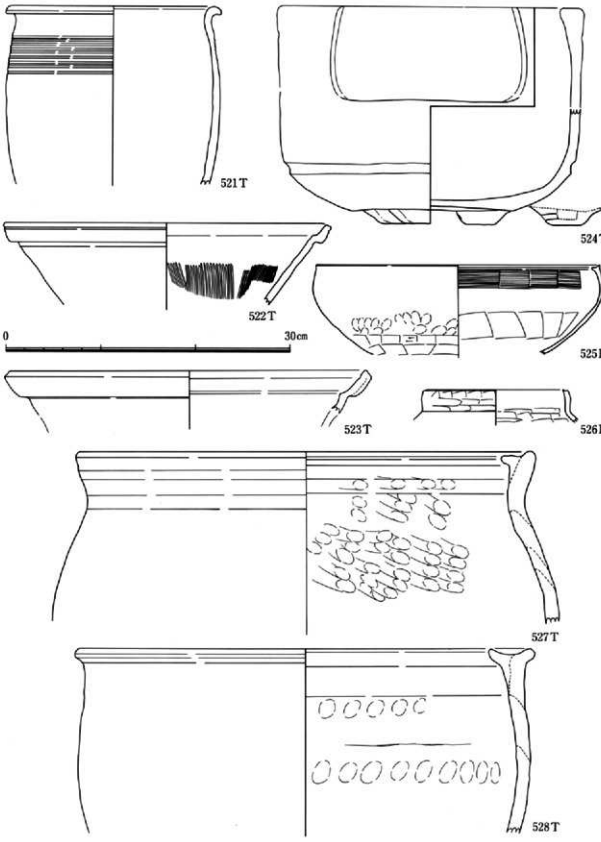
図142　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
504	315	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	34
505	311	灰釉		瀬	
506	310	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	36
507	214	灰釉	被熱	不	
508	721	高台部鉄釉	12C末～13C前半	肥	41
509	013	鉄釉+灰釉飛ばし		瀬	
510	011	鉄釉+灰釉	内面煤付着	瀬	43
511	011	鉄釉		瀬	
512	016	灰釉	内面黒書痕	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
513	411	底部糸切り	油煙付着	不	
514	411	底部糸切り	油煙付着	不	
515	423	灰釉		瀬	38
516	322	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	34
517	820	鉄釉+灰釉		瀬	35
518	622	灰釉+鉄絵	七宝文、底部墨書痕	瀬	39
519	622	赤絵	17C前半	肥	40
520	333		明黄褐色	常	

図143　ＳＫ212出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
521	344	鉄釉		瀬	
522	234	鉄釉		瀬	
523	236	鉄釉		瀬	
524	513	鉄釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
525	213			不	
526	210			不	
527	332			常	
528	333		にぶい黄橙	常	

図144　SK212出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ010：本遺構の時期は19世紀前葉に比定される。

この遺構からの出土遺物は口縁部破片数で381点、総個体数で39.08個体に及ぶ。この遺構の用途の組成の特徴は、供膳具が30.50個体、83.2％と約８割を占めている点である。これは供膳具のうちで椀・皿・鉢を比較してみると、椀：皿=1.15：１、椀：鉢=3.91：１、皿：鉢=１：0.29となり、江戸時代の平均値を考慮に入れれば、椀の出土量が少なく、皿が倍近く出土していることが読み取れる。

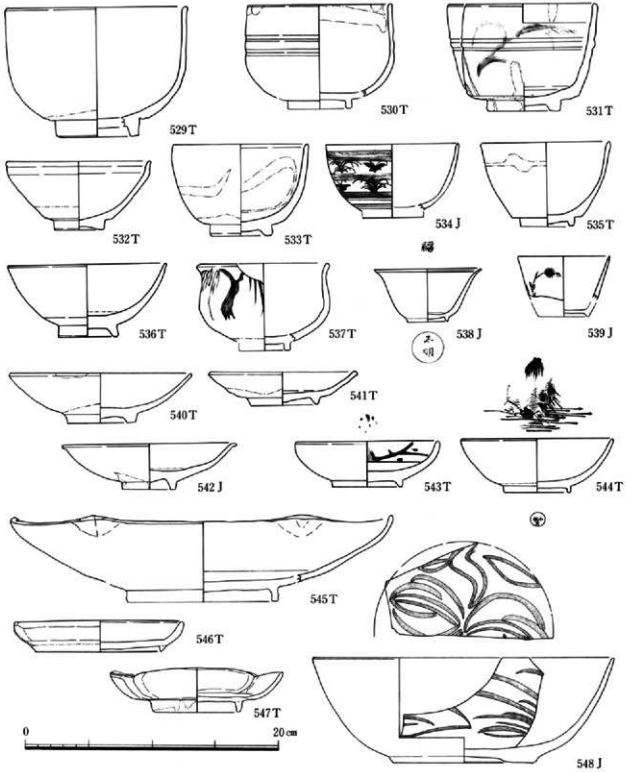
他の用途の遺物については調理具・貯蔵具に関してはいずれも出土量が少ないため、用途間での比率については他の遺構と数字を大きく異にするが、内部の器種別比率については、調理具は鍋・釜が少ない点、貯蔵具は瓶が中心である点以外は平均的構成をしていると言える。

材質面では、陶器が32.0個体、81.9％と圧倒的多数を占め、次いで磁器が5.92個体、15.1％、土器が0.92個体、2.3％となり、土器製品が極端に少量であることが判る。これは灯火具の比率の低さに起因していると考えられる。

図145　ＳＫ010出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	305	61	0	366	0	242	48	0	290
	椀	0	119	20	0	139	0	105	23	0	128
	小椀	0	6	27	0	33	0	3	12	0	15
	皿	0	136	14	0	150	0	82	12	0	94
	鉢	0	44	0	0	44	0	52	1	0	53
調理具		0	18	0	0	18	2	30	0	0	32
	鍋，釜	0	3	0	0	3	2	3	0	0	5
	鉢	0	2	0	0	2	0	4	0	0	4
	擂鉢	0	5	0	0	5	0	17	0	0	17
	敷	0	8	0	0	8	0	6	0	0	6
	その他					0					0
貯蔵具		0	7	6	0	13	0	3	2	0	5
	瓶	0	6	0	0	6	0	2	0	0	2
	壷					0					0
	甕Ａ					0					0
	甕Ｂ	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
	鉢	0	0	6	0	6	0	0	2	0	2
	その他					0					0
灯火具		11	12	0	3	26	18	8	0	2	28
火具		0	4	0	0	4	1	6	0	0	7
化粧具		0	0	2	0	2	0	1	1	0	2
仏具		0	1	2	0	3	0	2	1	0	3
喫煙具		0	5	0	0	5	0	4	0	0	4
調度具		0	3	0	0	3	0	5	0	0	5
人形		0	22	0	0	22	0	7	0	0	7
合計		11	384	71	3	469	21	308	52	2	381

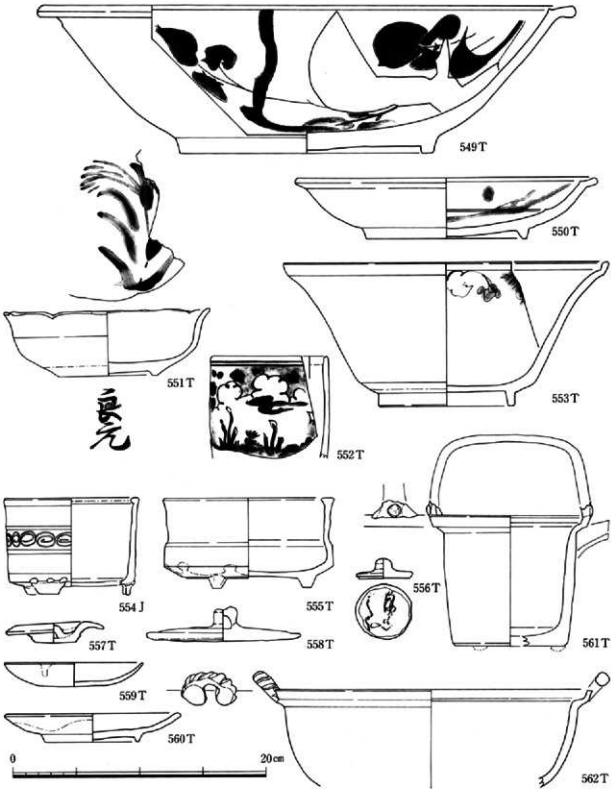
表26　ＳＫ010出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
529	112	灰釉		瀬	
530	118	灰釉+鉄釉流し掛け		瀬	
531	110	白化釉+鉄釉+白泥	きび文	瀬	21
532	111	鉄釉+化粧掛け		瀬	
533	112	鉄釉		瀬	
534	112	染付	17C末～18C前半 鶴と花文	肥	
535	117	鉄釉+灰釉		京	24
536	114	見込輪ハゲ・灰釉	18C前半	肥	
537	116	灰釉+鉄釉		瀬	
538	125	染付	1650～1660年代 「恵比寿」+「左号」+「恵比寿」+「福」	肥	25

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
539	126	赤絵	17C中～18C前半 「福」+「恵比寿」 17C後半	肥	26
540	131	輪ハゲ・ 灰釉+鉄釉		瀬	
541	131	灰釉		瀬	
542	132	輪ハゲ	青磁・高台砂目痕	肥	
543	131	灰釉+鉄絵	梅文+八曜	瀬	27
544	131	灰釉+鉄絵	「17C後半 「十郎太」「利兵衛」+山水文	肥	27
545	137	灰釉	17C	瀬	
546	136	長石釉		瀬	31
547	136	灰釉		瀬	31
548	141	蛇ノ目高台、鉄釉	1650～1660年代 唐草・花文か	肥	

図146　ＳＫ010出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
549	143	長石釉+鉄絵+錆釉	ツタ文	瀬	29
550	143	長石釉+鉄釉	筆飲らし	瀬	31
551	146	灰釉+鉄釉	底部墨書・蓮文	瀬	32
552	351	染付	底部墨書	肥	35
553	143	透明釉+呉須絵	ぶどう文	肥	32
554	721	横櫛・沈線等代	円盤・足貼付	肥	
555	812	鉄釉	口縁・内外底部煤付着、口縁部打痕	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
556	013	灰釉	墨書痕	瀬	
557	011	鉄釉+灰釉流し掛け	底部墨痕あり	瀬	43
558	013	鉄釉		瀬	
559	411	鉄釉	口縁部油煙付着	瀬	
560	411	灰釉	外面油煙付着	瀬	
561	242	鉄釉+灰釉流し掛け		瀬	33
562	215	鉄釉		瀬	

図147　S K010出土陶磁器類実測図(2)

S K002：本遺構の時期は18世紀中葉から19世紀初頭に比定されるが、18世紀後葉の遺物は少量である。

この遺構からの出土遺物は、口縁部破片数で1330点、総個体数で140.17個体である。用途別の占有率は、供膳具50.17個体、40.1%、調理具11.25個体、9.0%、貯蔵具6.92個体、5.5%、灯火具43.58個体、34.9%、神仏具5.83個体、3.7%、化粧具・喫煙具・調度具5.89個体、4.2%である。この様に見た場合、神仏具以下は多少の増減はするものの、あまり大幅な数値の変動は窺えない。これに対し、他の4用途の遺物は遺構により出土量の変化が大きく、この数値の変化が個別遺構における組成の変化に直結していると言える。中でも供膳具と灯火具はその変動幅が大きく、見方を変えれば、何らかの相関関係を持っているのかも知れない。それは今回の遺物の分類に起因するものか(例えば、土器皿の扱い)、近世の生活様式に起因しているのかは定かではない。分類方法を含めた今後の検討課題である。

器種別に見た場合、椀と皿は2.62：1、擂鉢と鍋は1：2.60とほぼ近世の平均的比率を示している。また複数の用途に跨がる鉢・瓶については、明確な比較対象が特定しにくいが、瓶については時代が下がるにつれて皿との比率差は縮まる傾向にある。

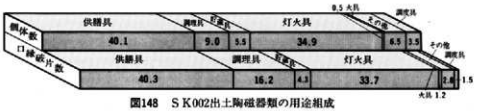
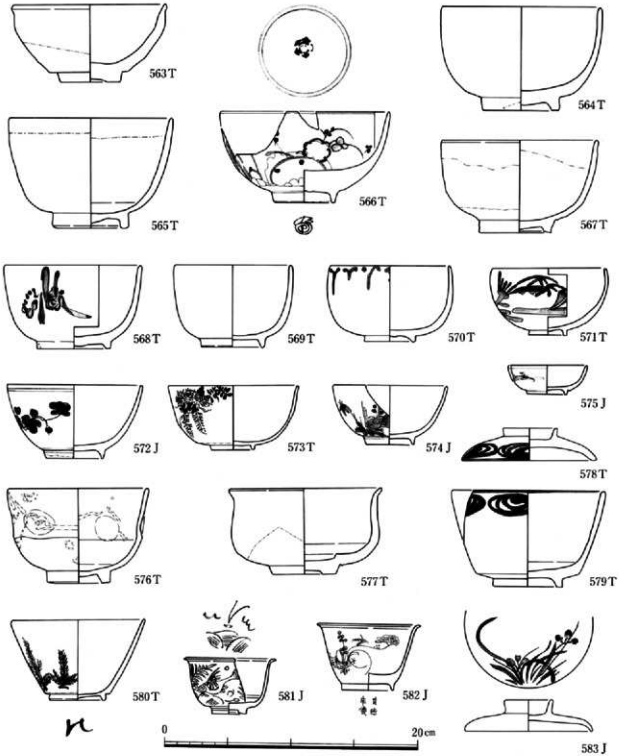


図148　S K002出土陶磁器類の用途組成

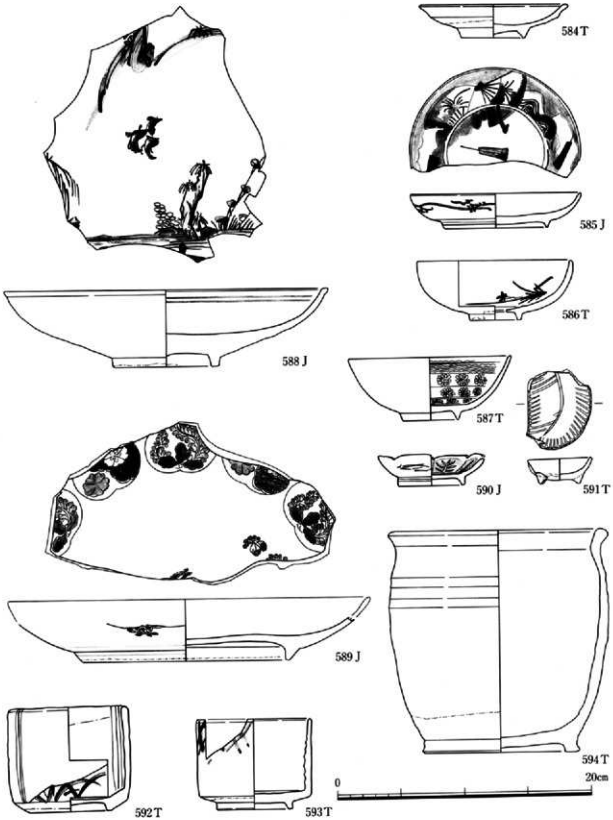
用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	352	250	0	602	0	330	189	0	519
	椀	0	231	103	0	334	0	220	97	0	317
	小椀	0	1	63	0	64	0	4	31	0	35
	皿	0	97	55	0	152	0	86	44	0	130
	鉢	0	23	29	0	52	0	20	17	0	37
調理具		54	81	0	0	135	125	84	0	0	209
	鍋，釜	54	11	0	0	65	125	7	0	0	132
	鉢	0	6	0	0	6	0	12	0	0	12
	擂鉢	0	25	0	0	25	0	48	0	0	48
	瓶	0	39	0	0	39	0	17	0	0	17
	その他					0					0
貯蔵具		0	78	5	0	83	0	49	7	0	56
	瓶	0	30	0	0	30	0	9	0	0	9
	壺	0	19	1	0	20	0	8	1	0	9
	甕A	0	10	0	0	10	0	13	0	0	13
	甕B	0	7	0	0	7	0	4	0	0	4
	鉢	0	12	4	0	16	0	15	6	0	21
	その他					0					0
灯火具		437	86	0	0	523	392	43	0	0	435
火具		1	7	0	0	8	3	12	0	0	15
化粧具		0	16	2	0	18	0	6	1	0	7
神仏具		15	39	16	0	70	7	10	5	0	22
喫煙具		0	9	0	0	9	0	7	0	0	7
調度具		0	51	1	0	52	0	18	1	0	19
量		0	187	15	0	182	0	37	4	0	41
合計		507	886	289	0	1682	527	596	207	0	1330

表27　S K002出土陶磁器類集計表



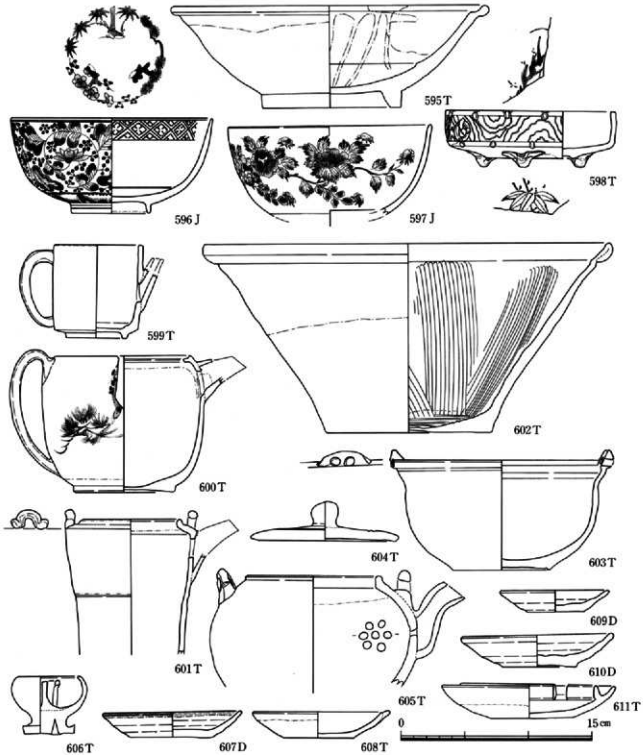
番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
563	111	鉄釉		瀬	
564	112	灰釉		瀬	19
565	112	鉄釉＋灰釉		瀬	19
566	112	染付	型紙文＋調整・左斜線（クシ・ヘラ状刷毛）	肥	
567	112	鉄釉＋灰釉		瀬	
568	112	灰釉＋鉄泥絵	山水文	京	19
569	112	灰釉	17C後半～18C初頃の可能性が高い	京	
570	112	黄釉＋銅緑釉	練込み	京	19
571	112	灰釉＋鉄釉＋上絵付	笹と菊文・底部墨痕あり	瀬	19
572	112	鉄泥絵	18C～19C中頃	肥	22
573	112	上絵付	19C 松と鶴文	京	19
574	112	染付	1800～18C前半	肥	19
575	122	染付	型紙文	肥	
576	113	鉄釉＋灰釉飛らし	型紙文（？）	瀬	20
577	116	灰釉	高台周辺被熱	瀬	
578	015	長石釉＋鉄絵	馬の目文	瀬	25
579	110	長石釉＋鉄絵	馬の目文	瀬	24
580	117	灰釉＋鉄絵	小杉文	瀬	24
581	125	染付	17C前～中頃	肥	25
582	125	染付	1800～18C前半	瀬	26
583	015	長石釉＋鉄絵＋染付	草花文（「花鳥年知」）	京	28

図149　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
584	132	灰釉		瀬	30
585	131	染付	口縁部平 内面文・雷文	肥	27
586	913	灰釉＋鉄絵	花文・桃水鉢に転用	瀬	43
587	131	灰釉	口縁部平 高台文・雷丸文、三島手	肥	32
588	131	染付	山水文・砂粒土目痕	肥	27
589	131	染付	唐草文	肥	25
590	136	染付	口縁部一段下に段 外面文・十字紋、他はとち	肥	
591	136	灰釉		瀬	
592	811	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	草文	京	
593	351	灰釉＋鉄絵		瀬	
594	344	鉄釉		瀬	

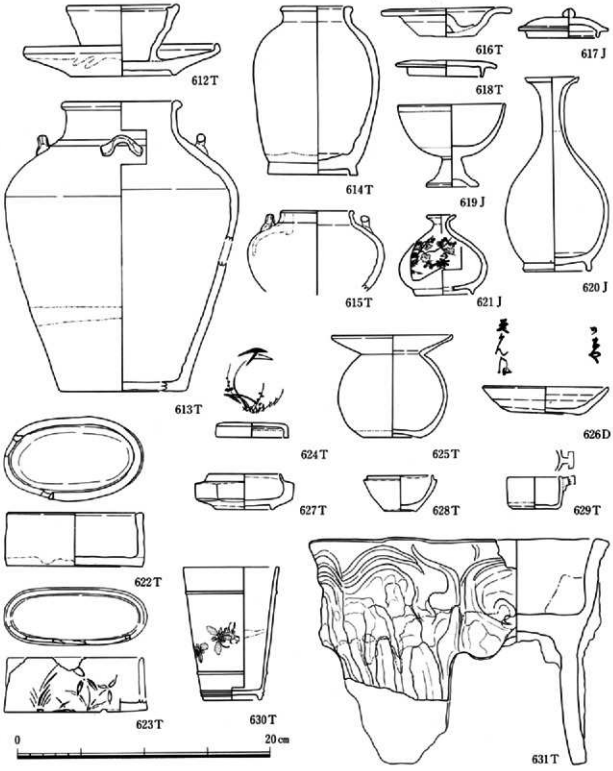
図150　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
595	143	銅緑釉＋施釉	内面研毛目	肥	29
596	141	染付	口縁内面沈線付 外面内面文・胴下半・櫛状切片輪文	肥	29
597	141	染付	口縁内面SBC連弁 胴下半	肥	28
598	140	灰釉＋鉄絵	外面底部格文・足込輪文	瀬	32
599	318	灰釉		瀬	36
600	242	灰釉＋鉄絵	松文	京	29
601	245	灰釉＋鉄釉		瀬	
602	235	鉄釉		瀬	
603	215	鉄釉	口縁中	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
604	013	鉄釉		瀬	43
605	241	鉄釉		瀬	33
606	422	鉄釉	底部砂粒付着	瀬	38
607	411	底部糸切り	油煙付着	不	
608	411	灰釉	外面油煙付着	瀬	
609	411	底部糸切り		不	
610	411	底部糸切り		不	
611	412	鉄釉		瀬	

図151　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
612	412	鉄釉		瀬	
613	322	長石釉＋鉄釉	信玄茶壺		
614	322	鉄釉		瀬	36
615	322	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	36
616	011	鉄釉		瀬	43
617	014		17C後半 /24㎝	肥	44
618	017	灰釉		瀬	
619	730	外須	17C後半	肥	
620	712		17C中葉 /14㎝	肥	41
621	622	染付	18C前半 松竹梅文	肥	39

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
622	630	灰釉		瀬	35
623	630	灰釉＋鉄絵	草花文	瀬	35
624	016	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	草花文	瀬	35
625	961	長石釉	17C後半～18C前半	瀬	
626	700	底部糸切り		不	41
627	740	灰釉		瀬	38
628	740	灰釉		瀬	
629	921	灰釉		瀬	42
630	903	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	花文	京	42
631	943	鉄釉＋灰釉＋呉須絵		瀬	

図152　ＳＫ002出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ207：本遺構の時期は18世紀末を中心として19世紀初頭にかけてである。

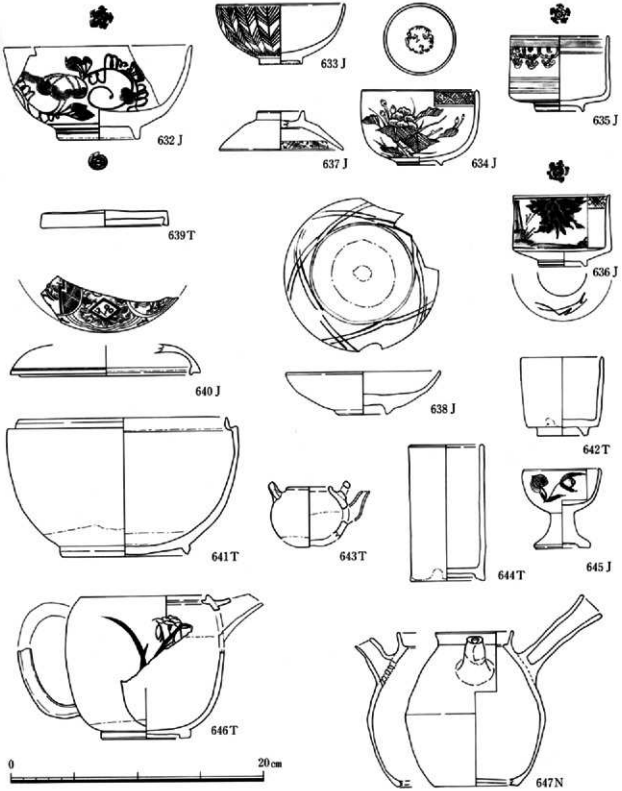
この遺構からの出土遺物は口縁部破片数で305点、総個体数で33.5個体である。この遺構は供膳具が10.08個体、33.3％と突出する（椀：皿=4.71：１）以外は、調理具5.83個体、19.3％、貯蔵具4.67個体、15.4％、灯火具4.0個体、13.2％と平均的な数値を示している。その他の用途の遺物については、化粧具・喫煙具・調度具が4.82個体、14.4％とやや多めである他は平均値となっている。この内、調理具と貯蔵具については、調理具は従来多くを占めていた鍋・釜の出土量は擂鉢との比率から変化しておらず、瓶が2.83個体、48.6％と出土量を伸ばしているため、貯蔵具は鉢が2.25個体と同じく出土量を増やしているために、全体に占める比率が大きくなっている。また化粧具・喫煙具・調度具が14.4％を占める要因は、調度具が2.83個体、8.5％出土しているためである。

材質では、陶器が20.08個体、60.0％を占め、次いで磁器が9.08個体、27.1％と多く、土器は3.0個体、8.9％と江戸時代初期と比較すると激減している。

図153　ＳＫ207出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	49	72	0	121	0	72	35	0	107
	椀	0	28	54	0	82	0	49	26	0	75
	小椀	0	9	8	0	17	0	4	4	0	8
	皿	0	12	9	0	21	0	17	4	0	21
	鉢	0	0	1	0	1	0	2	1	0	3
調理具		4	50	0	16	70	7	34	0	22	63
	鍋・釜	4	9	0	11	24	7	6	0	18	31
	鉢	0	3	0	0	3	0	3	0	0	3
	擂鉢	0	9	0	0	9	0	8	0	0	8
	瓶	0	29	0	5	34	0	17	0	4	21
	その他					0					0
貯蔵具		0	56	0	0	56	0	29	0	0	29
	瓶	0	15	0	0	15	0	2	0	0	2
	壺					0					0
	甕Ａ	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	甕Ｂ	0	13	0	0	13	0	15	0	0	15
	鉢	0	27	0	0	27	0	10	0	0	10
	その他					0					0
灯火具		30	18	0	0	48	43	8	0	0	51
火具		2	6	0	0	8	4	4	0	0	8
化粧具		0	6	0	0	6	0	1	0	0	1
神仏具		0	0	18	0	18	0	0	4	0	4
喫煙具		0	2	0	0	2	0	1	0	0	1
調度具		0	34	0	0	34	0	24	0	0	24
不明		0	20	19	0	39	0	8	9	0	17
合計		36	241	109	16	402	54	181	48	22	305

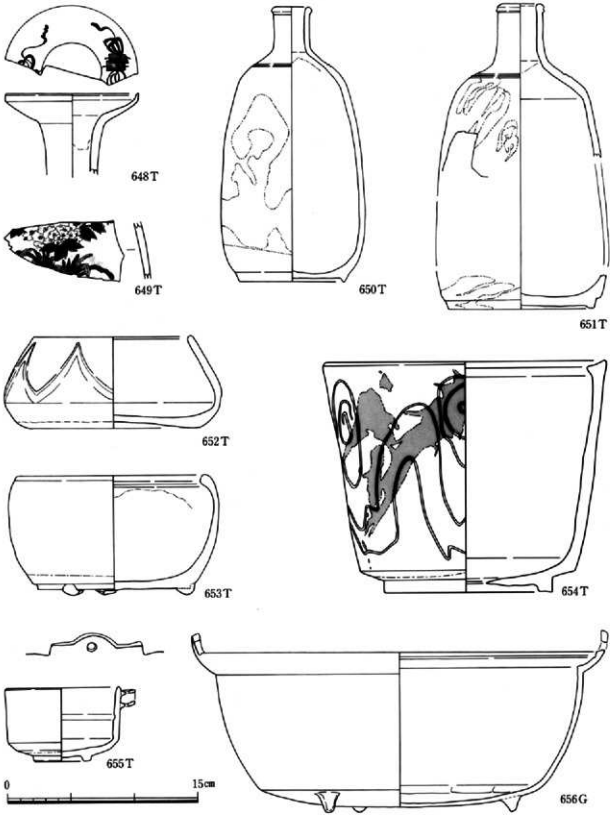
表28　ＳＫ207出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
632	112	染付	18C後半、牡丹唐草文＋鎬蓮・五弁花（コンニャク印）	肥	19
633	112	染付	18C後半 矢羽根文	肥	
634	112	染付	1780～1810年代 丸形文・梅＋菊＋竹笹文	肥	35 19
635	124	染付	18C後半第2四半期 竹＋菊＋梅＋竹笹文	肥	20
636	124	染付	18C末第2四半期 竹＋菊＋鎬蓮文・鎬＋五弁花	肥	20
637	015	染付	18C後半 一筆書唐草・唐草・花唐草＋三角格子（コンニャク）	肥	
638	131	輪ハゲ・染付	18C後半 梅下文	肥	27
639	016	灰釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
640	014	赤絵	18C中葉～末 雷神文	肥	35
641	352	灰釉		瀬	
642	124	灰釉		瀬	31
643	241	鉄釉		瀬	
644	902	灰釉		瀬	
645	73-	染付	18C後半～19C初 草花文	肥	35
646	242	灰釉＋鉄絵	草花文	瀬	33
647	243	灰釉		不	

図154　SK207出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
648	932	呉須絵	18C中～末 18C末～19C初	肥	
649	932	呉須絵	18C末～19C初	肥	
650	311	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	34
651	311	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
652	943	鉄釉		瀬	39

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
653	511	鉄釉		瀬	19
654	913	灰釉＋鉄釉流し掛け	底部穿孔	瀬	40
655	901	鉄釉		瀬	43
656	215			不	

図155　ＳＫ207出土陶磁器類実測図(2)

ＳＫ202：本遺構の時期は19世紀前葉に比定される。

当遺構の出土遺物は口縁部破片数で622点、総個体数63.58個体である。用途別の比率は、主要３用途が、それぞれ供膳具21.0個体、37.5%、調理具2.08個体、3.7%、貯蔵具4.67個体、8.3%を占め、平均値より調理具及び貯蔵具の比率がやや下回っている。それに対し、一旦比率が減少していた灯火具が21.58個体、38.6%と再度増加しており、本遺構の特徴となっている。この灯火具のうち46.3%が土器製品であり、先に述べた様に、灯火具の比率の増加は土器製品の増減に拠るところが大きい。但し、遺物全体に占める割合は19%と低く、この時期になってくると、基本的に土器製品は減少するものと思われる。反面、磁器製品が17.6%と増加して来ることも付け加えておきたい。

この遺構の器種比率は、椀と皿の比率が8.60：１と大きく差を広げている点が注目される。また、擂鉢が鍋・釜に比して多く使用されていると言える。

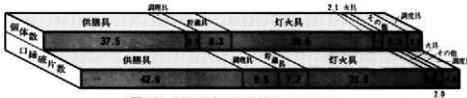
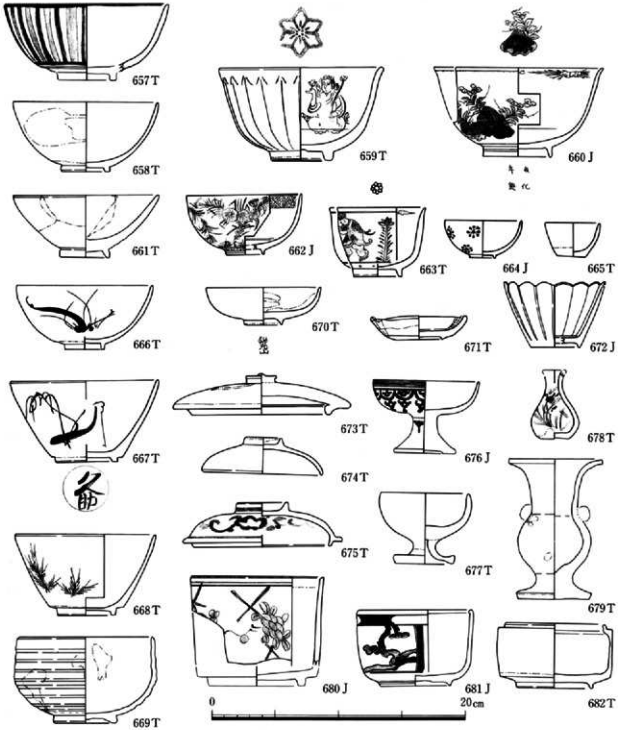


図156　ＳＫ202出土陶磁器類の用途組成

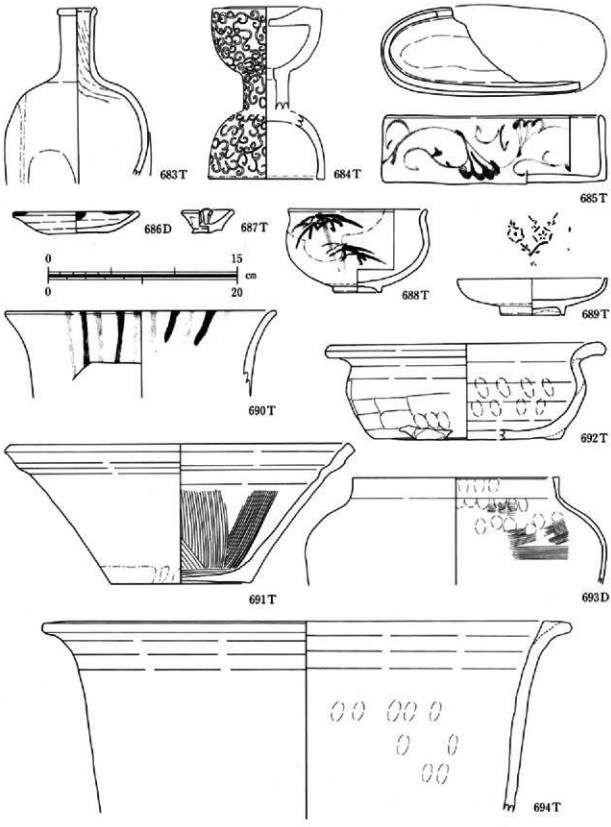
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	178	74	0	252	0	167	44	0	211
	椀	0	134	32	0	166	0	136	27	0	163
	小椀	0	19	30	0	49	0	6	10	0	16
	皿	0	23	2	0	25	0	19	3	0	22
	鉢	0	2	10	0	12	0	6	4	0	10
調理具		4	21	0	0	25	16	31	0	0	47
	鍋，釜	4	7	0	0	11	16	4	0	0	20
	鉢	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
	擂鉢	0	6	0	0	6	0	18	0	0	18
	板	0	7	0	0	7	0	7	0	0	7
	その他					0					0
貯蔵具		1	43	12	0	56	2	31	5	0	38
	瓶	0	22	0	0	22	0	4	0	0	4
	壺	1	0	0	0	1	2	1	0	0	3
	甕Ａ	0	11	0	0	11	0	14	0	0	14
	甕Ｂ					0					0
	鉢	0	10	12	0	22	0	12	5	0	17
	その他					0					0
灯火具		120	139	0	0	259	125	28	0	0	153
火具		9	5	0	0	14	7	6	0	0	13
化粧具						0					0
陸化具		0	20	12	0	32	0	5	2	0	7
喫煙具		0	0	12	0	12	0	0	3	0	3
調度具		0	22	0	0	22	0	23	0	0	23
蓋		12	55	24	0	91	1	22	4	0	27
合計		146	483	134	0	763	151	313	58	0	522

表29　ＳＫ202出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
657	111	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	変わら手	瀬	
658	114	灰釉		京	19
659	112	灰釉＋鉄釉＋呉須絵	ニ字縁多面形・人形オランダ・オ紙貼文	瀬	
660	112	染付	17世C～18世中代 花と草花文＋「誠知早期」・竹に草花文	肥	22
661	114	鉄釉＋灰釉		瀬	23
662	112	染付	17世C～18世中代 鳥？連弧文と鳥石象	肥	
663	125	上絵付	唐人と草花文・雲文＋花文	中	24
664	122	染付	17C前半～中葉 梅文	肥	
665	120	灰釉	底部墨書痕	瀬	
666	114	灰釉＋鉄絵	草文、底部墨書痕	京	
667	117	灰釉＋鉄絵	柳文	瀬	21
668	117	灰釉＋鉄絵	小杉文	京	24
669	110	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
670	131	灰釉＋銅緑釉	内外面白泥	京	
671	136	灰釉	四角	瀬	
672	145		17C前半 白磁	肥	
673	014	灰釉＋鉄釉		瀬	
674	015	鉄釉		瀬	
675	014	呉須絵	18C前半 蓮弁	肥	44
676	730	染付	18C後半以降C 梅花・ツタ文	肥	35
677	730	灰釉		瀬	41
678	712	上絵付	草花文	瀬	
679	932	灰釉＋掛け釉		瀬	42
680	351	染付	17C末～18C前半 「各花文」	肥	
681	811	染付	18C中～末 鉄釉・見込墨書痕 赤絵の下地	肥	37
682	352	灰釉		瀬	

図157　ＳＫ202出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
683	314	鉄釉		瀬	
684	440	鉄釉＋灰釉	施文かきおとし・唐草文	瀬	
685	630	長石釉＋呉須絵	唐草文	瀬	41
686	411		油煙付着	不	
687	423	灰釉		瀬	
688	420	灰釉＋鉄絵＋朱泥	竹文	瀬	23

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
689	411	灰釉＋呉須絵	口縁部油煙付着	瀬	
690	951	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	変ワラ文	瀬	
691	237	鉄釉		瀬	
692	518			常	
693	210		内面黒褐色に変色、外面煙付着	不	
694	335		内面橙色、外面にぶい橙色	常	

図158　ＳＫ202出土陶磁器類実測図(2)

ＳＫ009：本遺構の時期は19世紀前葉に位置づけられる。

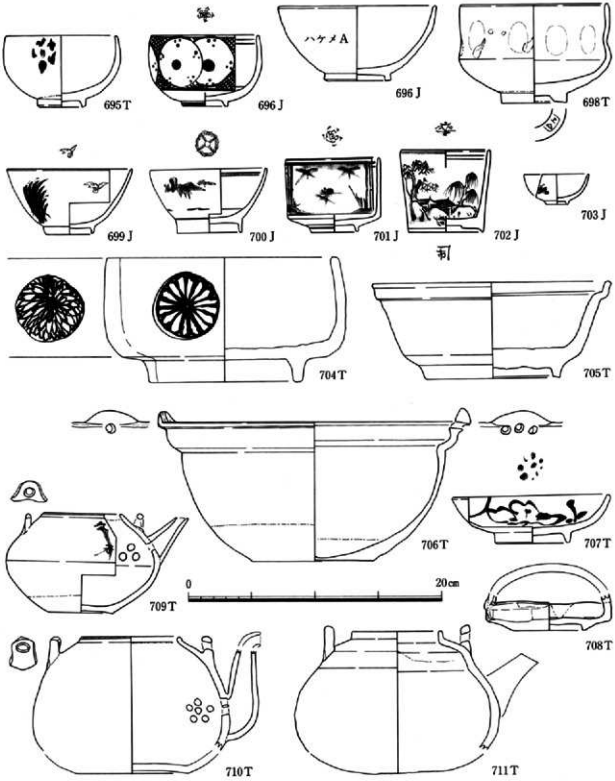
出土遺物は口縁部破片数で403個体、総個体数で55.25個体である。この遺構は調理具と貯蔵具の比率が高く、供膳具18.50個体、35.4％（椀：皿=5.24：1）、調理具12.25個体、23.4％、貯蔵具12.83個体、24.6％を占める。これに対し、灯火具が5.36個体、10.2％と少数で、その中の土器製品の比率は、1.0個体、18.8％、全遺物中では僅か3.5％にまで減少している。

他の遺構に比して、調理具、貯蔵具が多くを占めている訳であるが、その要因として挙げることができるのは、調理具については、他の器種との比率の面で瓶と鉢の出土量が他の遺構に比べて多いと言う点である。鍋・釜が多く出土する遺構は江戸時代前期に類例は存在するが、瓶・鉢が多いという遺構は認められない。貯蔵具についても同様で、瓶がその内の59.1％を占める点であろう。ここで、調理具・貯蔵具双方の瓶を合わせてみると14.67個体、26.5％という高い数値を示す。これは何度も言うように、この遺構の特徴であると共に、この遺構は江戸時代を通じて比較的多くの量が出土しており、その用途について分類上の問題を含めて考えてみる必要があるかもしれない。

図159　ＳＫ009出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	138	84	0	222	0	96	50	0	146
	椀	0	82	61	0	143	0	62	33	0	95
	小椀	0	7	23	0	30	0	10	12	0	22
	皿	0	33	0	0	33	0	18	4	0	22
	鉢	0	16	0	0	16	0	6	1	0	7
調理具		1	141	0	5	147	3	116	0	4	123
	鍋、釜	1	24	0	5	30	3	21	0	4	28
	鉢	0	27	0	0	27	0	16	0	0	16
	擂鉢	0	5	0	0	5	0	14	0	0	14
	瓶	0	85	0	0	85	0	65	0	0	65
	その他					0					0
貯蔵具		10	135	0	9	154	9	49	0	2	60
	瓶	0	91	0	0	91	0	21	0	0	21
	壺	10	0	0	0	10	9	0	0	0	9
	壺Ａ	0	7	0	0	7	0	9	0	0	9
	壺Ｂ	0	15	0	9	24	0	7	0	2	9
	鉢	0	22	0	0	22	0	12	0	0	12
	その他					0					0
灯火具		12	41	0	11	64	18	14	0	6	38
火具		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
化粧具						0					0
神仏具		0	0	20	0	20	0	0	3	0	3
喫煙具		0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
調度具		0	18	0	0	18	0	10	0	0	10
不明		0	35	21	0	56	0	13	8	0	21
合計		23	510	125	25	683	30	300	61	12	403

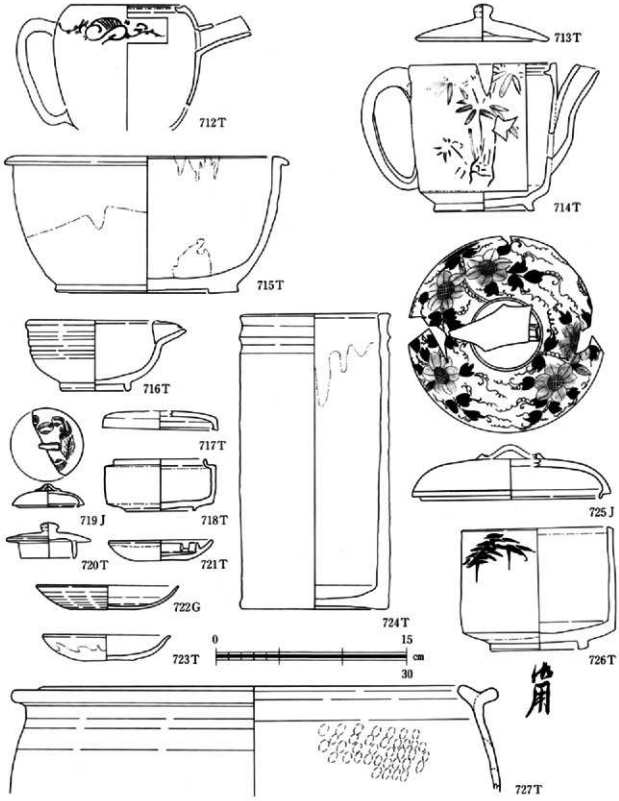
表30　ＳＫ009出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
695	112	灰釉＋呉須絵	梅文	瀬	19
696	112	染付	1790～1810年代 五弁花	肥	24
697	114	灰釉	内面白泥散らし	瀬	19
698	113	鉄釉＋長石釉	凹み10ヶ所	瀬	21
699	114	染付	1790～1810年代 山水文＋唐草	肥	21
700	117	染付	1790～1840年代 山水文＋花文	肥	21
701	124	染付	1790～1810年代 竹文＋五弁花	肥	20
702	126	染付	江戸期 楼閣山水文＋(縁)・唐草	瀬	26
703	122	染付	幕末・明治 雷紋・菊花文	肥	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
704	146	鉄釉＋呉須＋長石釉		瀬	46
705	220		方角鉢・菊花文	唐	32
706	215	鉄釉		瀬	32
707	131	灰釉＋呉須絵	18C後半 四天王文	瀬	27
708	140	長石釉＋呉須絵		瀬	28
709	241	灰釉＋鉄絵		瀬	29
710	241	灰釉		瀬	
711	241	灰釉(内面のみ)	信楽写し	瀬	

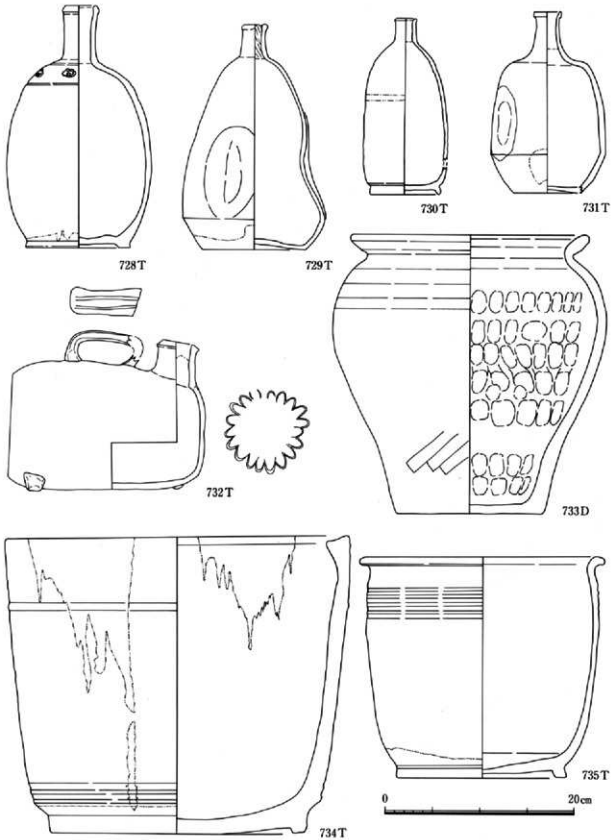
図160　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
712	242	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	唐草文	京	29
713	013	灰釉		瀬	
714	318	灰釉＋鉄絵	竹文	瀬	35
715	222	灰釉＋銅緑釉	外面体部墨痕	瀬	32
716	221	長石釉		瀬	
717	016	灰釉		瀬	
718	342	灰釉		瀬	
719	014	赤絵	18C後半～19C初	肥	35

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
720	014	灰釉		瀬	
721	412	鉄釉		瀬	
722	411	瓦質土器		不	
723	411	鉄釉		瀬	
724	931	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	40
725	014	染付	18C後半	肥	
726	341	灰釉＋鉄絵	松文	瀬	37
727	333		内面灰赤褐、外面にぶい橙	常	

図161　S K009出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
728	311	灰釉＋外底	スタンプ	瀬	34
729	313	灰釉		瀬	34
730	311	鉄釉＋灰釉		瀬	33
731	314	鉄釉		瀬	34

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
732	310	鉄釉	陰刻	瀬	34
733	325			不	36
734	337	鉄釉＋灰釉流し掛?		瀬	36
735	344	鉄釉		瀬	37

図162　ＳＫ009出土陶磁器類実測図(3)

ＳＫ014：本遺構の時期は19世紀前葉に比定される。

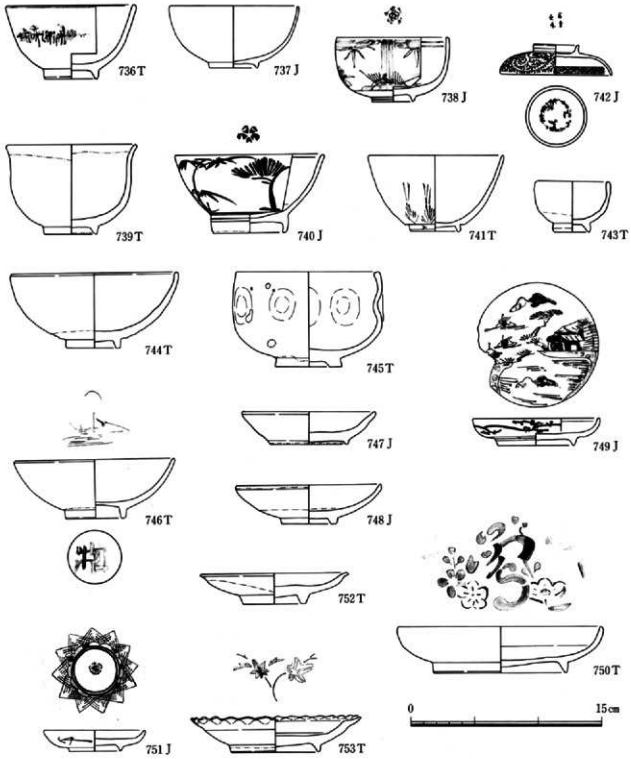
この遺構からは口縁部破片数にして607点、総個体数87.08個体である。この遺構も供膳具が25.0個体、36.1％と最も多くを占めてはいるが、平均値を考慮すれば、やはりその割合は決して高いとは言えない。これに対し，他の用途の遺物については、調理具9.5個体、13.7％、貯蔵具11.08個体、16.0％、灯火具9.75個体、14.1％と、いずれも10％強の出土率と成っている。さらに化粧具・喫煙具・調度具が5.83個体、6.7％、神仏具5.22個体、6.0％、蓋17.83個体、20.5％との割合で存在し、蓋がやや多いものの他はいずれも平均値である。このあり方は先に見たＳＫ346と同じ状況であり、推定の域は出ないものの、調理具の使用頻度の高い空間の周辺に存在していた可能性が考えられる。

また、器種別に考えた場合は、若干様相が異なっており、椀が供膳具中に占める割合が低下しており、皿との比率が1.30：1となっている。また調理具中に占める鍋・釜の比率も低下してきており、この遺構の特徴であると考えられる。

図163　ＳＫ014出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	194	106	0	300	0	194	59	0	253
	椀	0	93	35	0	128	0	114	23	0	137
	小椀	0	14	20	0	34	0	8	16	0	24
	皿	0	74	51	0	125	0	61	19	0	80
	鉢	0	13	0	0	13	0	11	1	0	12
調理具		4	110	0	0	114	19	88	0	0	107
	鍋，釜	4	51	0	0	55	19	40	0	0	59
	鉄	0	4	0	0	4	0	8	0	0	8
	擂鉢	0	43	0	0	43	0	34	0	0	34
	瓶	0	12	0	0	12	0	6	0	0	6
	その他					0					0
貯蔵具		0	133	0	0	133	0	53	3	0	56
	壺	0	48	0	0	48	0	8	0	0	8
	甕	0	11	0	0	11	0	4	0	0	4
	甕Ａ	0	22	0	0	22	0	13	0	0	13
	甕Ｂ	0	10	0	0	10	0	10	0	0	10
	鉢	0	42	0	0	42	0	18	3	0	21
	その他					0					0
灯火具		44	73	0	0	117	44	21	0	0	65
火具		3	31	0	0	34	2	26	0	0	28
化粧具		0	8	0	0	8	0	3	0	0	3
神仏具		0	37	26	0	63	0	7	8	0	15
喫煙具		0	13	1	0	14	0	2	1	0	3
調度具		0	36	12	0	48	0	26	1	0	27
蓋		0	201	13	0	214	0	40	10	0	50
合計		51	836	158	0	1045	65	460	82	0	607

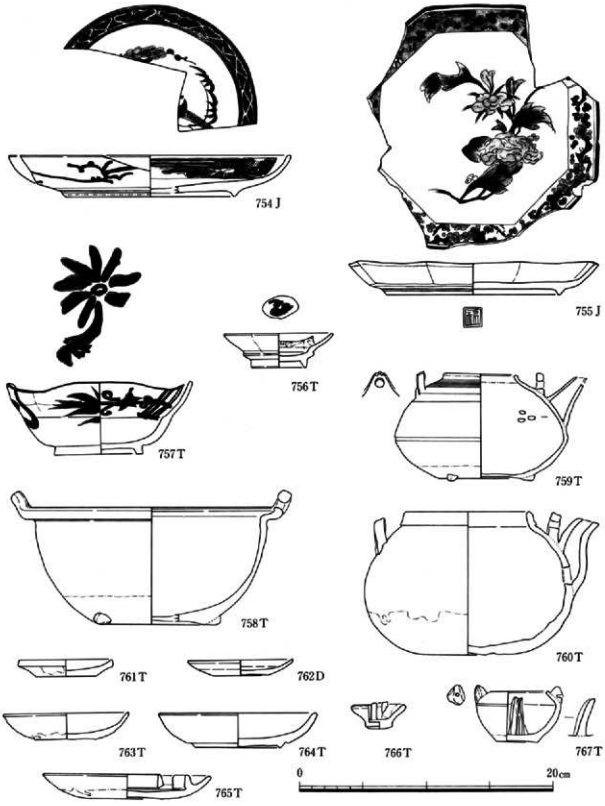
表31　ＳＫ014出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
736	112	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	口銹、松林文	瀬	19
737	112		18C前半～中 口銹	肥	
738	112	染付	1800～1810年代（竹、ちょう、草葉紋＋三羽鶴（ドンベッキ？））	肥	
739	116	灰釉＋呉須	白泥化粧、高台周辺煎付着	瀬	20
740	117	灰釉＋染付	1810年代以降 松竹文＋菊花丸文花	瀬	21
741	117	灰釉＋呉須絵	小杉文	京	21
742	015	染付	18C後半～19C初　網目菊文＋「長寿為如」・鶴子菱＋四方唐草	肥	
743	122	灰釉	外面体部下半墨付着	瀬	
744	114	灰釉		瀬	

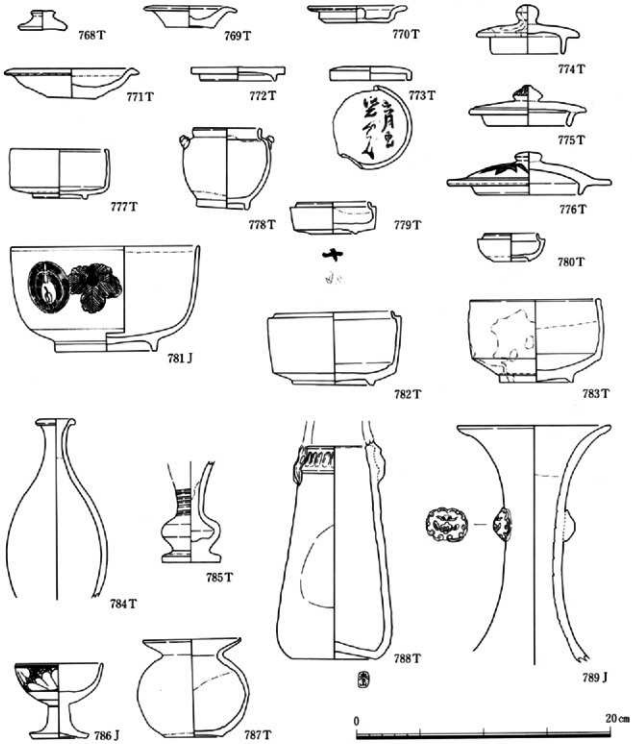
番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
745	113	鉄釉＋長石釉		瀬	24
746	131	灰釉＋呉須絵	17C後半～18C初 網目山水文	京	27
747	131	灰釉＋鉄釉	18C後半～19C前半 口銹	肥	
748	131	鬼ハゾ呉釉＋鐵釉	18C前半	瀬	
749	131	染付	18C後半 梅花文、網目山水文	肥	27
750	131	灰釉＋鉄絵＋呉須絵		瀬	27
751	131	染付	18C後半～19C初 松葉文、鶴亀文＋丸紋花	肥	25
752	132	灰釉		瀬	
753	137	灰釉＋鉄絵	紅葉文	瀬	27

図164　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
754	131	染付	1514～1547 鋳 唐草文・輪花文・梅鉢花弁文・無目口縁	肥	25
755	136	染付＋鉄釉	1600～1620年代 口縁、八方唐草、角皿＋釉上彩付文	肥	28
756	137	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉		瀬	
757	146	長石釉＋鉄絵	口縁、唐草文・櫛に刷毛＋花文	瀬	29
758	215	鉄釉		瀬	32
759	241	鉄釉	脚部煤付着	瀬	33
760	241	灰釉	外面煤付着	肥	29
761	411	灰釉		瀬	
762	411	底部糸切り	口縁部油煙付着	不	
763	411	鉄釉	口縁・体部油煙付着	瀬	
764	411	長石釉	口縁一部油煙付着	瀬	
765	412	鉄釉		瀬	38
766	423	灰釉		瀬	38
767	420	鉄釉		瀬	38

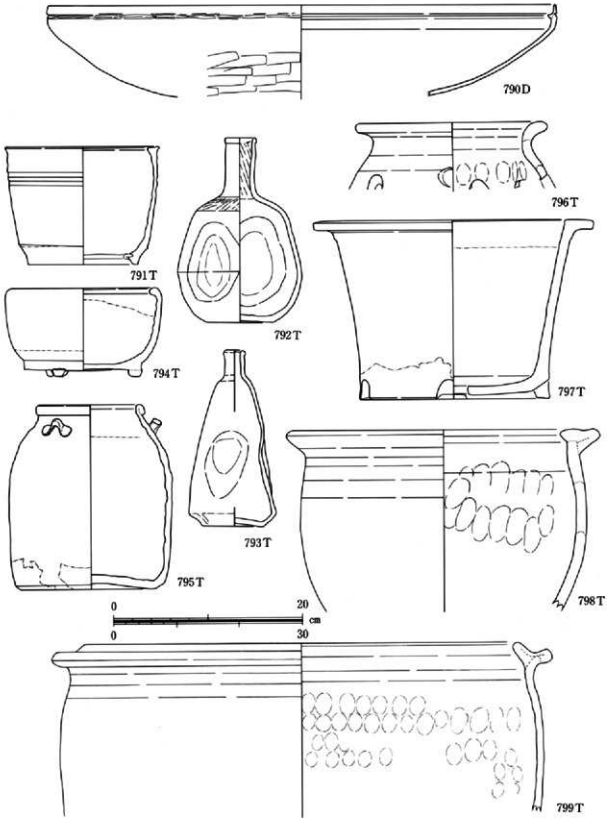
図165　S K014出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
768	013		全面自然釉	瀬	
769	011		自然釉	瀬	
770	012	灰釉		瀬	
771	011	鉄釉		瀬	
772	016	灰釉		京	
773	016	灰釉	内面墨書あり	瀬	
774	014	灰釉＋銅緑釉＋外彩		瀬	
775	014	鉄釉		瀬	44
776	014	灰釉＋鉄彩絵	蓮文	瀬	
777	351	灰釉		京	37
778	321	灰釉		瀬	36

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
779	740	灰釉	底部墨書痕	瀬	
780	740	灰釉		瀬	37
781	351	染付	18C後半 つたに丸のしま	肥	35
782	352	灰釉		瀬	
783	811	鉄釉＋灰釉流し掛け	全面煤付着	瀬	41
784	712	灰釉		瀬	41
785	932	灰釉＋鉄釉		瀬	40
786	730	染付	18C後半 唐草文	肥	
787	961	灰釉		瀬	42
788	931	灰釉	「春山」（刻印）信楽写し	瀬	40
789	932		17C 末～18C 前半 唐津・地方窯写し	肥	40

図166　ＳＫ014出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
790	213			不	
791	641	鉄釉		瀬	36
792	314	鉄釉		瀬	33
793	313	灰釉		瀬	34
794	511	鉄釉	口縁部最打板	瀬	39

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
795	621	鉄釉	内面酸化鉄分付着	瀬	39
796	516		穿孔部煤付着	不	
797	911	灰釉		瀬	
798	335		内面に云い粗、外面粗	雲	
799	333		内面灰褐、外面褐灰	雲	

図167　SK014出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ346：本遺構の時期は18世紀後葉から19世紀前葉に比定される。

本遺構からは口縁部破片数で761点、総個体数で89.25個体が出土している。内訳は供膳具46.75個体、58.9%、調理具3.25個体、4.1%、貯蔵具5.42個体、6.8%、灯火具14.33個体、18.0%、化粧具・喫煙具・調度具5.53個体、3.66%、神仏具4.11個体、4.6%、蓋9.83個体、11.0%である。これを江戸時代の平均値と比較してみると、いずれもそれに近い数値であることが判る。さらに材質面においても、陶器が63.75個体、71.4%、磁器が18.5個体、20.7%、土器が6.92個体、7.7%と陶器がやや多く、土器がやや少なめではあるがほぼ近世の平均的あり方を示している。

器種の組成では椀と皿の比率は3.29：１とやはり４倍近いひらきがあり、江戸時代後半になるほどその差が大きくなる傾向は確からしい。平均値では2.54：１と単純に戦国時代とその比率を逆転させたかの様であったが、これはあくまで平均の数値であり、本来的には江戸時代初頭は戦国時代同様に椀対皿は１：２であり、時代が下がるに従い、17世紀後葉に同率に、18世紀前葉には逆転することが、これまで述べてきた遺構の遺物組成から推定することができる。

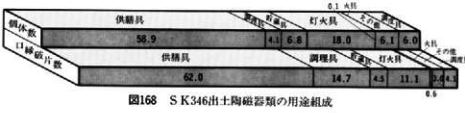
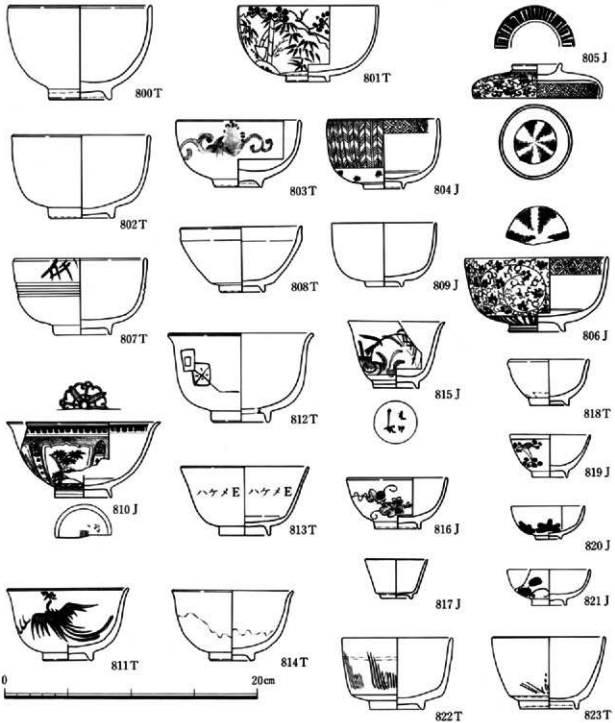


図168　ＳＫ346出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	386	175	0	561	0	339	113	0	452
	椀	0	282	75	0	357	0	237	57	0	294
	小椀	0	7	60	0	67	0	7	36	0	43
	皿	0	89	40	0	129	0	86	20	0	106
	鉢	0	8	0	0	8	0	9	0	0	9
調理具		18	21	0	0	39	73	34	0	0	107
	鍋・釜	18	3	0	0	21	73	5	0	0	78
	鉢	0	8	0	0	8	0	8	0	0	8
	擂鉢	0	10	0	0	10	0	19	0	0	19
	瓶	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
	その他					0					0
貯蔵具		0	62	3	0	65	0	31	2	0	33
	瓶					0					0
	壺	0	23	0	0	23	0	10	0	0	10
	甕Ａ	0	12	0	0	12	0	8	0	0	8
	甕Ｂ	0	21	0	0	21	0	6	0	0	6
	鉢	0	6	3	0	9	0	7	2	0	9
	その他					0					0
灯火具		63	108	0	1	172	46	34	0	1	81
火具		0	1	0	0	1	1	3	0	0	4
化粧具		0	6	0	0	6	0	7	0	0	7
神仏具		0	25	24	0	49	0	5	3	0	8
喫煙具		0	3	0	0	3	0	7	0	0	7
調度具		0	57	0	0	57	0	30	0	0	30
蓋		2	96	20	0	118	1	23	8	0	32
合計		83	765	222	1	1071	121	513	126	1	761

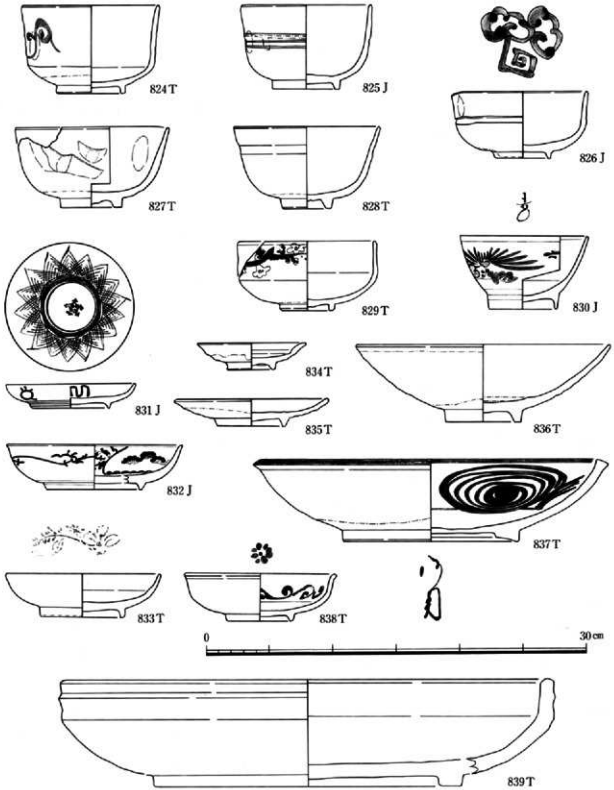
表32　ＳＫ346出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
800	112	灰釉		瀬	
801	112	灰釉＋上絵付	竹と梅文	京	19
802	112	灰釉		瀬	22
803	112	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	花唐草文	瀬	19
804	112	染付	17C後半 外面縦文・側小葉＋三弁花	肥	19
805	015	染付	17C後半 内外に中文・側小葉＋ねじり花文	肥	28
806	112	染付	内外に中文・側小葉＋ねじり花文	肥	19
807	112	灰釉＋呉須絵	幾何文	瀬	19
808	111	灰釉		瀬	
809	122	鉄釉	17C後半 内面＋口縁	肥	
810	116	染付	17C前～18前半 胴に雲と鶴文・鶴か鳥か文、鶴か鳥か鶴	肥	
811	116	灰釉＋鉄絵	鳳凰文	瀬	20

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
812	116	長石釉＋鉄絵	鳳文	瀬	20
813	116	灰釉	18C前～19C前半 鉄化目	肥	20
814	116	灰釉＋呉須風上掛け		瀬	20
815	125	染付	17C前半 口縁＋「太閤年銘」	肥	26
816	122	染付	18C前半～中 口縁	肥	24
817	126		18C代 内面＋口縁	肥	
818	122	灰釉		瀬	24
819	122	染付	17C後半 （内面文）	肥	24
820	122	染付	18C代 口縁＋内	肥	26
821	122	赤絵	18C後半 草花文	肥	
822	118	鉄釉＋灰釉		瀬	20
823	117	灰釉＋鉄絵	18C前半 草花文	京	23

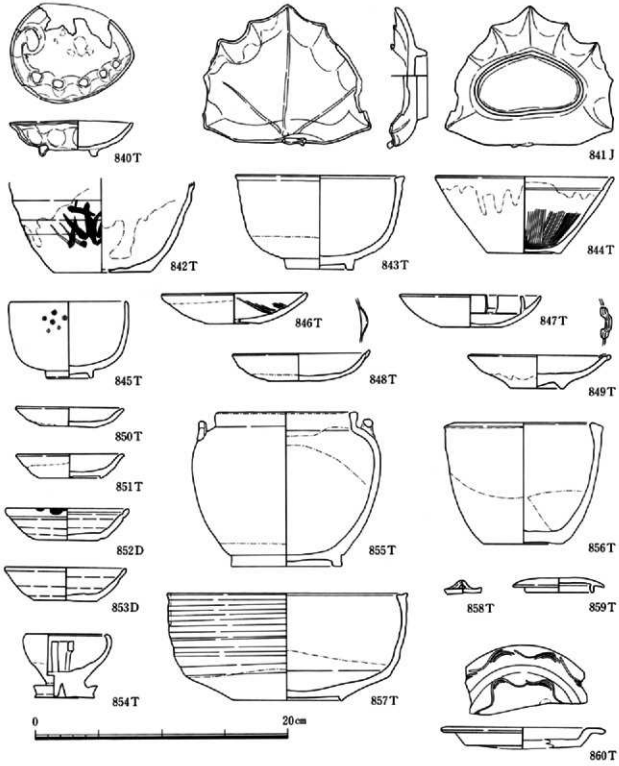
図169　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
824	110	灰釉＋鉄絵	唐草文	瀬	21
825	110	鉄釉＋灰釉		瀬	
826	110	灰釉＋鉄絵	雲に電光文	瀬	31
827	110	灰釉		瀬	19
828	110	灰釉		瀬	
829	113	灰釉＋鉄絵＋長石釉	梅文	京	23
830	117	染付	口ヒ:鉄芒 縁ヒ:ボタン・ス・(ヲ)	肥	21
831	131	染付	口ヒ:鉄＋長石釉 (ヲ)唐草文・ヒ:ヒ:鉄 (ヲ)唐草文・草文＋乱れ作品	肥 肥	27＋芒 28＋芒

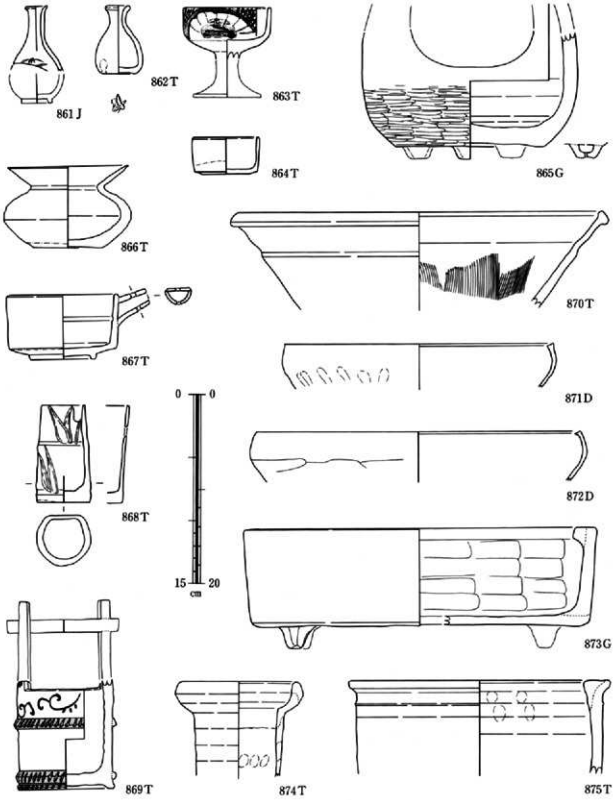
番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
832	131	染付	口ヒ:鉄芒 縁ヒ:ボタン・鉄芒	肥	
833	411	灰釉＋呉須絵	草花文（？）型紙摺り	瀬	
834	132	灰釉		瀬	
835	131	灰釉		瀬	
836	133	灰釉＋銅緑釉	見込釉はぎ	肥	25
837	131	灰釉＋鉄絵	馬の目文	瀬	32＋27
838	132	灰釉＋呉須絵	唐草文＋梅文	瀬	
839	131	灰釉		瀬	

図170　ＳＫ346出土陶磁器類(実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
840	136	灰釉＋鉄絵＋銅緑		瀬	31
841	136	青磁釉＋鉄斑	16C0－16C代青磁碗(T 5217・32 IT.8)	肥	28
842	147	灰釉＋銅緑釉＋鉄絵	草文	瀬	29
843	221	灰釉		瀬	27
844	237	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
845	400	灰釉＋鉄絵	梅花文、油煙付着	瀬	
846	411	灰釉	口縁部油煙付着、底部墨痕	瀬	
847	412	鉄釉	切込２ヶ所	瀬	
848	411	鉄釉	内面油煙付着	瀬	
849	411	灰釉	高台周辺油煙付着	肥	
850	411	鉄釉		瀬	
851	411	灰釉		瀬	
852	411	底部糸切り	油煙付着	不	
853	411	底部糸切り	内面油煙付着	不	
854	422	鉄釉		瀬	38
855	321	灰釉		瀬	36
856	343	鉄釉		瀬	37
857	943	灰釉＋鉄釉流し掛		瀬	
858	013	鉄釉		瀬	44
859	017	灰釉		瀬	
860	011	鉄釉		瀬	

図171　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
861	712	染付	18C後半～19C初 唐人	肥	
862	712	灰釉	沢潤文（め）	瀬	
863	730	灰釉＋呉須絵	菊文	瀬	
864	921	灰釉		瀬	
865	513		脚に空気孔あり	不	
866	961	灰釉		不	42
867	901	灰釉		瀬	43
868	931	灰釉＋呉須絵	竹文	瀬	42

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
869	963	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	40
870	237	鉄釉		瀬	
871	213			不	
872	213			不	
873	511			不	
874	904		明褐色	雲	
875	335			雲	

図172　ＳＫ346出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ118：本遺構の時期は19世紀前葉から中葉に位置づけられる。

本遺構からの出土遺物は口縁部破片数で1420点、総個体数で107.42個体である。この遺構の用途別の構成比率は平均値に類似し、供膳具49.92個体、52.2%、調理具7.83個体、8.2%、貯蔵具4.42個体、4.6%、灯火具19.50個体、20.4%、化粧具・喫煙具・調度具が9.88個体、9.2%、神仏具2.83個体、2.6%、蓋11.75個体、10.9%となっている。

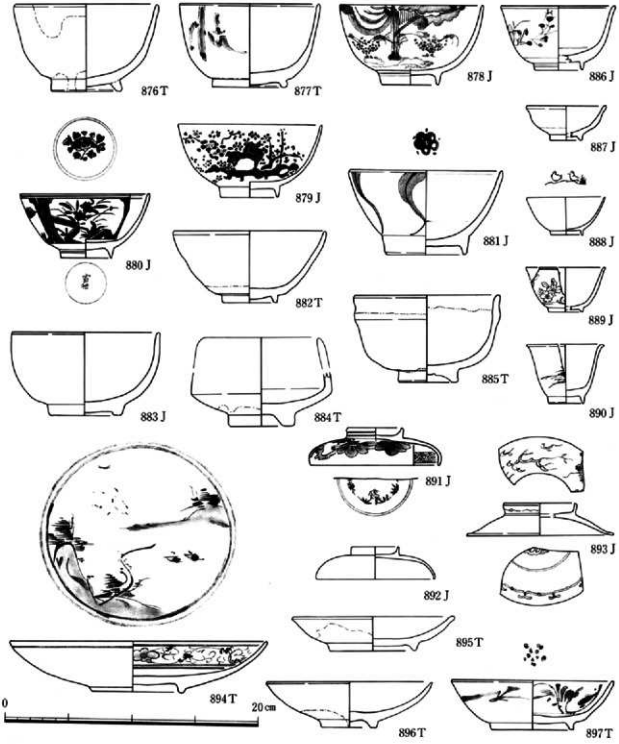
このうち、化粧具が2.92個体、2.7%を占める点については、他の遺構と比較しても最高値であり、本遺構の特徴のひとつであると言える。また、灯火具に占める土器製品の割合が79.1%と増加してはいるものの、遺物全体では土器製品は16.4%と決して多くを占めず、この時期では既に土器製品の使用量自体が減少していると思われる。

器種別では、椀と皿の比率が1.09：１と同数に縮まっている点、調理具の擂鉢が多く出土している点、貯蔵具では瓶が一定量使用されている点等を指摘できるであろう。

図173　ＳＫ118出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		7	363	229	0	599	7	429	223	1	660
	椀	0	120	122	0	242	0	201	145	1	347
	小椀	0	7	38	0	45	0	6	20	0	26
	皿	7	192	64	0	263	7	176	55	0	238
	鉢	0	44	5	0	49	0	46	3	0	49
調理具		19	75	0	0	94	110	113	0	0	223
	鍋，釜	19	20	0	0	39	110	34	0	0	144
	鉢	0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
	擂鉢	0	22	0	0	22	0	51	0	0	51
	瓶	0	27	0	0	27	0	22	0	0	22
	その他					0					0
貯蔵具		0	53	0	0	53	0	39	1	0	40
	瓶	0	19	0	0	19	0	2	0	0	2
	壺	0	9	0	0	9	0	6	0	0	6
	甕Ａ	0	2	0	0	2	0	9	0	0	9
	甕Ｂ	0	11	0	0	11	0	10	0	0	10
	鉢	0	12	0	0	12	0	12	1	0	13
	その他					0					0
灯火具		185	43	5	1	234	258	28	1	1	288
火具		1	14	0	0	15	3	52	0	0	55
化粧具		0	18	17	0	35	0	4	3	0	7
神仏具		0	24	10	0	34	0	15	3	0	18
喫煙具		0	6	0	0	6	0	6	0	0	6
調度具		0	78	0	0	78	0	83	0	0	83
蓋		0	111	29	1	141	0	31	14	1	46
合計		212	785	290	2	1289	378	800	245	3	1426

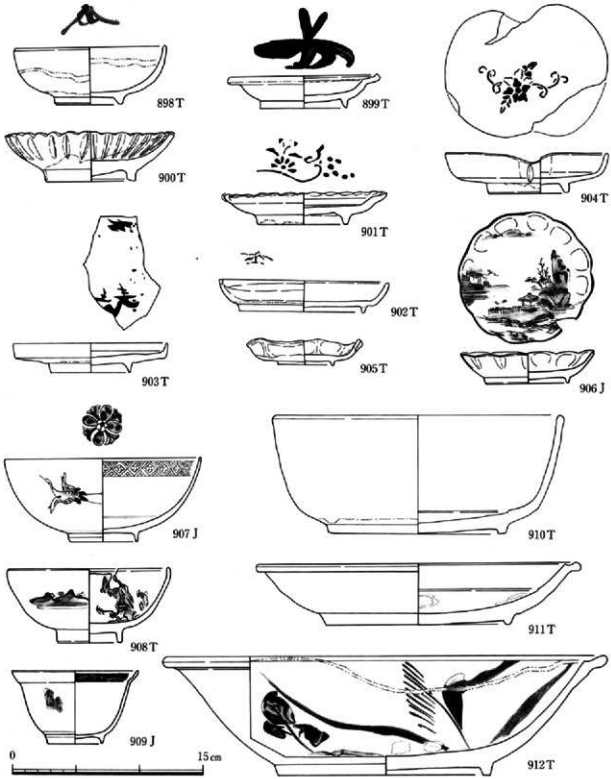
表33　ＳＫ118出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
876	112	鉄釉＋灰釉		瀬	22
877	112	灰釉＋外頃絵	山水文	瀬	19
878	112	染付	1690～1710C 前半 「紅梅」と記銘文	肥	19
879	112	赤絵	1660～1690年代 梅樹文	肥	
880	112	染付、外頃絵	1620～1690年代 雲に牡丹文＋菊花文＋五弁花	肥	22＋19
881	117	染付	ねじり花文、梅花文	瀬	21
882	114	鉄釉＋灰釉底削ぎ		瀬	
883	900	灰釉		瀬	
884	900	鉄釉		瀬	
885	900	鉄釉＋接石釉		瀬	21
886	116	染付	18C 中～末 草花文	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
887	122	灰釉		瀬	
888	122	染付	明治以降？ 雲文	瀬	
889	125	赤絵	18C 後半～19C 初 柳・鳥花鳥図文	肥	
890	125	染付	17C 後半 草文	肥	
891	015	染付	18C 後半 岩文＋鳥小象＋唐草形竹梅文	肥	
892	015		19C 白磁	肥	
893	015	染付	1650～1690年代 草文＋岩文	肥	
894	131	外頃絵	1620～1690年代 花弁紋付鉄、山水文・鳥付鉄草文	肥	26
895	135	灰釉		瀬	30
896	131	鉄ハゲ、灰釉＋鐵釉		肥	27
897	131	灰釉＋外頃絵	草花文・菊花文＋五弁花	瀬	27

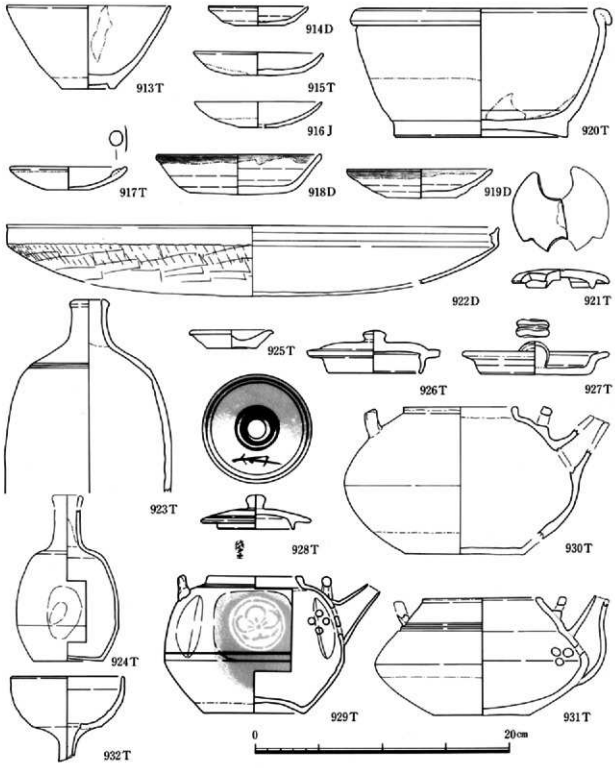
図174　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
898	131	灰釉＋鉄釉	唐草	瀬	
899	134	灰釉＋鉄絵	唐草	瀬	30
900	135	灰釉＋銅緑釉		瀬	28
901	137	灰釉＋鉄絵	菊水文	瀬	30+28
902	136	長石釉＋鉄絵	唐文，角型	瀬	28
903	133	長石釉＋鉄絵	山水文	瀬	
904	136	長石釉＋鉄絵	雷文帯	瀬	
905	137	灰釉＋鉄釉	五稜花	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
906	136	染付＋鉄釉	18C 後半～19C 初 樋脇山水文，上絵	肥	28
907	141	染付	17C 末～18C 初 蔦文・梅小紋＋唐草文	肥	19
908	141	灰釉＋呉須絵	17C 後半 岩水文・樋脇山水文	瀬	32
909	140	染付	樋脇山水文・梅花文	肥	
910	141	灰釉		瀬	
911	143	灰釉		瀬	
912	143	灰釉＋鉄絵＋銅緑釉	キビ文	瀬	29

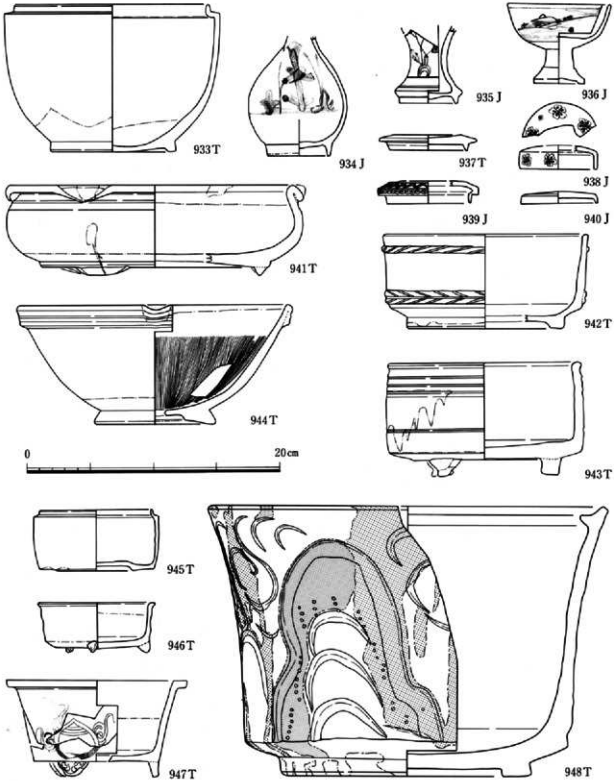
図175　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
913	141	鉄釉＋灰釉(底部)、糸切		瀬	29
914	411	底部糸切り		不	
915	411	鉄釉	口縁部油煙付着	瀬	
916	411		口縁部油煙付着	瀬	
917	411	灰釉	口縁部油煙付着	瀬	
918	411	底部糸切り	油煙付着	不	38
919	411	底部糸切り	油煙付着	不	
920	222	灰釉		瀬	29
921	019	長石釉		瀬	
922	213			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
923	311	鉄釉		瀬	33
924	314	鉄釉		瀬	34
925	011	鉄釉		瀬	
926	014	鉄釉		瀬	
927	012	鉄釉		瀬	
928	014	灰釉＋鉄絵	墨吹き、折松葉文・刷印	瀬	
929	241	灰釉＋鉄絵	墨吹き、梅花文	瀬	
930	241	鉄釉		瀬	
931	623	鉄釉	内面酸化鉄分付着	瀬	
932	900	鉄釉		瀬	

図176　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
933	352	灰釉	底部墨書痕あり	瀬	37
934	712	染付	緑仁筆＝19C前半 朱出文、西行鉢文技法	肥	
935	932	染付	高台釉ハギ、草花文	肥	
936	730	染付	山水文	肥	41
937	017	灰釉		瀬	
938	016	染付	19C代 松文	肥	
939	017	染付	19C 蔓文＋幽鬼文	瀬	
940	016	灰釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
941	943	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	
942	943	灰釉		瀬	
943	812	灰釉＋銅緑釉流し掛け	口縁鎬打痕あり	瀬	41
944	913	鉄釉	底部穿孔。転用品	瀬	
945	352	灰釉		瀬	
946	721	灰釉		瀬	
947	911	灰釉＋鉄絵	宝珠文	瀬	
948	951	灰釉＋銅緑釉		瀬	40

図177　ＳＫ118出土陶磁器類実測図(4)

ＳＫ101：本遺構の時期は19世紀中葉に比定される。

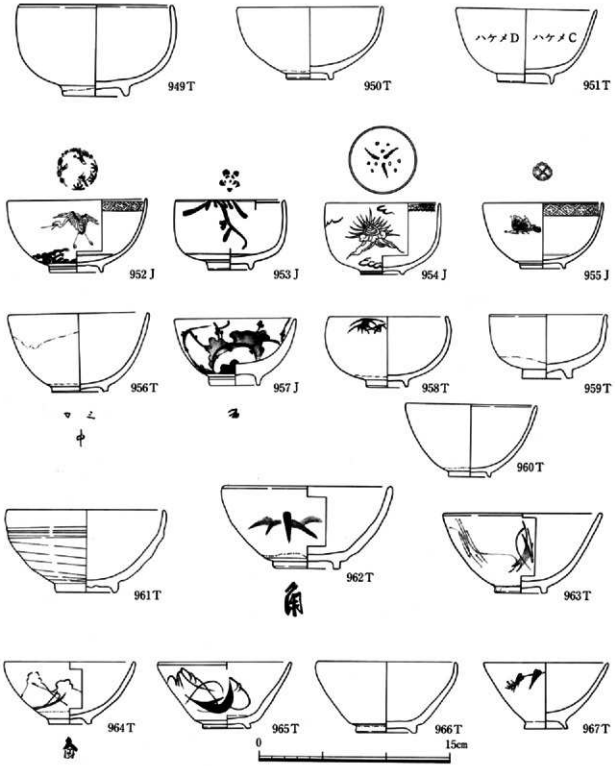
出土遺物は口縁部破片数で9582点、総個体数810.42個体にのぼる。用途別の割合は、供膳具317.42個体、46.2%、調理具61.50個体、9.0%、貯蔵具89.25個体、13.0%、灯火具106.17個体、15.4%、火具22.92個体、3.3%、化粧具・喫煙具・調度具66.45個体、8.2%、神仏具22.69個体、2.8%、蓋123.66個体、15.3%である。これらの数値は今回の発掘調査で出土した江戸時代の遺物の組成比率とほぼ等しい状況を示している。反面、遺構が江戸時代末期であるということが影響してか、材質面からの組成比率は、陶器が593.75個体、73.3%、磁器が162.83個体、20.1%、土器が46.5個体、5.7%となっており、陶器・磁器製品が増加し、土器製品の消費量が減少していることが窺える。

器種の側面からは、椀と皿の比率が4.22：１とその差を広げており、この傾向は先にも述べたが、江戸時代初期は戦国時代と同様に椀と皿の比率は１：２前後であるのに対し、中期以降はその比率が逆転し、その比率差は拡大する傾向にある。

図178　ＳＫ101出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	接合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	2369	1438	2	3809	0	2856	1214	4	4074
	椀	0	1415	579	1	1995	0	1586	403	1	1990
	小椀	0	308	636	1	945	0	491	607	3	1101
	皿	0	545	152	0	697	0	624	155	0	779
	鉢	0	101	71	0	172	0	155	49	0	204
調理具		60	658	3	17	738	435	868	1	24	1328
	鍋，釜	60	193	0	17	270	435	257	0	24	716
	鉢	0	105	0	0	105	0	158	0	0	158
	擂鉢	0	87	0	0	87	0	244	0	0	244
	甑	0	272	3	0	275	0	207	1	0	208
	その他	0	1	0	0	1	0	2	0	0	2
貯蔵具		7	993	71	0	1071	2	710	51	2	765
	甕	0	299	7	0	306	0	79	2	1	82
	壺	7	171	0	0	178	2	90	0	1	93
	徳A	0	120	0	0	120	0	169	0	0	169
	徳B	0	150	1	0	151	0	167	1	0	168
	鉢	0	253	63	0	316	0	205	48	0	253
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		370	867	0	38	1275	571	244	0	10	825
火具		92	177	0	6	275	65	177	0	5	247
化粧具		0	37	92	0	129	0	30	27	0	57
神仏具		0	168	107	0	275	0	61	36	0	97
喫煙具		0	75	0	0	75	0	49	0	0	49
調度具		8	539	47	0	594	6	388	21	0	415
蓋		21	1267	196	0	1484	6	1630	88	1	1725
合計		558	7150	1954	63	9725	1085	7013	1438	46	9582

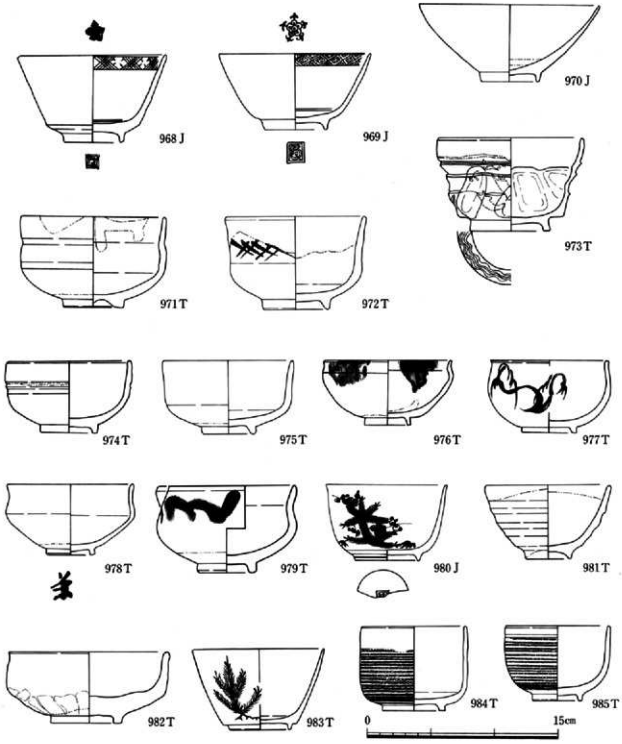
表34　ＳＫ101出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
949	112	灰釉		瀬	22
950	112	透明釉		不	
951	112	灰釉	刷毛目	肥	22
952	112	染付	口縁に赤・緑の線 鶴に黒線文・黒彩松竹梅＋側小象	肥	22
953	112	灰釉＋染付	草花文・五弁花	瀬	23
954	112	染付	口縁に赤・緑の線 岩梅・花枝文・重弧線文	肥	19
955	112	染付	口縁に赤・緑の線 蔦文・唐草・雷文・側小象＋花(x)	肥	19
956	112	灰釉＋呉須	底部墨書	瀬	
957	112	染付	口縁に赤・緑の線 唐獅子・唐獅	肥	19
958	112	灰釉＋鉄釉	櫛文	瀬	23

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
959	112	鉄釉		瀬	23
960	112	鉄釉		瀬	
961	112	灰釉＋銅緑釉散らし		瀬	23
962	114	灰釉＋呉須絵	笹文、底部墨書	瀬	20
963	114	灰釉＋鉄絵	柳文、底部墨書痕	瀬	20
964	114	灰釉＋鉄絵	柳文、底部墨書	瀬	
965	114	灰釉＋鉄釉	柳文	瀬	20-23
966	110	灰釉		瀬	
967	110	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	底部「錦光山」刻印、草文	京	

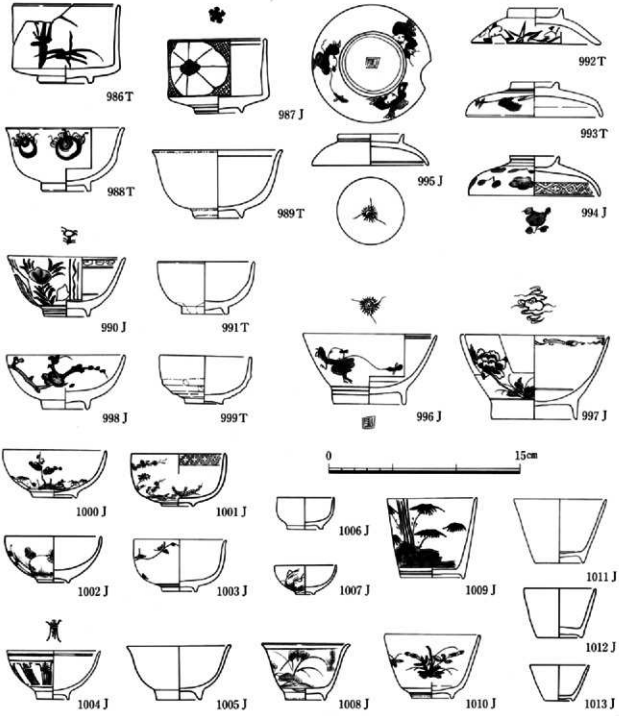
図179　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
968	114	青磁＋染付	16C後－17C前半　青磁＋一角唐草・菊花紋＋五弁花紋（アンカーボウル）	肥	
969	114	青磁＋染付	16C後半－17C前半　青磁＋一角唐草・菊花紋＋五弁花紋（コンコードボウル）	肥	23
970	114	鉢ハゲ	16C代 白磁＋高台砂目痕	肥	
971	118	灰釉＋鉄釉		瀬	24
972	110	透明釉＋銅緑釉	斜格子文（鉄絵）	肥	24
973	110	灰釉＋鉄釉		瀬	21
974	118	長石釉＋鉄釉		瀬	19
975	113	灰釉		瀬	23
976	111	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	22

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
977	116	灰釉＋呉須絵	柳文	瀬	21
978	113	灰釉	底部墨書「草」	瀬	23
979	116	灰釉＋鉄釉＋呉須		瀬	23
980	112	染付	18C前－19世紀前半 形状輪花丸　一角唐草	肥	26
981	112	長石釉＋呉須		瀬	
982	110	長石釉＋鉄釉		瀬	24
983	117	灰釉＋呉須絵	小杉文	京	24
984	115	鉄釉＋灰釉		瀬	19
985	115	銅緑釉＋灰釉		瀬	19

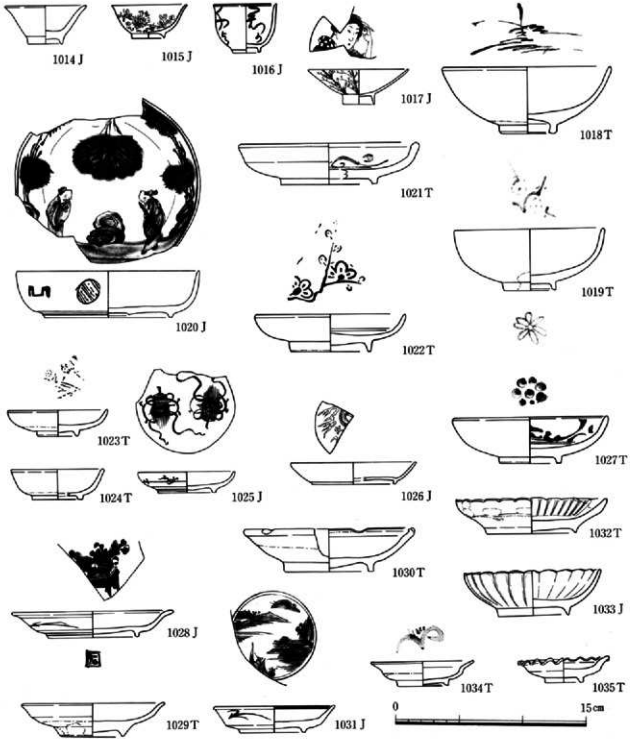
図180　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(2)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
986	115	灰釉＋鉄絵	竹文	瀬	20
987	115	染付	18C 後～19C 前 ／ 端部欠損 ／ 内面に「梅」の文字 ／ 高台内に「コンニャク印」	肥	20
988	116	灰釉＋外面絵＋鉄絵	宝玉文	瀬	
989	116	呉須	口縁、見込花文(?)	瀬	23
990	116	染付	19C 中～ ／ 口縁内面に「梅」の文字 ／ 高台内に「梅鉢印」＋「花押」文	瀬	23
991	122	灰釉	18C 前半	瀬	24
992	015	長石釉＋鉄絵	口縁、つる草文	瀬	25
993	015	長石釉＋鉄絵	雷文	瀬	
994	015	染付	18C 後半～19C 初	肥	25
995	015	染付	18C 後半～19C 初 ／ 遊び唐子・火炎文	肥	28
996	117	染付	1790～1810年代 ／ 唐子（チャ・蘭・ハ・梅・角・ハ・月・遊文）	肥	21
997	117	染付	18C 後半～19C 前半 ／ 蘭・ハ・梅・遊文	肥	
998	122	染付	梅・鳥	肥	27
999	122	灰釉		瀬	24

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1000	122	染付	18C 中～末 ／ 高台内面に「梅」の文字	肥	20
1001	122	染付	18C 後～19C 前 ／ 胎土は肥前系 ／ 高台内面に「梅」の文字	肥	
1002	122	染付	18C 中～末 ／ 胎土は肥前系	肥	
1003	122	染付	18C 後半～中期 ／ 唐草文	肥	
1004	122	染付	1790～1810年代 ／ 「ヒ」・「ヒ」・「ヒ」文	肥	20
1005	125		18C 後半～19C ／ 口縁・内面に目跡	瀬	
1006	122		18C 後半～19C 前半 ／ 口縁・内面に目跡	肥	
1007	122	赤絵	18C 後半～19C 初 ／ 鳥文	肥	
1008	125	染付	18C 後～19C 前半 ／ 唐草文	肥	25
1009	126	染付	18C 中～末 ／ 竹文	肥	26
1010	127	染付	18C 後半 ／ 唐草文	肥	24
1011	126		18C 後半～中 ／ 口縁	肥	
1012	126		口縁	肥	
1013	126		18C ／ 口縁	肥	

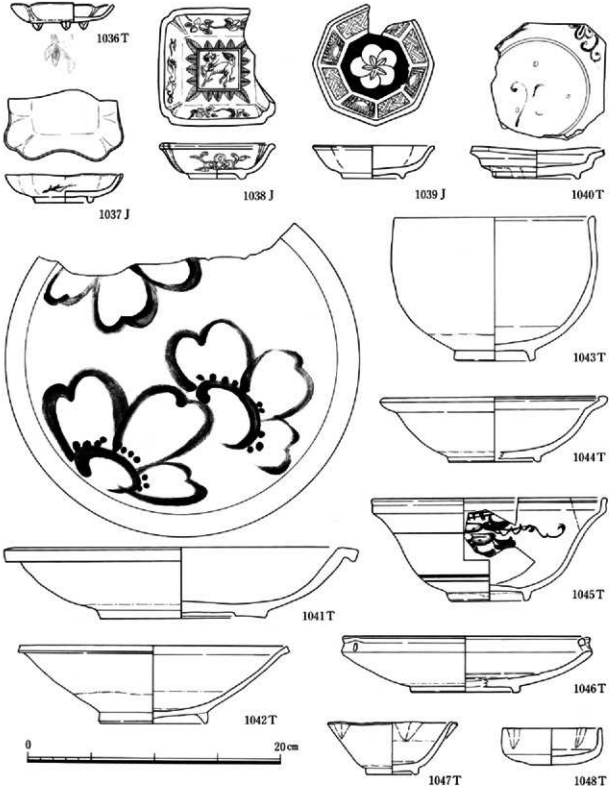
図181　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1014	125		16C代 内面	肥	
1015	125	赤絵	文様＝16C中～後半 縁下＝毎間文	瀬	
1016	125	赤絵	16C 口縁、胴部（？）	肥	26
1017	123	染付	17中～末 外面＝文人画	瀬	
1018	131	灰釉＋鉄絵	山水文	肥	
1019	131	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	底部墨書・梅文	瀬	30
1020	131	染付	胴部四方＝鳥ノ群れ、16C末 幾何文・人物と花に竹文	肥	25
1021	132	灰釉＋呉須絵	唐草文	瀬	
1022	131	灰釉＋呉須絵	梅樹文	瀬	25
1023	131	灰釉＋呉須絵	梅文	瀬	
1024	131	灰釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1025	131	染付	16C後半～17初頭 縁＝文字？、胴＝六角に本歯・文字？	肥	30
1026	131		電文（スタンプ）	不	
1027	131	灰釉＋呉須絵	草花文＋梅文	瀬	30
1028	134	染付	16C中～17初頭 胴部＝「西園寺」花菖蒲	肥	30
1029	132	灰釉		瀬	
1030	137	灰釉＋銅緑釉	流し掛け	瀬	30
1031	133	染付	16C後半～17C初 胴部文＝山水楼閣文	肥	30
1032	135	灰釉＋銅緑釉流し掛け		瀬	
1033	135		16C前半 内面	肥	
1034	134	灰釉＋呉須絵	草花文	瀬	
1035	137	灰釉		瀬	

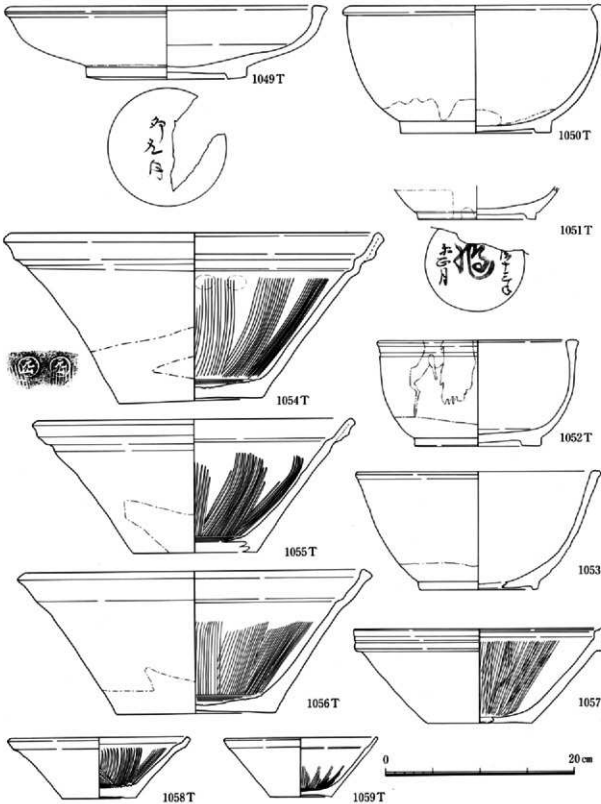
図182　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(4)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
1036	136	灰釉	底部墨書「大」(?)	瀬	31
1037	136	染付	18世紀～19C前半 松葉文	肥	
1038	136		19世紀～明治初期 梅花文、唐草風＋ 梅花文、風景＋キリン文	瀬	
1039	136	釉胴	花弁と蕨甘＋ねじ輪文	瀬	
1040	134	灰釉＋鉄絵	草花文	瀬	30
1041	134	長石釉＋鉄絵・呉須絵	梅花文	瀬	30
1042	132	輪ハケ、灰釉		瀬	32

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
1043	131	灰釉		瀬	32
1044	133	鉄釉		瀬	32
1045	133	長石釉＋鉄絵	朝顔文(?)	瀬	
1046	130	灰釉	見込沈線	京	
1047	136	灰釉＋呉須掛け流し	見込使用痕、五角形	瀬	
1048	136	灰釉		瀬	

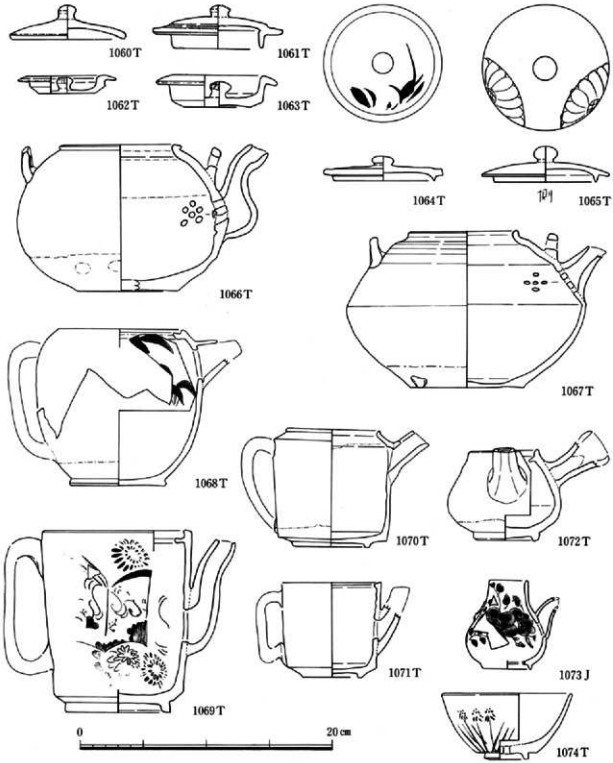
図183　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(5)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1049	131	灰釉	墨書「卯九月」	瀬	
1050	222	灰釉		瀬	32
1051	222	灰釉	墨書「(宝)暦十三年鳴来正月」	瀬	
1052	222	灰釉＋鉄釉	波し掛け	瀬	32
1053	222	鉄釉		瀬	
1054	236	鉄釉	「元山」(刻印)	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1055	236	鉄釉		瀬	
1056	237	鉄釉		瀬	
1057	239			堺	
1058	237	鉄釉		瀬	
1059	237	鉄釉		瀬	

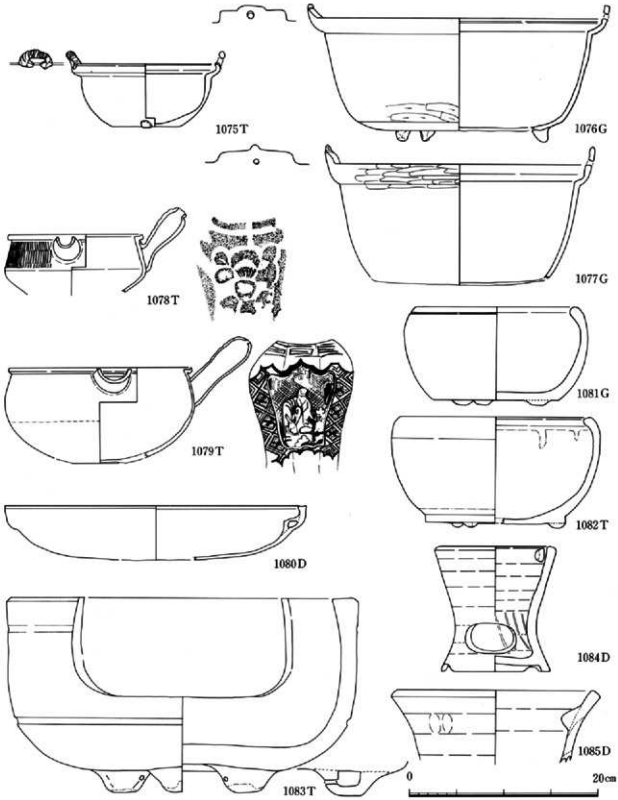
図184　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(6)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1060	013	灰釉		瀬	
1061	014	鉄釉		瀬	
1062	012	鉄釉		瀬	
1063	012	灰釉		京	43
1064	014	灰釉＋鉄絵	草花文	肥	44
1065	014	灰釉＋鉄絵	菊花文・墨書「側」	京	44
1066	241	鉄釉		瀬	33
1067	241	鉄釉	底部煤付着	瀬	33

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1068	242	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	草花文	京	33
1069	318	灰釉＋鉄絵	本に菊花文(6)	瀬	36
1070	242	鉄釉		瀬	33
1071	318	灰釉		瀬	
1072	243	鉄釉＋鉄釉	泥し掛け	瀬	33
1073	319	鉄釉	染付	肥	
1074	200	長石釉＋鉄絵	蓮池文，マンジュウ蒸し器	瀬	33

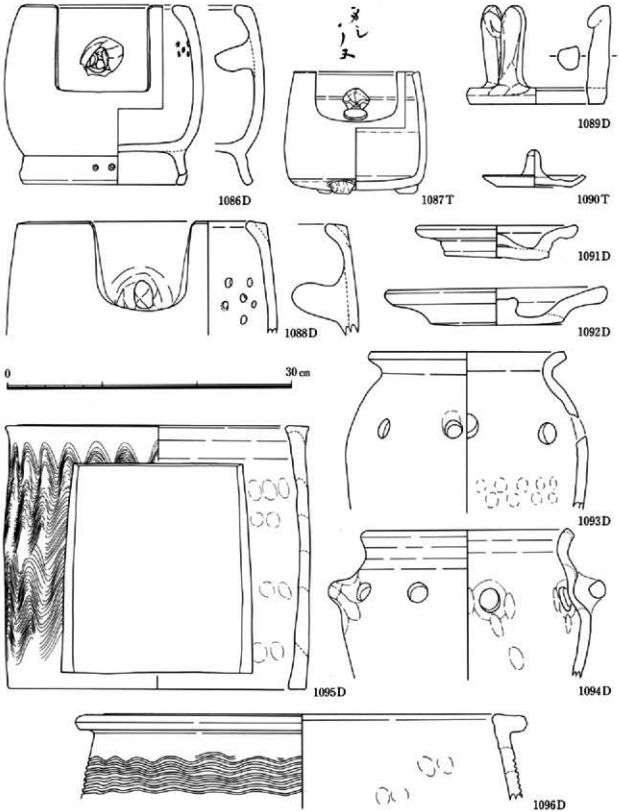
図185　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(7)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
1075	215	鉄釉		瀬	
1076	215			不	
1077	215			不	
1078	214	鉄釉	体部下半縦付着	不	32
1079	214	灰釉	唐人(型押)、体部下半縦付着	京	32
1080	213			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL.
1081	511		瓦質	不	39
1082	511	鉄釉	口縁殺打底	瀬	39
1083	513	鉄釉		瀬	
1084	515			不	39
1085	515			常	

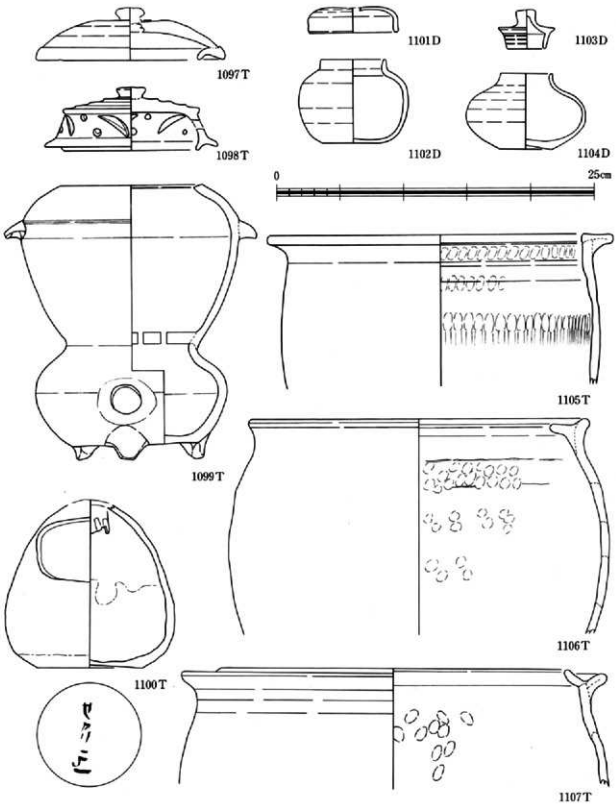
図186　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(8)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1086	513		内面煤付着	不	
1087	513		鉄釉　内底面墨書	瀬	39
1088	513			不	
1089	501			瀬	
1090	011		触媒	常	43
1091	011			常	43

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1092	011		底部煤付着	瀬	43
1093	516		内面煤付着，孔7ヶ所	常	
1094	516		内面煤付着，孔6ヶ所(6)	不	
1095	531		外面口縁一部煤付着	不	
1096	532		内面部分的に煤付着	不	

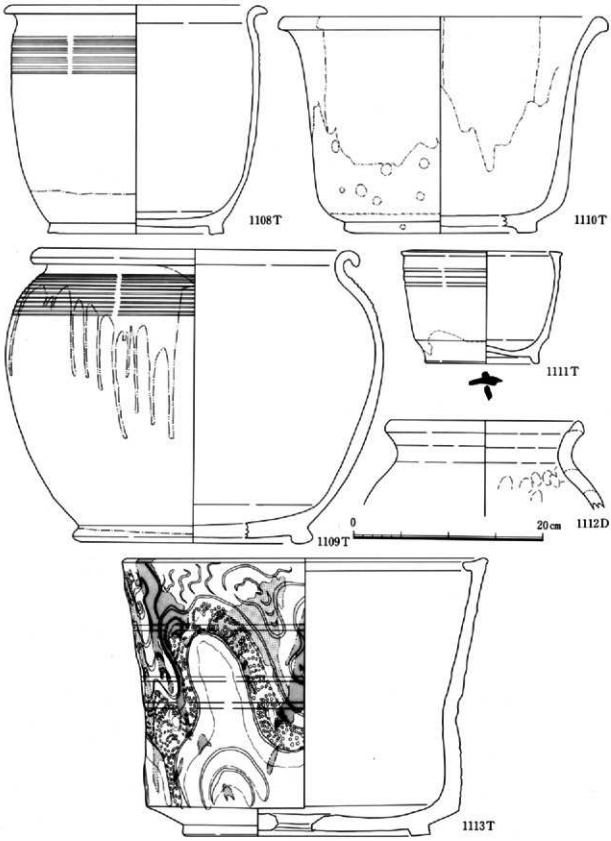
図187　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(9)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1097	014		内面煤付着	瀬	
1098	019		返し部周辺線付着、スカシ7ヶ所	瀬	39
1099	516		内面煤付着	瀬	39
1100	516	灰釉	巻音	瀬	
1101	016		内面被熱	不	
1102	521		内面から外口縁被熱	不	39

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1103	014			不	44
1104	521		内面煤付着	不	39
1105	335		外面明赤褐色、内面明赤褐色	常	
1106	332		外面赤褐色、内面明赤褐色	常	
1107	333		外・内面浅黄橙色	常	

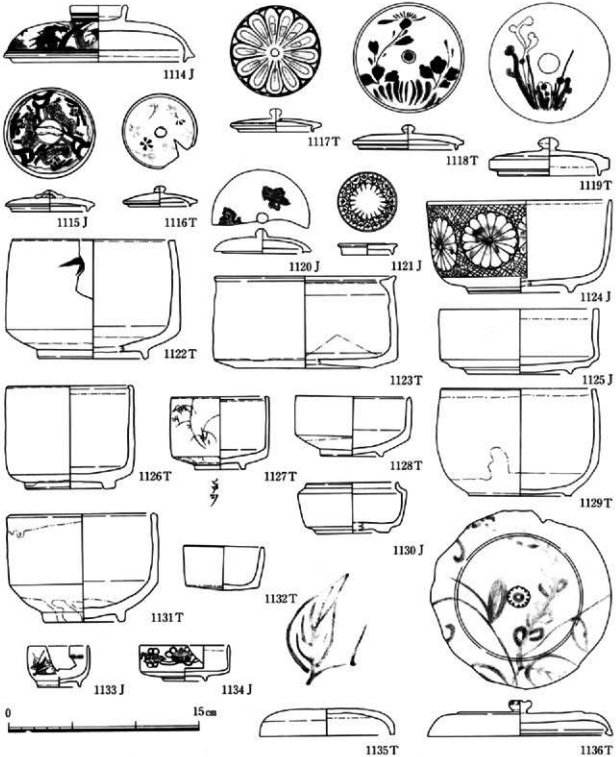
図188　SK101出土陶磁器類実測図(4)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1108	344	鉄釉		瀬	37
1109	344	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	
1110	952	灰釉＋鉄釉＋石灰釉＋鉄釉		瀬	43

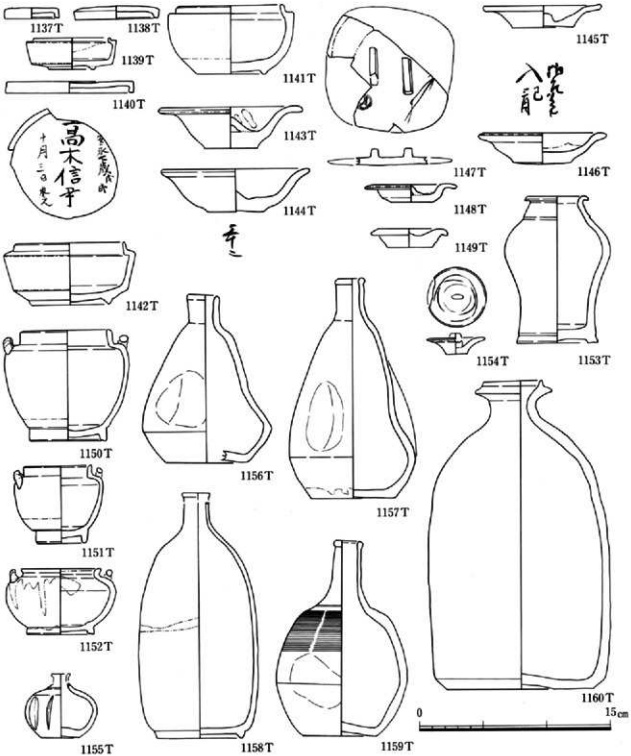
番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1111	337	鉄釉	墨書「＋」	瀬	
1112	325			常	
1113	913	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	底部穿孔	瀬	43

図189　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1114	014	染付	1690～18C前半 竹文	肥	
1115	014	染付	1690～18C前半　若松草紋、流し線掛付 蓋	肥	44
1116	014	上絵付	桐文	肥	44
1117	014	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	菊花文	京	44
1118	014	上絵付	菊花文	京	44
1119	014	灰釉＋鉄絵	早蕨文	京	44
1120	014	染付	1690～18C前半　五～六輪文(コンニャク印)	肥	44
1121	017	染付	18C中 輪花こうざえ文	肥	35
1122	351	灰釉＋呉須絵	竹文(6)	瀬	
1123	351	鉄釉		瀬	41
1124	351	染付	18C前半～中 輪花蓋なし	肥	37
1125	351	呉須	18C中葉～末 花文字一本	肥	37
1126	351	灰釉		瀬	37
1127	351	灰釉＋鉄絵	竹文、鏡部墨書	瀬	37
1128	351	灰釉		瀬	
1129	351	灰釉		瀬	37
1130	350		17C末～18C前半、白磁	肥	
1131	441	鉄釉＋長石釉		瀬	37
1132	351	灰釉		瀬	
1133	351	赤絵	17C末～18C前半 輪花蓋なし(2)	肥	
1134	351	染付	18C前半 花文(四)、太線1本	肥	
1135	016	染付	本の蔓文	瀬	
1136	018	染付	草花文	瀬	44

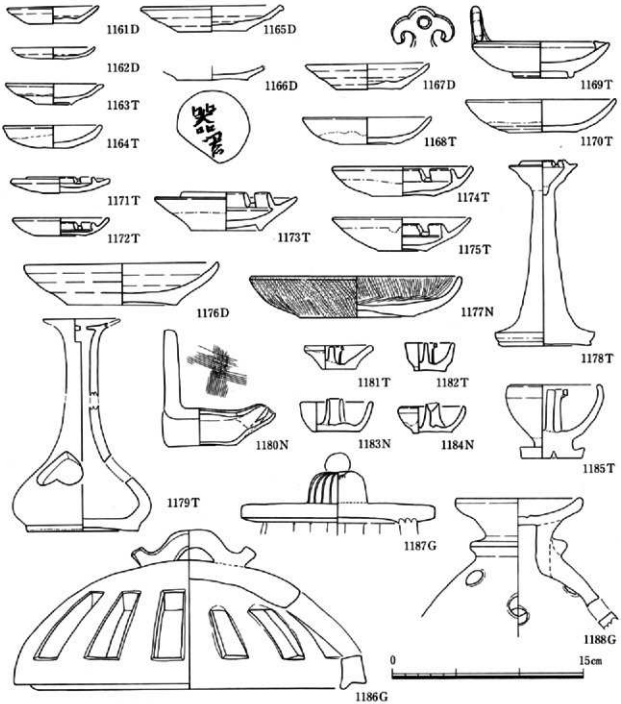
図190　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(12)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1137	016	灰釉	内面墨書	瀬	
1138	016	灰釉		瀬	
1139	740	灰釉		瀬	37
1140	016	灰釉		瀬	
1141	352	灰釉		瀬	37
1142	352	灰釉		瀬	38
1143	011	灰釉＋鉄釉		瀬	
1144	011		墨書「三十二」	瀬	
1145	011			瀬	43
1146	011	灰釉	墨書「工工八号」	瀬	
1147	013	灰釉＋鉄釉＋石灰釉	松葉文	瀬	
1148	012	灰釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1149	011	鉄釉		瀬	
1150	321	灰釉		瀬	
1151	321	灰釉		瀬	36
1152	321	鉄釉＋灰釉定し掛け		瀬	36
1153	322	鉄釉		瀬	36
1154	011	灰釉	象眼	肥	
1155	320	鉄釉		不	36
1156	313	灰釉		瀬	33
1157	313			瀬	33
1158	311	鉄釉＋灰釉		瀬	33
1159	314	鉄釉		瀬	36
1160	316	鉄釉		瀬	36

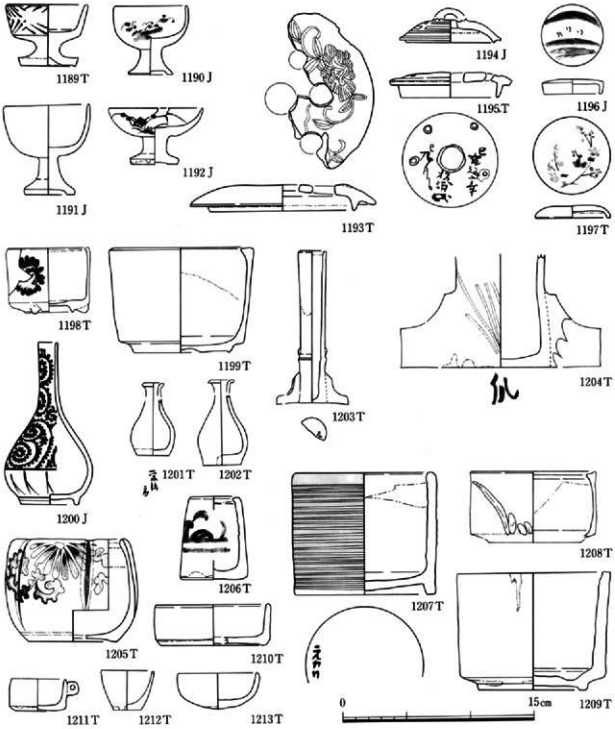
図191　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1161	411		内底面被熱	不	38
1162	411		口縁1ヶ所油煙付着	不	38
1163	411	灰釉		瀬	
1164	411	長石釉		瀬	38
1165	411	底部糸切り	口縁2ヶ所油煙付着	不	38
1166	131	底部糸切り	墨書(器器)底見か	不	41
1167	411	底部糸切り	内面油煙付着	不	
1168	411	鉄釉		瀬	38
1169	410	長石釉		瀬	38
1170	411	長石釉		瀬	
1171	412	灰釉		瀬	
1172	412	鉄釉		瀬	
1173	412	長石釉		瀬	38
1174	412	鉄釉		瀬	38

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1175	412	長石釉		瀬	
1176	411	底部糸切り	内面油煙付着	不	38
1177	413	黄釉	粘土赤褐色、底部一方向ヘラケズ	京	
1178	410	鉄釉	底部墨痕あり	瀬	38
1179	441	側鉄釉		瀬	39
1180	420	黄釉	粘土白色、口縁油煙付着、底部ヘラ切	京	
1181	423	灰釉		瀬	
1182	423	灰釉		瀬	38
1183	425	黄釉	胎土褐色	不	38
1184	425	黄釉	胎土赤褐色	京	
1185	422	鉄釉		瀬	38
1186	819		瓦質、煤付着、マ[illegible]4ヶ所	不	
1187	310			不	39
1188	431		瓦質	不	39

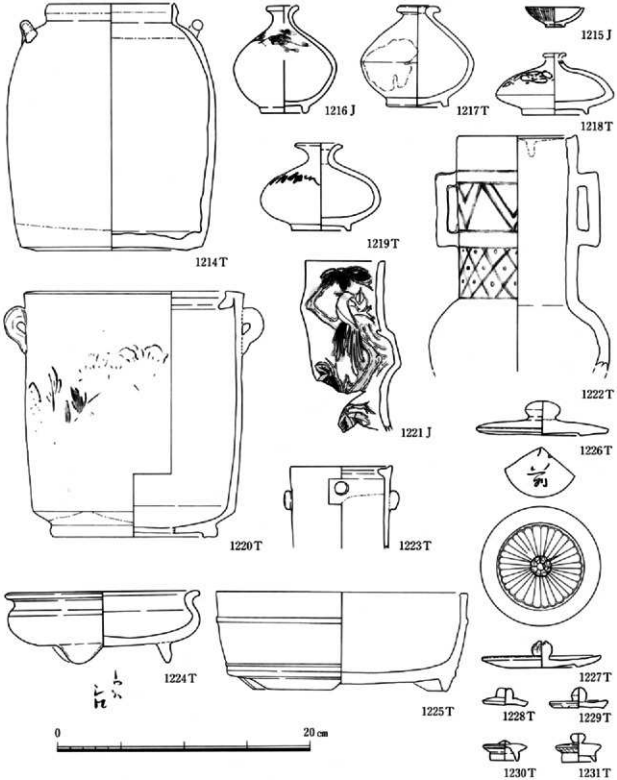
図192　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(4)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1189	730	灰釉＋兵庫鉢	櫛列文	湖	41
1190	730	染付	唐草文	肥	
1191	730		19C代	湖	
1192	730	染付	19C代 唐草文	湖	
1193	019	灰釉	牡丹唐草文	湖	44
1194	014	灰釉＋鉄絵	17C末～17C前半 雑木	肥	
1195	019	長石釉	寛永二年銘(1625)九月(?) 雑木	湖	44
1196	016	染付	山水文	肥	
1197	016	上絵付	梅樹文	湖	
1198	721	灰釉	菊花文	京	41
1199	721		17C末～18C前半 雑樹 高台部露胎	肥	41
1200	711	染付	18C後半～19C初	肥	
1201	712	灰釉	底部墨書「栄治郎」	湖	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1202	712	灰釉		湖	
1203	750	灰釉＋銅緑釉	外面白泥化粧、墨書	京	
1204	750	灰釉	墨書「爪」	湖	
1205	810	灰釉＋(上絵付)	菊花唐草文、五角形	京	41
1206	820	灰釉＋兵庫鉢	草花文	湖	42
1207	811	長石釉＋サビ釉	口縁銀打瓦、墨書瓦、カキオトシ	湖	41
1208	812	鉄釉	口縁銀打瓦	湖	
1209	810	鉄釉	口縁銀打調整、再利用	湖	41
1210	921	灰釉	外底部墨書	湖	42
1211	921	灰釉		湖	42
1212	126	灰釉		湖	
1213	921	灰釉		湖	

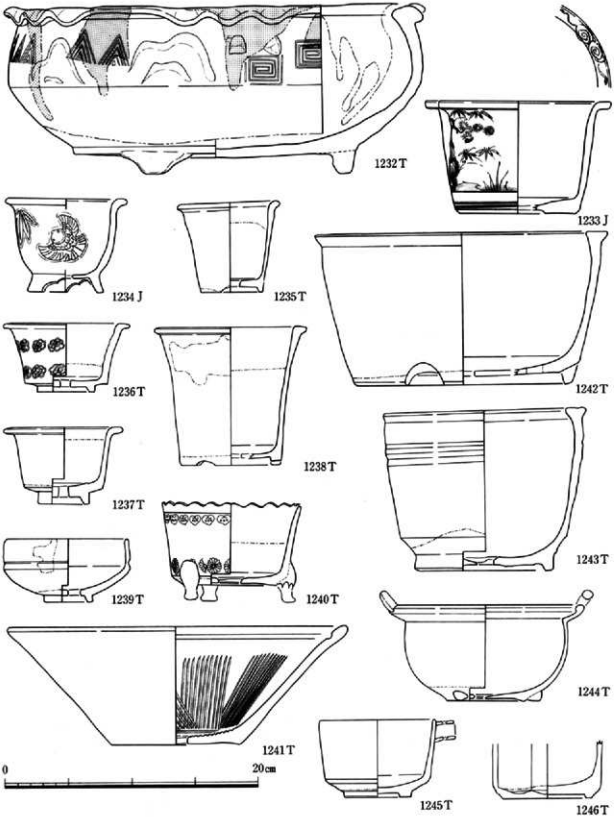
図193　ＳＫ101出土陶磁器類実測図(9)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1214	621	鉄釉	内面酸化鉄分付着	瀬	
1215	610		12C後半～13C後半	肥	
1216	622	染付	12C中～末 梅文	肥	
1217	622	灰釉＋銅緑釉		瀬	39
1218	622	灰釉＋呉須絵	七宝文	瀬	
1219	622	灰釉＋鉄絵		瀬	39
1220	941	灰釉＋鉄絵	牡丹文	瀬	43
1221	931	染付	12C前半～中 人物	肥	
1222	932	長石釉＋呉須絵	幾何文	瀬	42

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1223	931	鉄釉		瀬	
1224	722	灰釉＋銅緑釉流し掛け	底部墨書	瀬	
1225	943	灰釉		瀬	
1226	013	灰釉	墨書「口前」	瀬	
1227	013	鉄釉	菊花文(スタンプ・花弁線毛彫り)	瀬	43
1228	013	鉄釉		瀬	
1229	013	灰釉		瀬	
1230	014	灰釉	内面墨痕	瀬	
1231	014	鉄釉		瀬	

図194　ＳＫ101出土陶磁器類実測図06



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1232	943	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	五重円線＋雷と山文	瀬	
1233	913	染付	1段目：一本 段巻文＋折形梅文	肥	40
1234	914	ルリ釉	1次：中軸沿線 引き出文	瀬	40
1235	911	鉄釉		瀬	42
1236	914	銅緑釉	印花文	瀬	40
1237	911	長石釉		瀬	
1238	911	灰釉＋伝閑蓮入釉？		瀬	42
1239	913	灰釉＋鉄釉	底部穿孔	瀬	23

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1240	913	長石釉	印花文，焼成後穿孔	瀬	42
1241	913	鉄釉	焼成後穿孔	瀬	
1242	911	鉄釉		瀬	
1243	912	鉄釉	焼成後穿孔	瀬	36
1244	913	鉄釉	底部穿孔	瀬	
1245	901	鉄釉		瀬	43
1246	902	灰釉	縁り込み	瀬	42

図195　SK101出土陶磁器類実測図(1)

ＳＫ333：本遺構の時期は19世紀中葉に位置づけられる。

本遺構の出土遺物は口縁部破片数で4019点、総個体数で456.08個体である。用途による占有率は供膳具が164.67個体、41.5%と最も多く、ついで蓋が59.0個体、12.9%、貯蔵具が58.42個体、14.7%の順となっている。蓋については江戸時代を通じて比較的多くの出土量を維持し続けている。この遺構では供膳具に次いで高い割合を示しているが、これはこの遺構におけるその他の用途の遺物の比率が低いためであり、蓋の出土量が江戸時代の平均値と比較しても決して多い訳ではない。また貯蔵具に関しては、平均値より多く出土しており、これは甕Ｂの多さに起因している。

材質面では磁器製品が100.33個体、22.0%を占め、やはりその比率が高い状態を維持している。これはこの時期すでに瀬戸・美濃窯での磁器生産が開始されており、その影響がこうした材質面での比率の変化を起こさせている一因であると考えられる。

器種別では、椀と皿は3.85：１と４倍近い比率差が認められる。また、調理具の鍋・釜が多く出土しているのに対し、擂鉢が少量である点はこの遺構の特徴である。

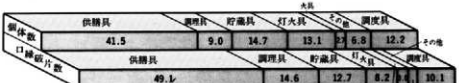
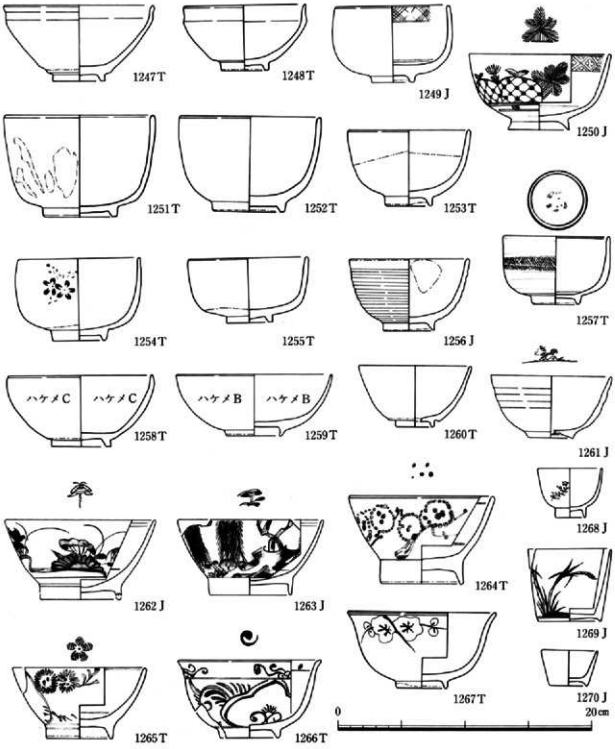


図196　ＳＫ333出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	1148	828	0	1976	0	1182	675	1	1858
	椀	0	729	398	0	1127	0	804	369	1	1174
	小椀	0	74	310	0	384	0	66	189	0	255
	皿	0	277	115	0	392	0	244	112	0	356
	鉢	0	68	5	0	73	0	68	5	0	73
調理具		33	385	8	1	427	205	343	2	1	551
	鍋，釜	33	174	0	1	208	205	133	0	1	339
	鉢	0	69	0	0	69	0	85	0	0	85
	擂鉢	0	21	0	0	21	0	44	0	0	44
	瓶	0	118	8	0	126	0	79	2	0	81
	その他	0	3	0	0	3	0	2	0	0	2
貯蔵具		2	653	43	3	701	2	449	27	1	479
	瓶	0	131	0	0	131	0	24	0	0	24
	壺	2	147	2	3	154	2	73	1	1	77
	甕Ａ	0	73	0	0	73	0	77	0	0	77
	甕Ｂ	0	222	3	0	225	0	198	2	0	200
	鉢	0	80	38	0	118	0	77	24	0	101
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		169	447	7	0	623	149	161	1	0	311
火具		45	81	0	3	129	31	83	0	1	115
化粧具		0	29	65	0	94	0	8	18	0	26
神仏具		0	120	97	0	217	0	28	17	0	45
喫煙具		0	18	0	0	18	0	20	0	0	20
調度具		2	562	16	0	580	1	374	6	0	381
他		6	562	140	0	708	2	162	69	0	233
合計		257	4005	1204	7	5473	390	2810	815	4	4019

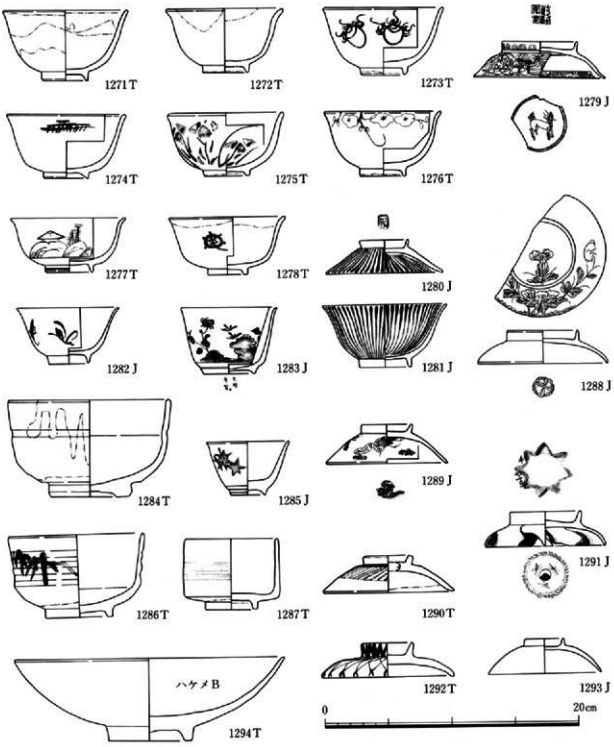
表35　ＳＫ333出土陶磁器類集計表



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1247	111	鉄釉・化粧掛		瀬	
1248	111	灰釉		瀬	22
1249	112	青磁＋染付	結び唐草 結び唐草（五弁花（ジンシャク）間）	肥	
1250	112	呉須絵	鉄絵草 花鳥に松文・間々草に松文	肥	20
1251	112	灰釉＋鉄釉流し掛け		瀬	23
1252	112	灰釉		瀬	23
1253	112	灰釉＋呉須		瀬	
1254	112	灰釉＋呉須絵	桜文	瀬	23
1255	112	鉄釉		瀬	23
1256	112	灰釉＋呉須		瀬	20
1257	112	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	幾何文・五弁花	瀬	23
1258	112	灰釉	刷毛目	瀬	23

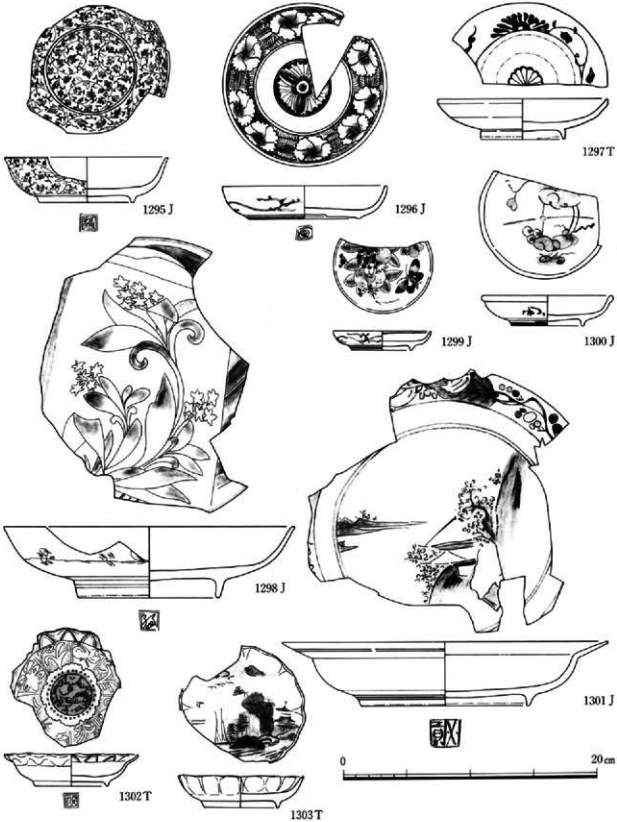
番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1259	112	灰釉	刷毛目	肥	
1260	117	灰釉		瀬	
1261	112	染付	対応中型一本 鉄絵文	瀬	
1262	117	染付	1500年代 草丸文・鉄絵文	肥	
1263	117	染付	1500年代 鉄文・花文	肥	21
1264	117	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	梅花文・梅花文	瀬	24
1265	117	灰釉＋呉須絵＋鉄絵	菊松葉文・五弁花	瀬	24
1266	116	灰釉＋鉄絵	唐草文＋如意雲と唐草文・渦巻文	瀬	21
1267	116	灰釉＋鉄釉	梅花文，内面白泥化粧	瀬	
1268	122	赤絵	鉄文 鉄文・草花文	瀬	24
1269	126	染付	1500年代 草丸文・唐草・草草	肥	26
1270	126		1500年代 竹絵	瀬	

図197　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(1)



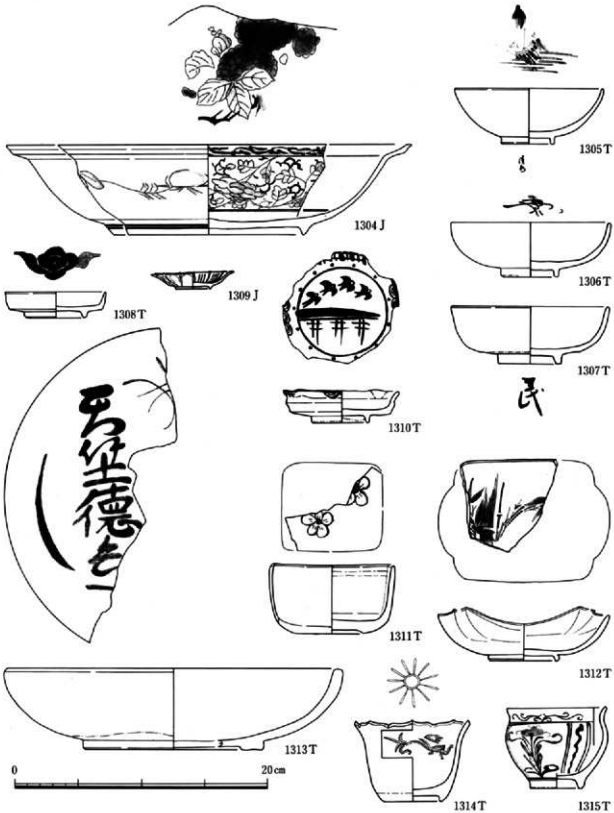
番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1271	116	灰釉＋鉄釉＋呉須		瀬	21
1272	116	灰釉＋呉須		瀬	
1273	116	灰釉＋鉄絵	宝珠文、内面白泥化粧	瀬	23
1274	116	灰釉＋鉄絵	柳文	瀬	23
1275	116	灰釉＋呉須絵	菊花文	瀬	21
1276	116	灰釉＋鉄絵	梅花文・内面白泥化粧	京	24
1277	116	長石釉＋鉄釉	内面白泥化粧、縁間山水文	不	21
1278	116	鉄釉＋銅緑釉	亀文	肥	24
1279	132	赤絵	鉄絵具＝酸化 鉄絵具＝酸化第銅に花文＋鳳凰文	中	25
1280	015	染付	鉄絵具＝酸化 ねじり文＝角印・連れんぞ	瀬	25
1281	116	染付	鉄絵具＝酸化 連れん文＝角印・連れんぞ	肥	21
1282	125	染付	草花文	不	26
1283	125	染付	山に雲＋鉄絵具＝ 竹＝雲＋鉄絵具＝「大明年製」	肥	26
1284	110	灰釉＋呉須絵	波し掛け	瀬	24
1285	125	染付	鉄絵具＝ 鉄絵具＝ランニャ？印	肥	26
1286	110	灰釉＋呉須絵	牧文	瀬	24
1287	124	灰釉＋鉄釉		瀬	
1288	015	染付	鉄絵具　1780～1840年代 花唐文・花文	肥	25
1289	015	染付	1780～1820年代 鳥に鳳凰文・鳳凰文	肥	25
1290	015	鉄釉		瀬	
1291	015	染付	鉄絵具　1780～1840年代 ねじり文＝花文＋ねじり文＋蝶文	肥	25
1292	015	灰釉＋鉄絵	網目文	瀬	25
1293	123		1780～1820年＝中期 23図	肥	
1294	131	鉢ハケ(鉄釉)、灰釉	明毛目	肥	

図198　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(2)



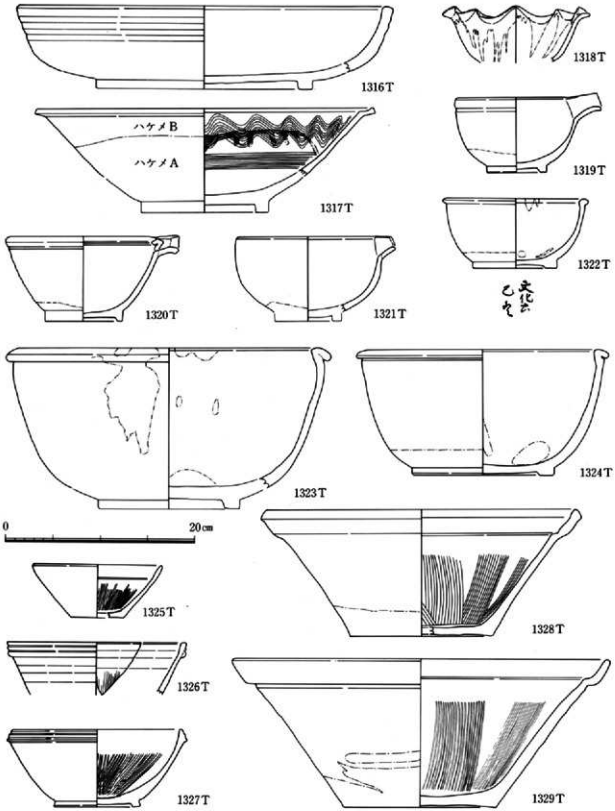
番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1295	137	染付	17C前半～中葉	肥	30
1296	131	型ノ目押圧成形	18C前半～19C前半	肥	
1297	131	輪ハケ・灰釉+鉄釉	菊唐草文＋菊花文	肥	30
1298	131	染付	1820～1860年代	肥	30
1299	131	染付	18C後半～19C初	肥	30
1300	131	染付	19C末～19C前	肥	30
1301	134	染付	1820～1860年代	肥	30
1302	136	鉄釉絵	18C後半	肥	31
1303	136	鉄釉絵	19C末～19C初	肥	31

図199　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1304	134	輪付	1070～1090年代 花唐草文・花卉草＋松唐草＋無地花弁	肥	30
1305	131	灰釉＋呉須絵	梅樹文 ・山水（樹間）・楼閣山水文	肥	
1306	131	灰釉＋呉須絵	（山水文）？	京	30
1307	131	灰釉	墨書	瀬	31
1308	131	鉄釉＋呉須絵	雲文	京	30
1309	137		17C 雲＋17C 雨水 17C・高台砂粒付着	肥	
1310	137	灰釉＋鉄絵	千鳥と横文	瀬	31
1311	147	長石釉＋銅緑釉＋鉄絵	梅花文	瀬	
1312	136	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	竹文	京	31
1313	131	灰釉＋鉄絵＋呉須絵	「天歩徳施」	瀬	30
1314	145	銅緑釉	唐草文＋菊花文	瀬	29
1315	140	長石釉＋鉄釉	唐草＋草花文	瀬	29

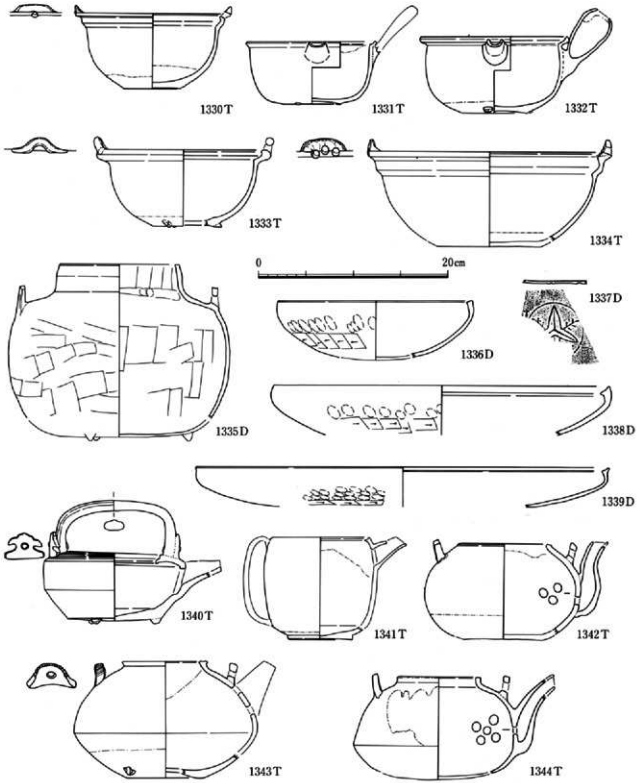
図200　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(4)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1316	131	灰釉		瀬	
1317	143	灰釉＋鉄釉	17C後半～18C前半	肥	
1318	146	銅緑釉＋灰釉流し掛?	18C前半	瀬	
1319	221	灰釉		瀬	32
1320	221	灰釉		瀬	32
1321	221	灰釉		瀬	32
1322	221	灰釉＋銅緑釉流し掛	墨書「文化六己未之」	瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1323	222	灰釉＋鉄釉流し掛?		瀬	
1324	222	灰釉＋銅緑釉流し掛?		瀬	32
1325	237	鉄釉		瀬	
1326	239	無釉		不	
1327	239	鉄釉		瀬	
1328	237	鉄釉		瀬	
1329	510	鉄釉	使用後転用	瀬	

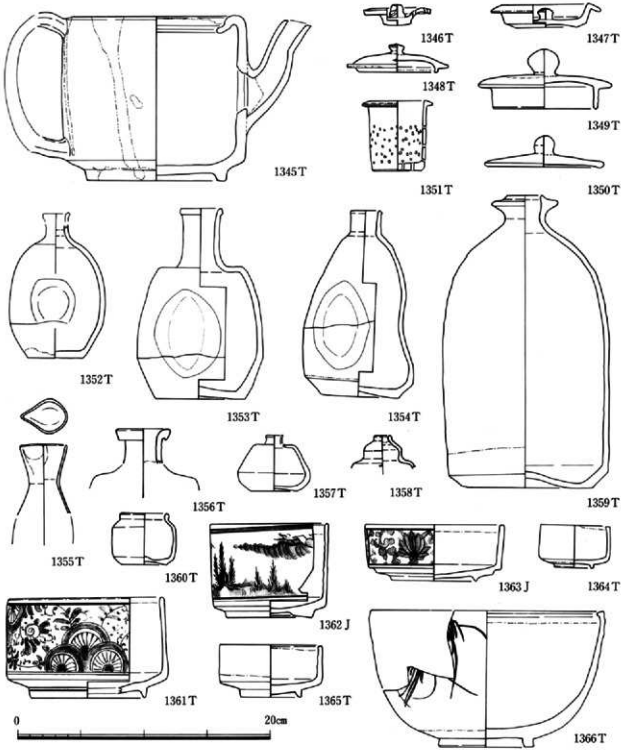
図201　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(5)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1330	215	鉄釉		瀬	
1331	214	鉄釉		不	32
1332	214	灰釉		京	32
1333	215	鉄釉	外底面煤付着	瀬	32
1334	215	鉄釉		瀬	
1335	210		内面煤付着	不	
1336	212			不	
1337	213			不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1338	213			不	
1339	213			不	
1340	242	鉄釉＋灰釉流し掛け		瀬	33
1341	242	鉄釉		瀬	
1342	241	鉄釉	外底部煤付着	瀬	33
1343	241	鉄釉		肥	33
1344	241	銅緑釉＋灰釉		瀬	33

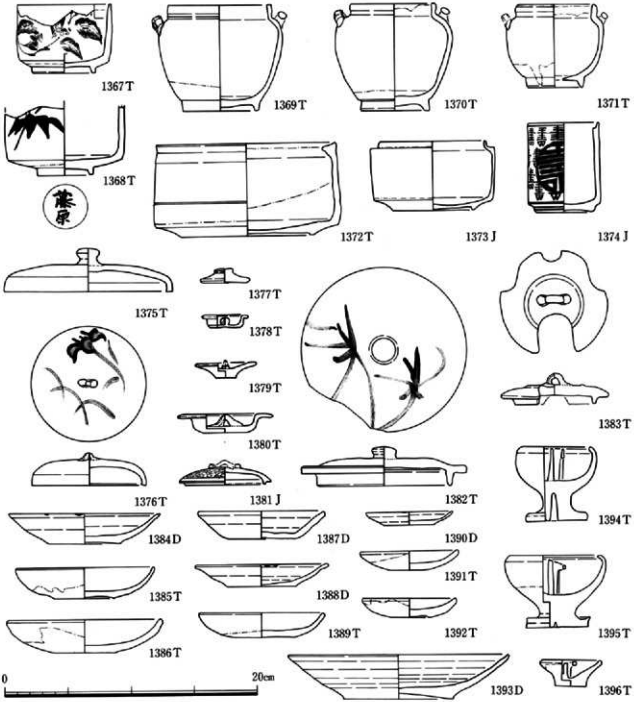
図202　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(6)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1345	318	鉄釉		瀬	36
1346	019	鉄釉		不	43
1347	012	鉄釉		瀬	43
1348	018	灰釉＋鉄釉		肥	
1349	014	灰釉＋鉄釉強し掛け		瀬	
1350	013	灰釉		瀬	
1351	240	灰釉	急須用茶コシ	京	33
1352	314	鉄釉		瀬	
1353	314	鉄釉		瀬	33
1354	313	灰釉		瀬	33
1355	244	長石釉		京	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1356	315	灰釉		瀬	
1357	320			不	36
1358	310	鉄釉		京	
1359	316	鉄釉		瀬	36
1360	324			不	36
1361	351	呉須絵	17C後半～19C前半 唐草文と竹梅図	肥	37
1362	351	染付	17C末～18C前半 鳥に花紋	肥	37
1363	351	染付	17C前半 松竹梅文	肥	35
1364	351	灰釉		瀬	
1365	351	灰釉		瀬	37
1366	351	灰釉＋鉄絵	柳文	瀬	

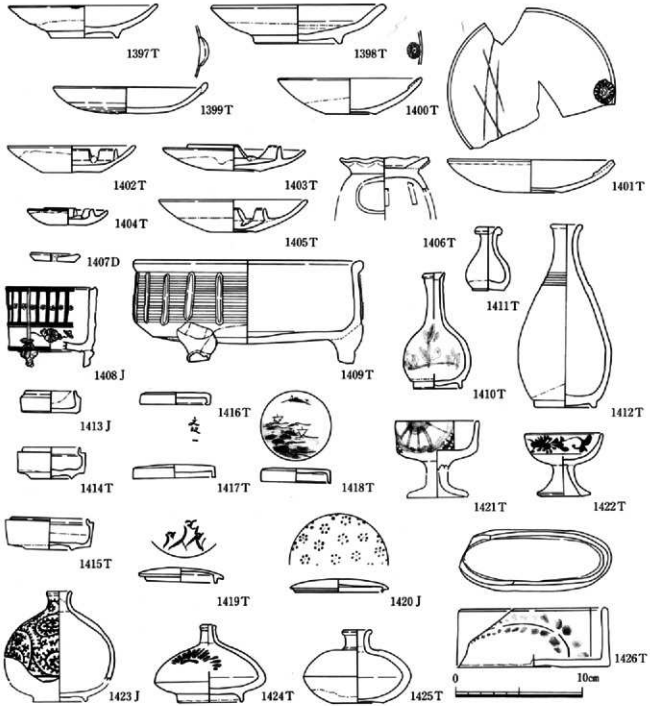
図203　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(7)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1367	351	灰釉＋鉄絵	折枝文	京	35
1368	115	灰釉＋鉄泥絵	竹文＋墨書「藤原」	瀬	37
1369	321	灰釉		瀬	36
1370	321	灰釉		瀬	
1371	913	灰釉		瀬	
1372	721	鉄釉		瀬	37
1373	352	灰釉		瀬	
1374	351	染付	寿文	肥	37
1375	018	灰釉		瀬	
1376	018	灰釉＋鉄泥絵	あやめ文	瀬	44
1377	013	灰釉		瀬	44
1378	012	鉄釉		瀬	
1379	011	長石釉		不	43
1380	012	灰釉		瀬	
1381	014	染付	16C中～19C初 成形	肥	44

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1382	014	灰釉＋鉄泥絵	雷文	瀬	44
1383	019	灰釉		瀬	38
1384	411	底部糸切り	口縁油煙付着	不	
1385	411	鉄釉	口縁油煙付着	瀬	
1386	411	鉄釉		瀬	
1387	411	底部糸切り		不	
1388	411	底部糸切り	口縁油煙付着	不	
1389	411	灰釉		瀬	
1390	411	底部糸切り	胎土黄白色	不	
1391	411	鉄釉		瀬	
1392	411	灰釉		瀬	
1393	411	底部糸切り	内面油煙付着	不	
1394	422	鉄釉		瀬	
1395	422	鉄釉		瀬	
1396	423	灰釉		瀬	38

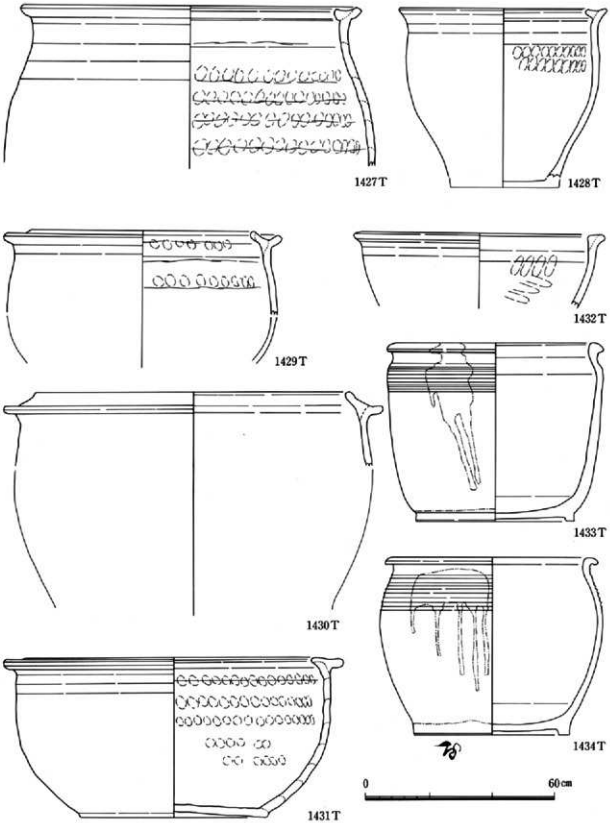
図204　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(8)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1397	411	灰釉	口縁油煙付着	瀬	
1398	411	輪ハゲ・長石釉	口縁油煙付着	瀬	
1399	411		胎土黒色、内面底土層有口縁部焼付痕	不	
1400	411	長石釉		瀬	
1401	411	灰釉		京	
1402	412	鉄釉		瀬	
1403	412		19C 刀痕	瀬	
1404	412	灰釉		瀬	
1405	412	長石釉		瀬	
1406	431	鉄釉		瀬	
1407	411	底部糸切り	轆成前穿孔	不	
1408	443	赤絵	17C 末～18C 初	肥	
1409	933	灰釉		瀬	43
1410	712	灰釉＋鉄絵	松文	瀬	41
1411	712	灰釉		瀬	41

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1412	712	灰釉		瀬	41
1413	740		白磁、外底部墨書痕	肥	
1414	352	灰釉		瀬	
1415	352	灰釉		瀬	38
1416	016	灰釉	内面墨書	瀬	
1417	016	灰釉		瀬	
1418	016	染付		肥	
1419	019	灰釉＋鉄絵	鳥文	瀬	44
1420	017	染付	18C 末～19C 前半	肥	44
1421	730	灰釉＋呉須絵	葡萄子文	瀬	
1422	730	呉須絵	17C 末～18C 初	肥	
1423	622	染付	朝倉草文	肥	
1424	622	灰釉＋呉須絵	松葉文	瀬	41
1425	622	鉄釉		瀬	
1426	630	灰釉＋鉄絵	藤文	瀬	35

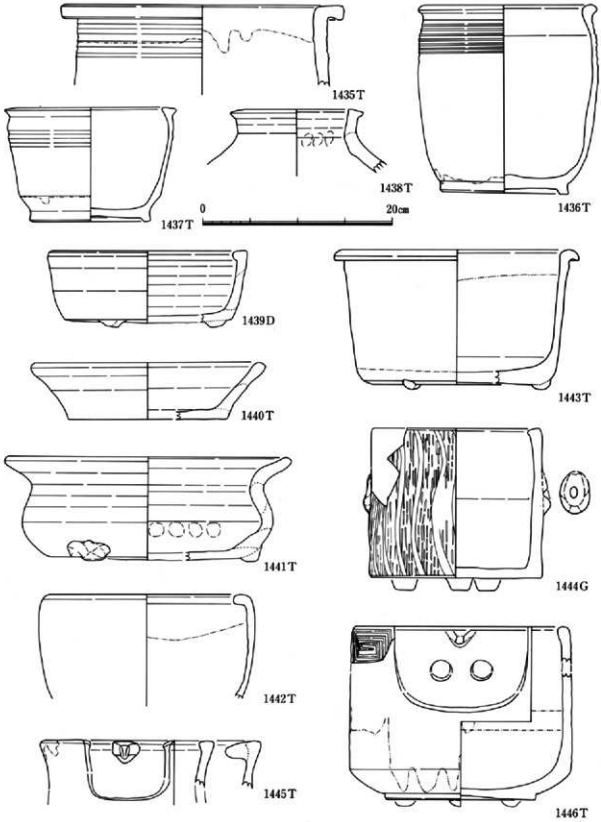
図205　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(9)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1427	332		暗赤色	常	
1428	334		外・内面にぶい橙	常	
1429	333		外・内面にぶい黄橙	常	
1430	333		外・内面にぶい橙	常	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1431	334		外面灰黄褐色、内面赤褐色	常	
1432	335		外面・内面褐灰色	常	
1433	344	鉄釉・灰釉流し掛け		瀬	37
1434	344	鉄釉・灰釉流し掛け	底部墨書	瀬	

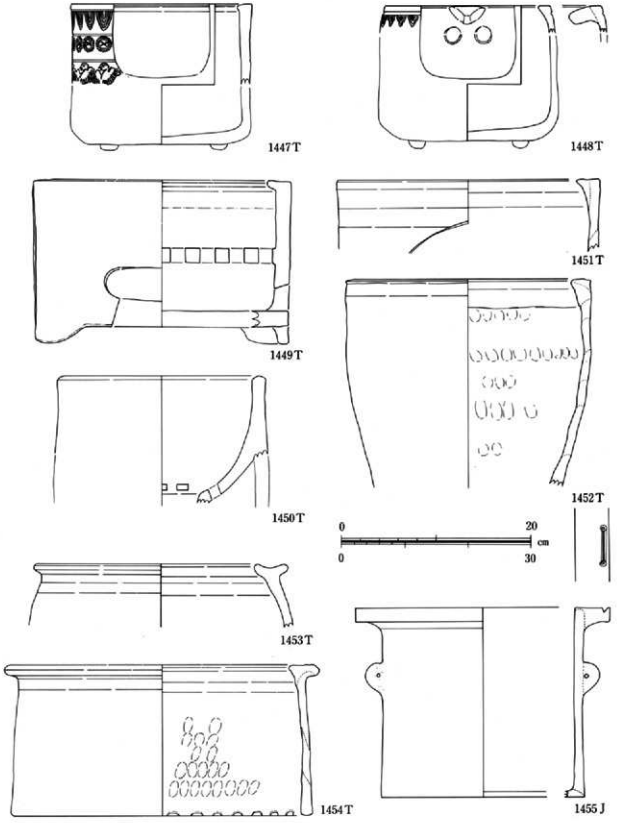
図206　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(1)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1435	340	鉄釉		瀬	
1436	344	鉄釉		瀬	
1437	341	鉄釉		瀬	37
1438	322		外・内面暗茶色	常	
1439	518		口縁周辺煤付着	不	
1440	335		外底部砂目痕	常	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1441	518		外底部砂目痕	常	
1442	511		口縁部打痕	瀬	
1443	511	鉄釉	口縁部打痕	瀬	42
1444	511			不	39
1445	513	長石釉・灰釉流し掛け		瀬	
1446	513	灰釉→長石釉・銅緑釉		瀬	

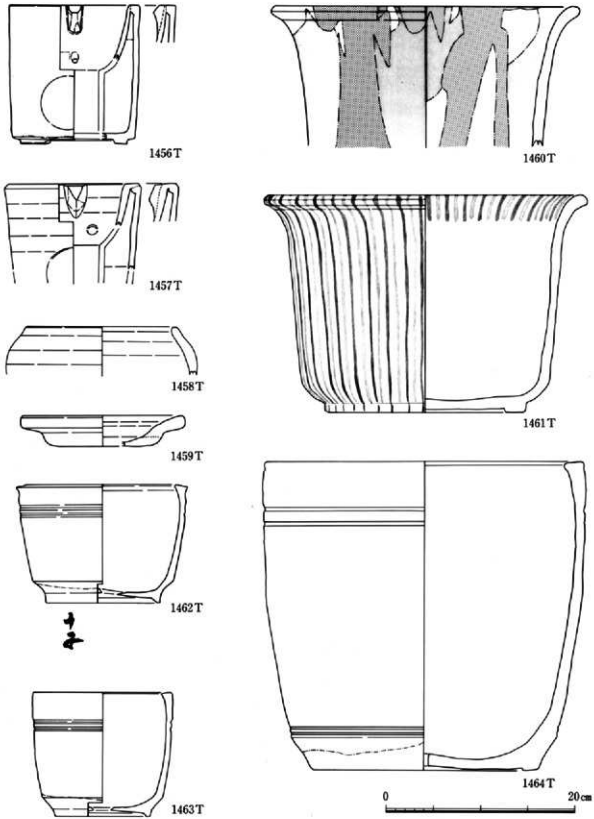
図207　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(11)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1447	513	鋼緑釉	スタンプ文	瀬	
1448	513	鋼緑釉	輪宝つなぎ文（スタンプ）	瀬	
1449	515	長石釉・鋼釉流し掛	長方形	瀬	
1450	514			不	
1451	515		外面橙、内面淡赤橙	常	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1452	515		外・内面黄赤褐色、内面煤付着	常	
1453	530		外面黄橙、内面淡黄橙、煤付着	常	
1454	530		外面橙、内面淡橙	常	
1455	900			常	

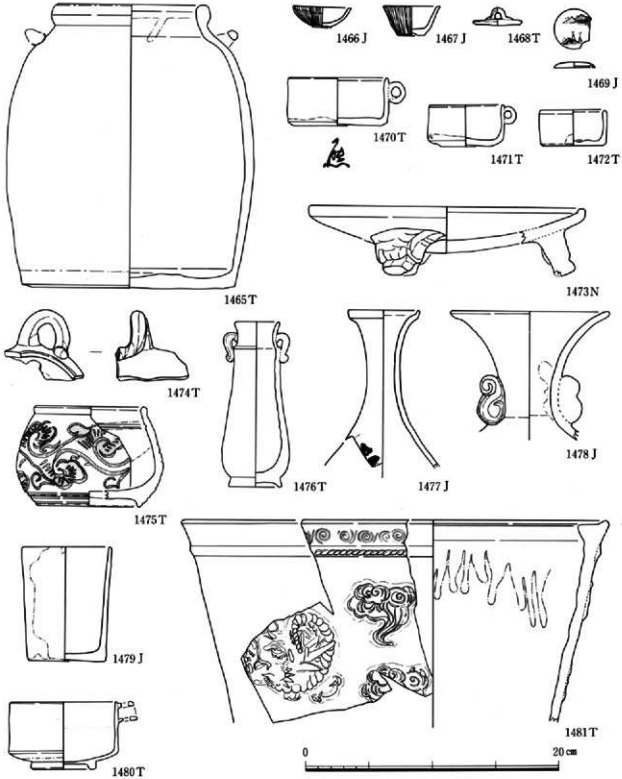
図208　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1456	514	鉄釉		不	
1457	514		胎土黄白色	不	
1458	521		口縁敲打痕	常	
1459	011		底部砂目痕	常	
1460	952	灰釉＋灰石釉＋鉄釉＋呉須		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1461	952	灰釉＋鉄釉＋呉須	変わら文＋変文・変わら文	瀬	43
1462	913	鉄釉	墨書「＋子」	瀬	
1463	913	鉄釉		瀬	37
1464	913	鉄釉	底部穿孔	瀬	37

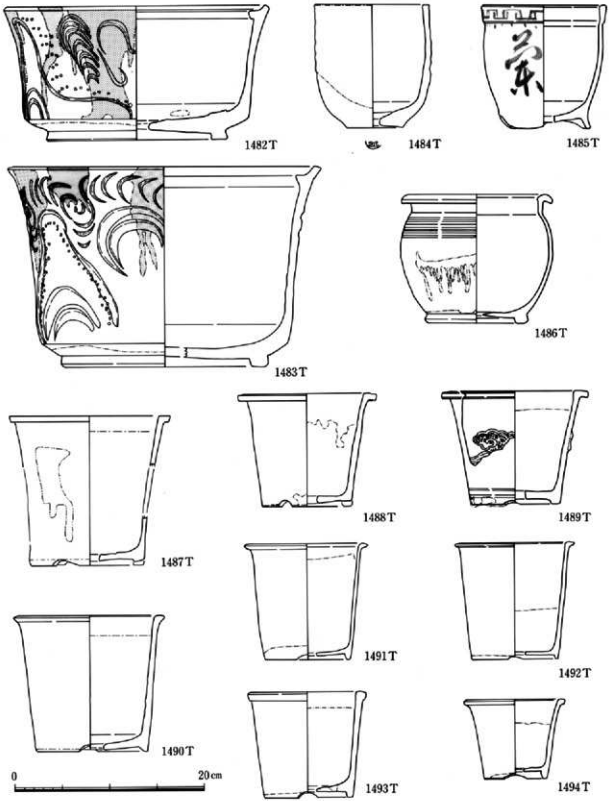
図209　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(3)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1465	621	鉄釉		瀬	
1466	610		18C代 口縁	肥	
1467	610		17C後一18C前 口縁	肥	
1468	013	鉄釉		瀬	44
1469	016	染付	18C前一後半 山水草花文	肥	
1470	921	灰釉	墨書「熊」	瀬	42
1471	921	灰釉		瀬	
1472	921	灰釉		瀬	
1473	900	銅緑釉		不	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1474	510	鉄釉		瀬	
1475	321	鉄泥＋鉄釉　黄釉＋灰釉	唐草文	中	36
1476	932	鉄釉		瀬	42
1477	932	染付	17C後半 角切文	肥	
1478	932		17C後半一18C前半 雷文	肥	
1479	902	鉄釉＋灰釉		瀬	42
1480	901	灰釉＋鉄釉		瀬	43
1481	951	銅緑釉		瀬	

図210　ＳＫ333出土陶磁器類実測図(4)



番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1482	913	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉	底部穿孔、墨書痕	瀬	43
1483	951	灰釉＋鉄釉＋銅緑釉		瀬	43
1484	913	鉄釉		瀬	37
1485	911	鉄釉	漢文＋「愛□幽蘭」	瀬	42
1486	913	鉄釉＋鉄釉流し掛?		瀬	
1487	911	灰釉＋銅緑釉流し掛?		瀬	
1488	911	鉄釉		瀬	

番号	器種	成形・調整等	備考	産地	PL
1489	914	銅緑釉	貼付文	瀬	
1490	911	鉄釉		瀬	42
1491	911	鉄釉		瀬	35
1492	911	鉄釉		瀬	
1493	911	鉄釉	焼成後穿孔3ヶ所	瀬	42
1494	911	鉄釉		瀬	

図211　SK333出土陶磁器類実測図(9)

その他の遺構出土遺物

ここでは、図面に掲載していない遺構出土の遺物群についての組成について述べる。先ず、用途別の比率について、供膳具172.0個体、49.2%、調理具22.33個体、8.1%、貯蔵具25.83個体、7.4%、灯火具87.83個体、25.1%、火具4.75個体、1.4%、化粧具、1.83個体、0.4%、神仏具5.5個体、喫煙具5.0個体、1.3%、調度具18.58個体、4.8%、蓋36.75個体、9.5%である。また材質による比率は、土器18.9%、陶器17.1%となる。

また発掘調査時に、包含層中より出土した遺物群を「検出」と称して、その遺物組成について

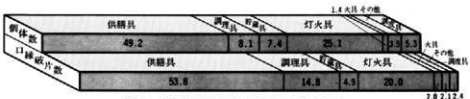


図212　近世遺構出土陶磁器類の用途組成(2)

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		0	1386	678	0	2064	0	1735	690	1	2426
	椀	0	727	322	0	1049	0	916	375	0	1291
	小椀	0	112	196	0	308	0	78	120	0	198
	皿	0	450	129	0	579	0	540	151	0	691
	鉢	0	97	31	0	128	0	201	44	1	246
調理具		71	262	7	0	340	254	408	3	1	666
	鍋，釜	71	83	0	0	154	254	93	0	1	348
	鉢	0	53	7	0	60	0	38	3	0	41
	擂鉢	0	60	0	0	60	0	213	0	0	213
	瓶	0	66	0	0	66	0	64	0	0	64
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
貯蔵具		4	297	9	0	310	2	208	10	0	220
	瓶	0	100	0	0	100	0	20	0	0	20
	壺	4	62	0	0	66	2	45	0	0	47
	甕A	0	34	0	0	34	0	61	0	0	61
	甕B	0	41	0	0	41	0	39	0	0	39
	鉢	0	60	9	0	69	0	43	10	0	53
	その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
灯火具		787	267	0	0	1054	735	168	0	0	903
火具		6	51	0	0	57	13	77	0	0	90
化粧具		5	10	7	0	22	1	6	3	0	10
神仏具		2	41	23	0	66	1	32	13	0	46
喫煙具		0	60	0	0	60	0	37	0	0	37
調度具		0	221	1	1	223	0	106	2	1	109
蓋		0	372	69	0	441	0	109	30	0	139
合計		875	2867	794	1	4537	1006	2886	751	3	4646

表36　近世遺構出土陶磁器類集計表(2)

も、また材質や器種の比率の基準となる椀：皿やその他の傾向についても同様の結果を示している。

これらの数値を、近世遺物全体の組成比率と比較した場合、多少の増減は見られるものの、全体としてはほぼ等しい数値を呈している。また図面掲載分の遺物組成と比較しても、やはり同様の結果が示されている(表37参照)。このことは近世遺物全体を平均した場合、ここに示された組成が、三の丸に関しての基本的遺物組成のあり方であると言える。但し、これはあくまで平均値であり、既に見た様に、各遺構・時代によりそれぞれの組成が窺われる点は注意を要する。

(川井啓介)

図213　検出陶磁器類の用途組成

用途	器種	検合後口縁残存率 土器	陶器	磁器	その他	計	検合前口縁破片数 土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具		1	1288	1197	4	2490	1	1994	1306	6	3307
	椀	0	642	468	0	1110	0	1267	628	0	1895
	小椀	1	93	423	0	517	1	114	351	0	466
	皿	0	523	286	0	809	0	555	310	1	866
	鉢	0	30	20	4	54	0	58	17	5	80
調理具		137	337	8	1	481	376	600	2	2	980
	鍋・釜	137	103	0	1	241	376	150	0	2	528
	鉢	0	64	0	0	64	0	93	0	0	93
	擂鉢	0	70	0	0	70	0	269	0	0	269
	瓶	0	99	6	0	105	0	87	2	0	89
	その他	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
貯蔵具		1	724	88	0	813	3	597	58	0	658
	瓶	0	234	0	0	234	0	60	0	0	60
	壺	1	119	11	0	131	3	89	15	0	107
	甕A	0	46	0	0	46	0	73	0	0	73
	甕B	0	238	0	0	238	0	262	0	0	262
	鉢	0	86	77	0	163	0	112	41	0	153
	その他	0	1	0	0	1	0	1	0	0	1
灯火具		1075	504	12	5	1596	1273	186	1	1	1461
火具		15	131	0	1	147	24	118	0	1	143
化粧具		0	10	65	0	75	0	8	20	0	28
神仏具		14	137	76	0	227	8	49	19	0	76
喫煙具		0	52	0	0	52	0	49	0	0	49
調度具		0	610	18	0	628	9	528	15	0	552
其		16	730	162	23	931	10	288	70	2	370
合計		1259	4523	1624	34	7440	1704	4417	1489	12	7622

表37　検出陶磁器類集計表

(3) 焼　塩　壺

本遺跡出土の焼塩壺は、身188個体（底部計測）、蓋168個体（個体識別）であった。身・蓋ともに成形技法が異なるタイプが出土しており、時期的にもそれぞれ時間幅がみられた。身・蓋の分類については渡辺誠氏により詳細に行われているものに依拠し、これに従うこととする。

（1）身

身は成形技法の差などにより、6類に分かれる。

身A類

柱状の芯で粘土紐を輪積み成形しているもの。

身B類

板状粘土を芯に巻き付け、底部に粘土塊を充塡し、口縁部は段状に削り出され蓋受けを持つもの。

身C類

身B類の蓋受けが退化し、痕跡的になったもの。

身E類

器形全体を同時に型によってつくり、小型で器壁が極端に厚く、蓋受けを持たないもの。

身I類

形態は身B類と同様であるが、ロクロ成形のもの。

身L類

ロクロ成形による偏平な壺で、体部が極端に厚手のもの。

1～34は身A類である。円盤状粘土による底部から、粘土紐を輪積みに成形している。成形時の影響によるものか、ほとんどのものが六角柱形を呈しており、内・外面ともに僅かに稜線が認められる。口縁部は内・外両側に成形時の指頭圧痕が認められる。体部内・外面には粘土紐による継目の痕跡が認められ、接合痕は内傾である。胎土は密で直径1～3㎜の粗粒砂及び極粗粒砂を含む。この身A類には時期及び生産地を決定する上で重要な判断材料となる刻印が押されているものが多い。1～20は無印タイプのものである。21～33は「天下一堺ミなと・藤左衛門」、34には「天下一御壺塩師・堺見なと伊織」という刻印がそれぞれ2行に分割して記されている。これらの刻印は泉州湊村の焼塩メーカーである湊屋が、屋号の他に承応三（1654）年に女院御所より「天下一」の美号を拝してこれを加えたもの、及び延宝七（1679）年に鷹司殿より呼名「伊織」を拝名してさらに付け加えたものである。「天下一」という美号は、天和二（1682）年には幕府の禁令によって使用できなくなるため、この二種類の刻印の使用年代はそれぞれ1654～1679年・1679～1682年にあたる。

47は身B類である。内面には板状粘土による継目及び、芯を覆った粗い平織りの布目の痕跡が認められる。外側体部には「御壺塩師・堺湊伊織」と2行に分割して記された刻印が押されている。これは先述した湊屋の刻印で、幕府の禁令にともない「天下一」を削除したものである。したがって使用年代は天和二（1682）年以降となるが、その下限は不明である。

48・50～78は身C類である。口縁部はB類のようにはっきり削り出されておらず、痕跡的な程度蓋受

け部がつくられている。48は一重枠に「泉州麻生」または「泉川麻玉」と記された刻印を持つものである。枠が一重であるため、後者の可能性が考えられる。その他の刻印は50～60のような「泉湊伊織」という1行のものと、61～64のような「泉州磨生（両脇に、サカイ・御塩所）」という3行に分割して記された刻印とがみられる。使用年代は湊屋の子孫の記録によれば、「泉湊～」は湊村が堺町奉行所付から外れた元文三（1738）年以降のもので、「～磨生～」は正徳三（1713）年が上限で、いずれも下限は不明である。

35～47は身E類である。内側には成形時に僅かに回転させながら引き抜いた痕跡がみられる。容量は極端に少ない。いずれも無印であり、形態も特異であるため不明な点が多い。

79～81は身I類である。内・外面共にロクロ目が明確に認められ、蓋受け部のつくりも薄く鋭角的である。底部には回転糸切り痕が残る。

82～94は身L類である。体部が極端に厚く偏平で、底部の薄いもの（94）もある。胎土は緻密で雲母を多く含んでいる。

（2）蓋

蓋は形態上3類に大別できる。

蓋A類

上面がやや曲面的で、側面が緩やかに外側へ開くもの。

蓋B類

上面が平坦で、側面への変換点がはっきりしていて、垂下か、やや内側に傾くもの。

蓋D類

断面が逆凸字形を呈するもの。

95～117は蓋A類である。内外面ともに丁寧にナデ調整されているものが多い。側面が特に顕著であるのは、整形に伴うものかと思われる。上面とその裏側は指頭圧によって凹凸な面になっているものが多い。この形態は身A類に伴うものと思われる。

118～166は身B類である。内側には成形時にあてた布目痕が残るものが多い。外側全体に丁寧なナデ調整が施されているものが多く。この形態は身B・C類に伴うものと思われる。154～166の外側上面には方重に「泉州岸」と記された刻印が押されている。この印文は確認できた限りでは類例が出土していないので詳細は不明であるが、「泉湊～」、「泉州麻生」等の印例を考えると「～岸」は地名である可能性が考えられる。旧和泉国津田村は「泉州麻生」・「花焼塩・イツミ・ツタ」等の印文で知られる地だが、岸和田藩領であったことを考えると興味深い。

167～177は蓋D類である。他のものと異なり落し蓋で、胎土は灰白色で雲母を多く含み堅く緻密である。166～174には方重に「奈んばん里う・七度やき志本・ふか草四郎左衛門」と3行に分割して記された刻印が、175～177には方重に「奈んばん七度・本やき志本」と2行に分割して記された刻印が押されている。身L類に伴うものと思われる。

（松田　調）

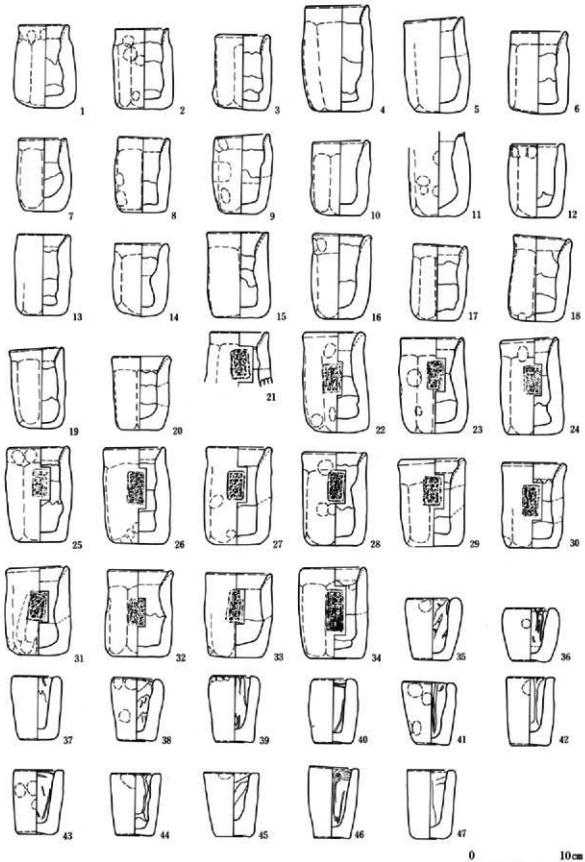


図214　焼塩壺実測図(1)

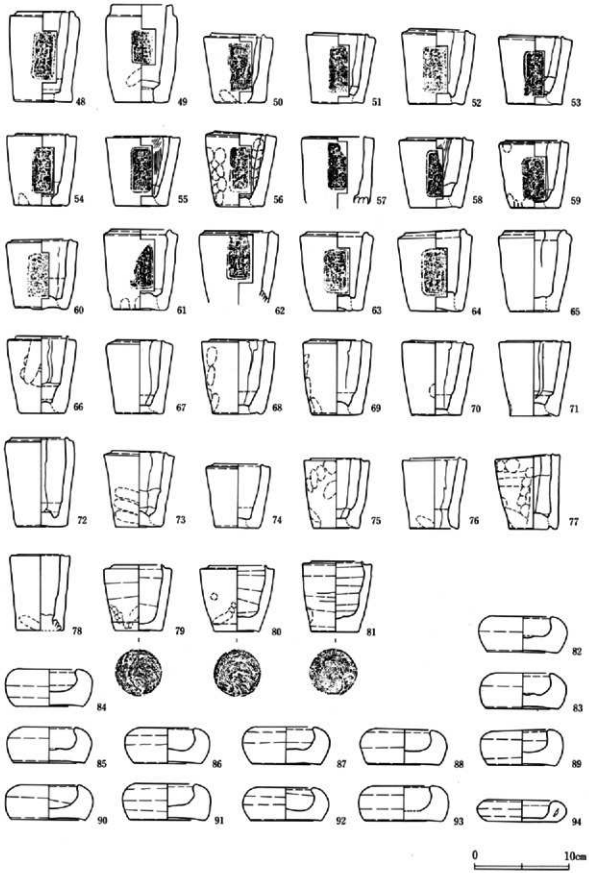


図215　焼塩壺実測図(2)

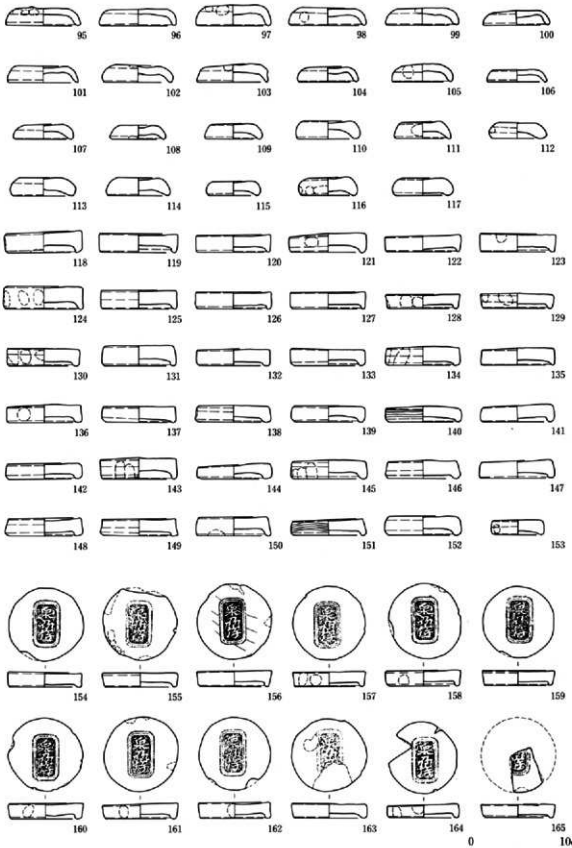


図216　焼塩壺実測図(3)

図217　焼塩壺実測図(4)・刻印拓影

焼塩壺（身）

図版番号	遺構	種類	法量（cm・cc） 器高	口径	肩径	底径	容積	有印
1	SK034	A	8.9	4.9		(3.7)	90	
2	SK341		8.5	5.4		5.0	80	
3	SK341		(7.9)	(5.2)		4.7	(65)	
4	SK401		11.3	(6.4)		6.0	(155)	
5	SK002		10.0	6.0		3.9	135	
6	SK215		8.7	5.7		5.7	95	
7	SK123		7.8	4.7		3.9	50	
8	SK118		8.0	5.1		4.6	55	
9	SK101		8.3	5.4		3.5	(90)	
10	SK304		7.9	5.6		4.5	60	
11	SD106		—	—		4.9	(75)	
12	SK206		7.9	5.2		4.2	70	
13	SK021		8.7	(5.3)		3.6	(60)	
14	SD104		7.8	5.4		4.6	60	
15	SK401		9.1	(6.1)		5.0	(80)	
16	SK210		9.1	5.7		4.3	65	
17	SK012		8.1	5.2		3.5	75	
18	SD106		9.0	5.5		4.6	90	
19	SK118		8.5	5.5		3.8	75	
20	SK002		7.9	5.5		3.9	70	
21	SK002		—	(5.7)		—	—	○
22	SK118		10.7	6.0		5.0	100	○
23	SK117		10.2	6.4		5.4	(125)	○
24	SK117		10.2	5.7		5.4	(115)	○
25	SK118		10.1	6.0		5.1	130	○
26	SK021		10.2	6.2		5.2	110	○
27	SK103		10.4	(6.2)		4.2	(130)	○
28	SD003		(9.9)	(6.4)		5.3	(115)	○
29	SK103		9.4	6.3		4.9	(100)	○
30	SK010		9.1	6.4		4.7	130	○
31	SK103		9.4	5.9		5.2	110	○
32	SK118		9.2	6.5		5.8	130	○
33	SK103		9.0	(6.2)		5.0	(125)	○
34	SK010		9.7	6.2		5.2	(145)	○
35	SK206下層	E	6.6	5.0		3.9	30	
36	SK333		5.7	4.7		3.7	30	
37	SK206		6.8	4.2		3.9	30	
38	SK206		6.7	4.4		4.0	30	
39	SK101		7.2	4.2		3.9	30	
40	SK101		6.9	(3.5)		3.6	(30)	
41	SK206		6.7	4.3		3.3	30	
42	SK206下層		7.4	4.2		3.7	30	
43	SK333		6.9	4.6		3.9	30	
44	SK101		6.6	(5.0)		(3.7)	30	
45	SK101		6.8	(5.8)		3.7	(30)	
46	SK219		7.6	4.6		3.8	35	
47	SK101	B	7.4	3.8		3.7	35	
48	SK101	C	9.6	5.4	7.3	5.8	(145)	○
49	SK104		10.3	(6.0)		—	—	○
50	SK101		(7.3)	(5.5)	7.2	(5.2)	(90)	○
51	SK002		7.4	5.6	7.3	5.6	100	○
52	SK315		8.0	6.0	7.8	5.9	115	○
53	SK002		7.3	5.8	7.7	5.9	105	○
54	SK105		7.6	(5.5)	(7.3)	5.8	(105)	○
55	SK002		7.5	5.9	(7.8)	5.6	(100)	○
56	SK202		(7.9)	(5.6)	7.3	5.0	85	○
57	SK002		—	(5.8)	(7.6)	—	—	○
58	SK002		7.4	(5.9)	(7.7)	5.5	(110)	○
59	SK101		7.2	(5.8)	(7.2)	4.9	(80)	○
60	SK216		(7.4)	(6.1)	7.4	5.5	105	○
61	SK103		8.6	(6.3)	(7.8)	(5.4)	(115)	○
62	SK115		—	(7.2)	8.4	—	—	○
63	SK115		8.9	(6.3)	(7.2)	5.2	(105)	○
64	SK104		8.5	6.2	7.8	5.6	120	○?
65	SK104		8.6	6.2	7.8	5.1	110	
66	SK101		(8.2)	(5.4)	6.9	4.5	(80)	
67	SK101		7.8	(4.9)	(6.9)	(4.9))	100	
68	SK207		7.9	5.7	7.8	5.3	100	
69	SK202		(8.0)	(5.4)	7.2	5.2	100	
70	SK207		7.9	5.6	7.3	5.3	90	
71	SK101		8.0	(5.9)	(7.5)	5.0	(100)	
72	SK101		9.4	(5.8)	(7.0)	4.5	135	
73	SK014		8.1	(5.6)	7.5	4.3	100	
74	SK101		6.8	(5.0)	6.6	4.6	(60)	
75	SK101		7.4	5.3		4.9	80	
76	SK101		(7.5)	(5.1)		—	(95)	
77	SK103		7.8	5.2	6.8	4.9	95	
78	SK009		(8.1)	(4.6)	(6.2)	(4.8)	—	
79	SK101	I	7.0	5.2	7.2	4.9	95	
80	SK101		7.0	(6.0)	(7.8)	4.8	(100)	
81	SK315		7.5	5.4	7.4	5.1	110	
82	SK002	L	3.8	6.1		7.5	50	
83	SK002		3.8	5.9		7.7	55	
84	SK101		3.9	5.9		7.2	45	
85	SK002		3.8	5.7		7.6	50	
86	SK118		3.8	5.9		7.1	50	
87	SK118		4.0	6.0		7.2	50	
88	SK010		3.8	5.9		7.7	50	
89	SK118		3.7	5.7		7.3	40	
90	SK002		3.7	6.2		7.8	50	
91	SK118		3.9	6.3		7.9	45	
92	SK002		3.6	5.7		7.4	55	
93	SD002		(3.7)	(6.3)		(7.9)	—	
94	SK219		(2.3)	(7.3)		(7.4)	(4.0)	

表38　焼塩壺観察表(1)

焼塩壺（蓋）

図版番号	遺構	種類		法量（cm・cc） 器高	口径	肩径	底径	有印
95	SK117	A		1.8	7.6	5.2		
96	SD104			1.7	7.8	6.1		
97	SK117			2.2	7.4	5.5		
98	SK121			1.9	7.8	5.8		
99	SK121			1.8	7.3	5.1		
100	SK503			1.5	6.8	5.2		
101	SK002下層			1.7	7.4	5.4		
102	SK021			1.8	7.1	5.0		
103	SK115			1.9	7.4	5.8		
104	SK405			1.6	(6.0)	(4.6)		
105	SK118			1.9	6.2	4.3		
106	SK021			1.3	6.2	4.5		
107	SK304			1.6	5.9	3.5		
108	SK343			1.5	(5.6)	(4.0)		
109	SK219			1.6	5.7	3.5		
110	SK219			1.7	6.1	3.6		
111	SK219			1.8	5.8	3.4		
112	SK333			1.7	5.1	4.4		
113	SK002下層			1.9	6.2	—		
114	SK101			1.9	6.2	1.7		
115	SK206下層			1.6	5.1	3.8		
116	SK101			1.9	5.5	—		
117	SK101			1.9	5.5	4.1		
118	SK219	B		2.2	7.2	6.3		
119	SK101			2.0	7.8	6.4		
120	SK002			1.8	7.6	6.6		
121	SK219			2.0	7.3	6.3		
122	SK115			1.7	7.4	6.6		
123	SK103			1.9	7.5	6.7		
124	SK010			2.4	(8.0)	6.8		
125	SK104			(2.0)	(7.6)	(6.7)		
126	SK115			1.8	7.4	(6.5)		
127	SK115			1.8	7.5	6.6		
128	SK101			(1.5)	(7.0)	6.4		
129	SK101			1.7	7.0	6.0		
130	SK101			1.9	7.0	6.2		
131	SK206			(2.0)	(7.7)	(6.7)		
132	SK101			1.7	7.2	6.1		
133	SK101			1.7	7.0	5.9		
134	SK105			2.0	7.3	6.4		
135	SK206下層			1.8	7.6	6.5		
136	SK207			1.9	7.3	6.1		
137	SK002	B		1.7	7.2	6.3		
138	SK101			1.8	7.2	6.1		
139	SK202			1.8	6.9	5.9		
140	SK101			1.7	7.3	6.3		
141	SK014			1.8	7.2	6.2		
142	SK101			1.7	7.3	6.3		
143	SK206			2.3	7.4	6.8		
144	SK101			1.4	6.6	5.8		
145	SK101			2.0	7.3	6.0		
146	SK101			1.9	4.3	6.1		
147	SK002			1.9	7.6	6.5		
148	SK002			1.9	7.3	6.3		
149	SK002			1.8	7.3	6.6		
150	SK104			2.0	7.4	6.2		
151	SK101			1.8	7.3	6.3		
152	SK207			2.0	7.3	6.0		
153	SK333			1.6	5.0	4.4		
154	SK101			1.5	7.1	6.3		○
155	SK101			1.5	7.3	6.4		○
156	SK101			1.7	7.1	6.4		○
157	SK101			1.6	7.2	6.4		○
158	SK101			1.7	7.3	6.6		○
159	SK101			1.6	7.1	6.4		○
160	SK101			1.6	7.2	6.4		○
161	SK101			1.6	7.0	6.3		○
162	SK101			1.7	7.1	6.2		○
163	SK101			1.5	7.3	6.4		○
164	SK315			1.4	7.1	6.3		○
165	SK101			(1.5)	(7.1)	(6.6)		○
166	SK101			(1.4)	(7.1)	(6.4)		○
167	SK010	D		1.1	6.7	5.2	4.6	○
168	SK010			1.0	6.5	5.6	4.8	○
169	SK115			1.0	6.9	5.6	4.7	○
170	SK002			0.9	(6.9)	5.3	4.8	○
171	SK002			1.0	(6.9)	5.4	4.4	○
172	SK002			1.0	6.8	5.5	4.1	○
173	SK002東上層			0.9	6.7	5.5	4.7	○
174	SK002			1.0	—	(5.4)	4.6	○
175	SK002東下層			0.9	(6.8)	(5.7)	(4.8)	○
176	SK002			0.9	(7.3)	(5.8)	(5.9)	○
177	SK002			0.9	6.9	5.3	4.7	○

参考文献

渡辺　誠　「焼塩」『講座日本技術の社会史２　塩業・漁業』1985

表39　焼塩壺観察表(2)

(4) 瓦　　類

瓦類については、下記のような分類で整理を行った。

- 本瓦
  - 軒平瓦：中心葉の形と子葉の組み合わせで分類（1～25）。
  - 軒丸瓦：巴と珠文数で分類。小ぶりの一群は掛瓦に多くみられた（26～37）。
- 桟瓦
  - 軒桟瓦：（38～49、滴水瓦を除く）
  - 滴水瓦：（40～43）
  - 家紋瓦：桟瓦ではあるが、模様に家紋が入っているもの（54～61）。

これ以外の瓦類に関しては、以下個別遺物の記述中で名称を述べることとしたい。

(47) は、水返し付きの桟瓦である。これには金箔が塗布されていた痕跡が窺えた。(50)～(53) は菊丸瓦の丸瓦部分で巴文・菊文（陽刻、陰刻の2種類）のタイプが見られる。(54)～(61) は家紋タイプの桟瓦で、(54)は五三桐が陽刻されており、清洲城下町で出土する戦国時代に見られる瓦である。(55)、(56) はいずれも竹腰家の家紋が刻されており、前者は寛文三年以前の梅鉢文、後者は四ツ目文と言われるものである。

	I							II	III			IV									V							VI	VII	VIII	IX	X	屋敷地
												①							②		①						②						
	1	2	3	4	5	6		1	1	2	3	1	2	3	4	5	6	1	2		1	2	3	4	5	6	1	1	1	1	1	1	
SK015	•	•							•																								A
SD203				•		•		•			•		•		•				•											•		•	B
SK210				•		•	•		•		•	•	•	•						•		•						•	•				B
SK401											•																						B
SD106		•																										•					C
SD104																										•		•					C
SK304							•		•	•		•		•	•									•				•	•	•			D
SK123									•	•		•		•	•	•					•	•	•			•		•	•	•			D
SK209													•																				D
SK212																				•													D
SK206									•			•									•												D
SK211									•			•		•	•						•	•											D
SK219												•																					D
SK101									•	•		•		•	•	•					•	•	•	•	•	•	•	•	•				D
SK333	•									•		•																			•		D

表40　近世軒平瓦出土遺構対応表

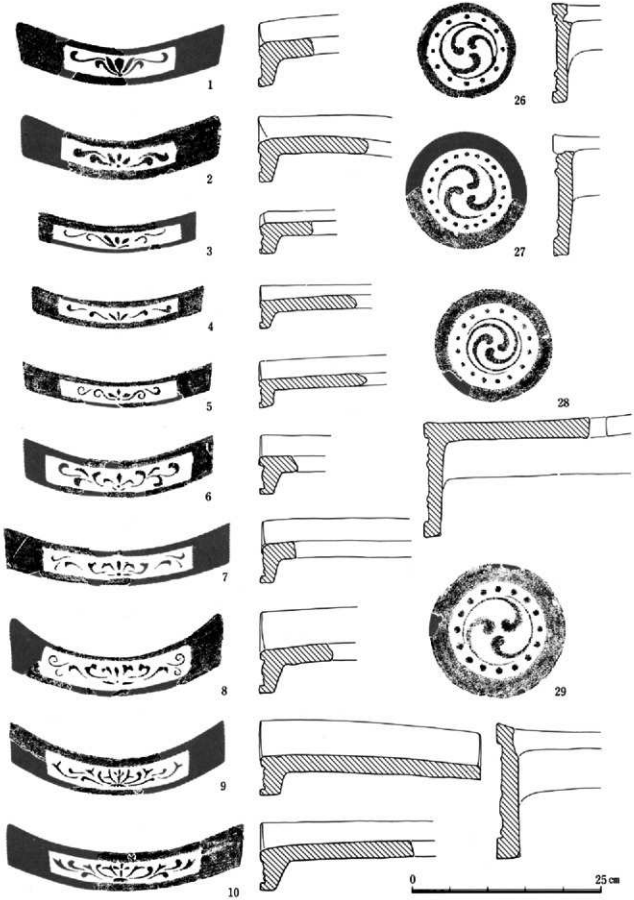


図218　近世瓦実測図(1)

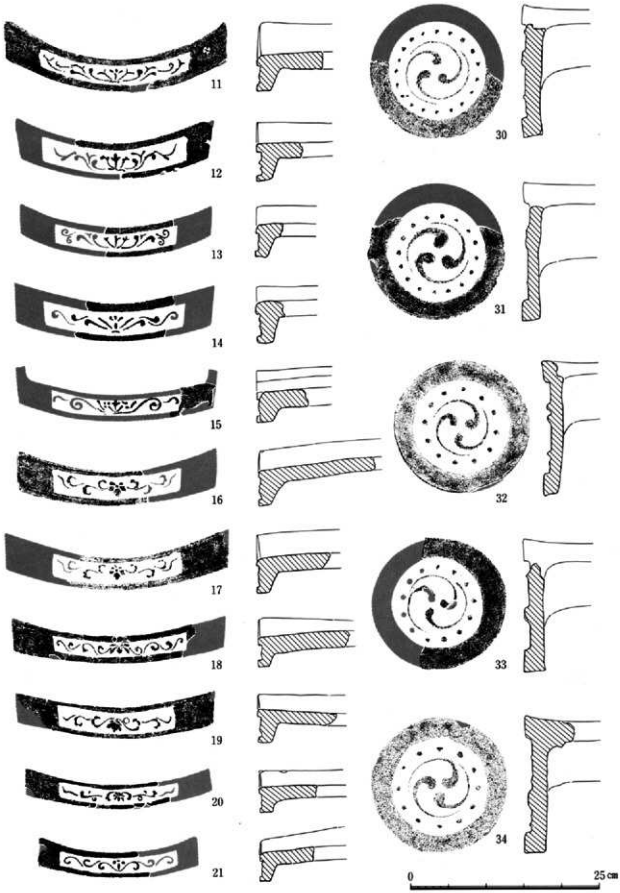


図219　近世瓦実測図(2)

(57)～(67)は鬼瓦の一群である。(57)は山澄氏の家紋である六ツ日足文が陽刻されている。(58)はささきにみた竹腰氏の寛文三年以前の梅鉢文が見られる。(59)から(61)は裏葵と言われる家紋が刻されている。この裏葵と呼ばれる家紋については、『金城温古録』(1)に「うら御紋」あるいは「もと葉うら御紋」と記されてはいるが、明確な由緒は定かではない。(62)は巴紋の、(63)は水の文字が刻まれた鬼瓦の一部である。(64)は同じく鬼瓦の一部であるが文様が花状であることを除けば、それ以外の全体の意匠は不明である。また(65)・(66)についても『金城温古録』(1)に「御深井丸吹貫御門棟の鬼板」、「御本丸御風呂屋の御紋形」として記載されている桃のつぼみ、若しくは葵つぼみ形の鬼瓦の一部である可能性を持つ。(67)は「譌主尾州名古屋(後欠)□□羽根田甚六　享保六辛丑年三(カ)」と線刻されており、家臣の屋敷の作事葺師の棟梁が係わっている点が注目される。また(68)は「濃州　御瓦師　金兵衛」の刻印がみられ、美濃の瓦師が尾張藩の家臣の屋敷の造成に関係していたことが理解できる。(69)、(70)は掛瓦で菊水文が描かれている。(71)と(72)は同一個体と思われ、本瓦の軒平瓦を写した織部の瓦である。その釉調等から屋根に葺く事を目的としたのではなく、風炉敷と呼ばれ、茶会等の席上、風炉の下に敷いたと考えられている。(73)も織部の丸瓦を写したもので、用途は不明である。上記の3点の遺物については、不明な点が多く、その成形技法が瓦職人が用いる瓦作製時に用いる技法ではなく、例えば(73)はロクロをもちいた輪積み成形で、円筒状に作製したものを半截している。これはあきらかに陶磁器等の製作技法が用いられており、その面からもこの3点の瓦が本来の使用目的とは異なる用途のために作製されていることが推測される。(74)、(75)は塼と称される。これらも織部の釉調がほどこされており、焼成窯は、瀬戸市穴田町に所在する穴田第1号窯から同一の製品(敷瓦)が出土しており(2)、尾張藩祖徳川義直の廟所である定光寺の焼香殿に使用されているものと同タイプのものである。

(川井啓介)

註

(1)　『金城温古録』2(『名古屋叢書続編』　名古屋市教育委員会　1965)
(2)　『瀬戸市歴史民俗資料館　研究紀要　VII』(瀬戸市歴史民俗資料館　1988)

番号	出土遺構	備考	PL
1	S K015		47
2	表採		47
3	S D203		47
4	S K312		47
5	S K304		47
6	S D203		47
7	S K206		—
8	S K101		47
9	S K304		47
10	S K304		47
11	S K211		47
12	S K209		47
13	S D203		47
14	S K210		—
15	S K211		47
16	S K101		47
17	S K123		47
18	S K101		47
19	S K304		47

番号	出土遺構	備考	PL
20	S K101		47
21	S K101		47
22	S K101		47
23	S K304		—
24	S K333		47
25	S D203		47
26	S K210		48
27	S K210		48
28	S K210		48
29	S D203		48
30	S K304		48
31	S K304		48
32	S K211		48
33	S K123		48
34	S K123		48
35	S K101		48
36	S K118		48
37	S K333		48
38	S K327		47

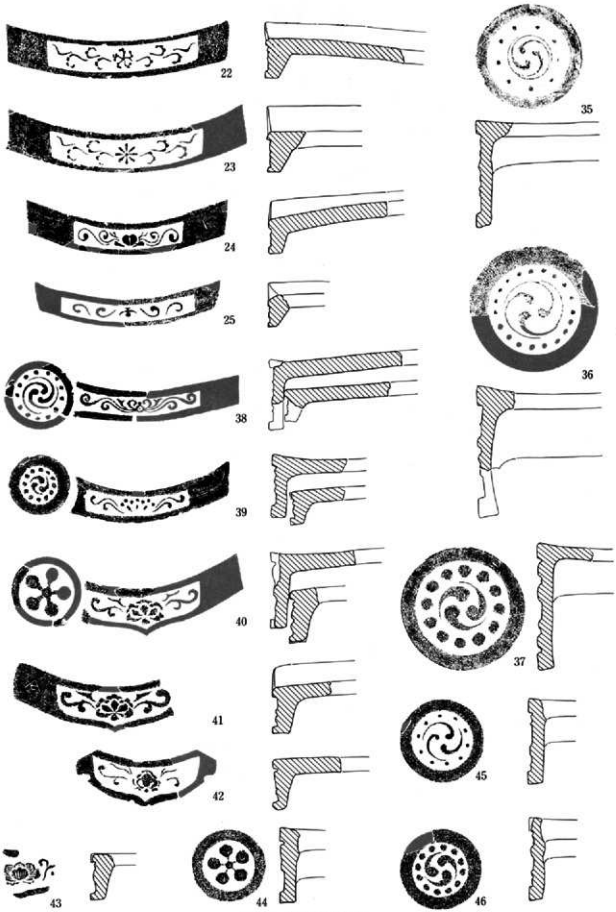


図220　近世瓦実測図(3)

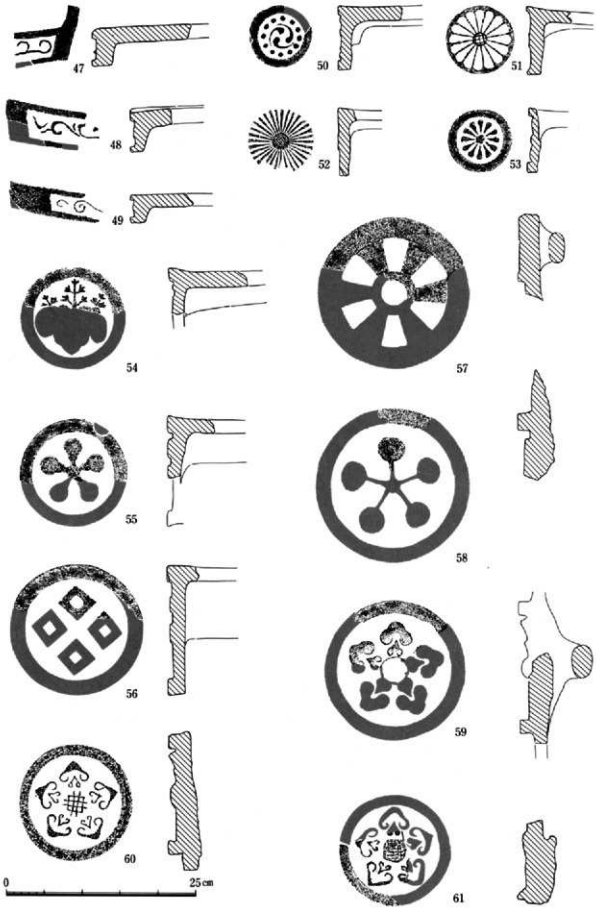


図221　近世瓦実測図(4)

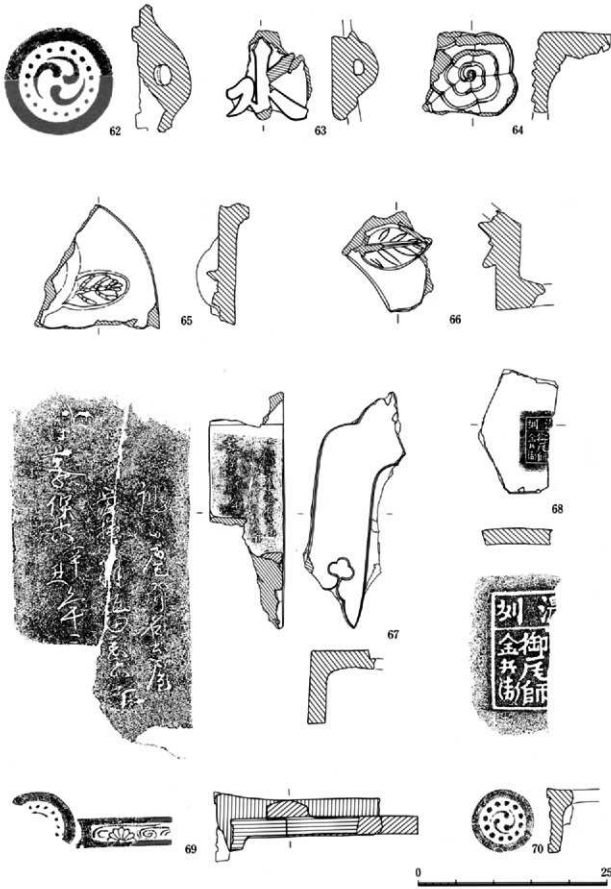
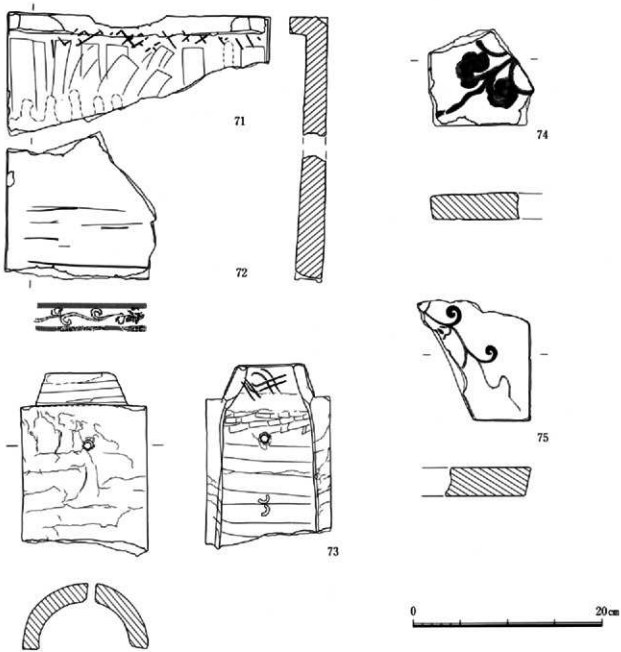


図222　近世瓦実測図(5)



番号	出土遺構	備考	PL
39	検I		47
40	表土ハギ		47
41	SS301		48
42	検I		48
43	表土ハギ		48
44	SK127		49
45	SK002		49
46	SK101		—
47	SD145		48
48	SD104　下層		48
49	SK101		48
50	SK127		—
51	SK002　下層		49
52	SK304		49
53	SK101		49
54	0区検I		49
55	検I		49
56	両壁一括		49
57			49

番号	出土遺構	備考	PL
58	SD203		—
59	SK211	—	—
60	SK009		49
61	SK101		49
62	SD104　下層		—
63	SK333		—
64	SK206		—
65	SD203		—
66	SK101		—
67	SD001		49
68	検I		—
69	検I		49
70	SK127		—
71	SK101		—
72	SK101		—
73	SK101		—
74	SD104　上層		—
75	SK210		—

図223　近世瓦実測図(6)

(5) 人　形　類

今回の発掘調査で出土した人形類は、個体識別法で、包含層中の出土遺物も含めると総数1214点にのぼる。但し、遺物の出土状況には、若干の偏りが見られ、それが逆に遺構を特徴付ける材料となっている。その点については後述することとし、まずは分類の基準を示す。

1．人形　　1．人物　　1－小僧、2－神様、3－その他

　　2．動物　　1－鳥（1-とり、2-にわとり）、2－馬（1-馬、2-騎馬人物）

　　3－猫、4－その他

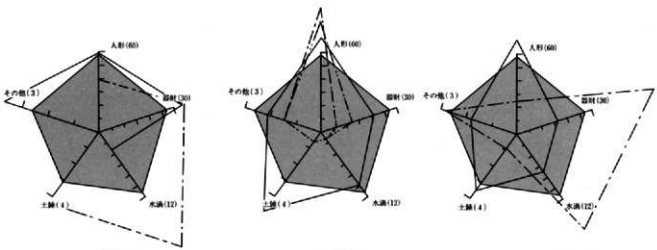


図224　土坑出土人形類の組成パターン

遺構	人形			器財				水滴			土錘	その他	不明	合計
	人物	動物	その他	硯塗物	調理具	その他	方形	形象	その他					
SD103	1				2				1				1	5
SD104		2		1						1			1	5
SK002					5	1			1			1	1	9
SK009	1	3			1			1						6
SK014	2	6		1				1	1	1			1	13
SK101	108	131	1	9	50	24	10	19	10	19	8	88		477
SK104				1	1	1		1						4
SK118	2	14		2	6	1					1	16		43
SK123				2	2			4	1					9
SK202	52	79		1	8			2		1	2	14		159
SK206	6	12		7	8	1	1	7	2	2		15		61
SK207	23	37	1		5	4		1		1	1	8		81
SK208	2	6												8
SK216		5		1	1			1					1	9
SK301	3	1											1	5
SK333	13	12	1	17	31	10	6	10	3	1	3	15		122
SK346	2				2			1		1	1			7
他の遺構		6			8	3	2	8	3	4	5	5		43
検出	18	22		24	24	16	4	9	6	1	5	18		147
小計	233	336	3	68	152	61	24	65	28	32	27	185		1214
合計		572			281			117		32	27	185		1214

表41　近世人形類集計表

2．器財	1．建造物	1－家、2－灯籠、3－橋、4－船、5－その他
	2．調理具	1－なべ（行平）、2－かま（茶がま、羽釜）、3－（くど、かまどへっつい、こんろ）、4－土瓶（鉄瓶）、5－銚子、6－蓋（なべ・かま等と明確に対になるものは、なべ・かまとする） 7－その他
	3．その他	1－紅皿、2－文具、3－その他
3．水滴	1．方形	1－模様入り、2－無文
	2．形象	1－人物、2－動物、3－植物、4－器財、5－その他
4．土錘		1－大、2－中、3－小
5．その他		1－合子、2－型抜き、3－鈴、4－貨幣、5－その他
0．不明		

以上の分類に従って、個体識別法により分類した人形類の一覧が表41である。これをみると、遺構からの出土については、ＳＫ101、ＳＫ202、ＳＫ207、ＳＫ333の４遺構に集中していることが判る。中でもＳＫ101は477個体と全体の39.3％が出土している。但し、ＳＫ101、ＳＫ202、ＳＫ207の３遺構はＳＫ207→ＳＫ202→ＳＫ101の順で掘削されており、それぞれが切り合い関係を持ち、本来の遺物の帰属とは異なる遺構で出土している可能性がある。このことを遺物の構成から考えてみると、ＳＫ207は陶磁器類の出土は見られず、基本的に無遺物の遺構であると考えられる。ここではこのＳＫ207から人形類のみが出土しているとは考えにくく、またＳＫ202と比較した場合、人形類の構成比も相似形をしている。このことからＳＫ207として扱った遺物群については、本来はＳＫ202の遺物であったと考えられる。同様のことがＳＫ101とＳＫ202に関しても言えると思われる。但し、水滴、土錘については、ＳＫ202では出土しておらず、ＳＫ101本来の遺物群としてとらえることができる。

また、その他の遺構から出土している人形群については、組成パターンに表現される様に、水滴・土錘はＳＫ206が、器財・水滴はＳＫ333が、ＳＫ202と比べても抽きんでた数値を示している。さらにＳＫ118に関しては、人形・器財が大半を占め、水滴・土錘の出土はほとんど見られない。この結果から、人形類の投棄は限定された遺構にのみで行われており、無作為になされているのではない事が理解される。そしてその遺構や立地空間の性格付けを人形類の組成から考えることもあながち無理のないことといえるのではなかろうか。

（川井啓介）

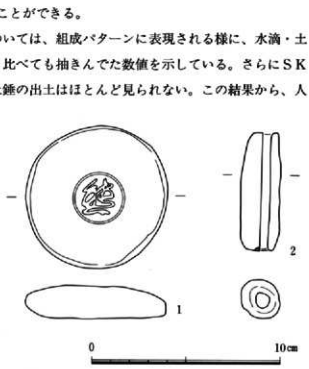


図225　近世土製品実測図

図226　近世人形類実測図(1)

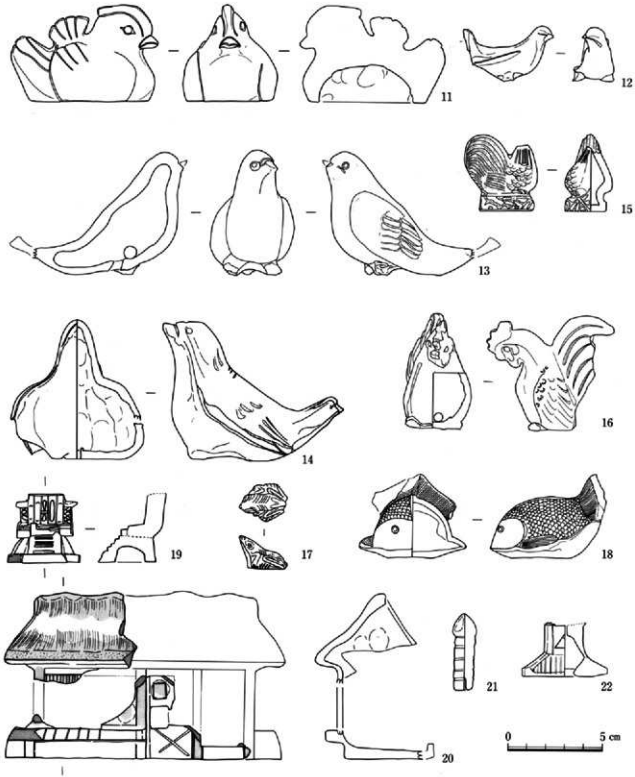


図227　近世人形類実測図(2)

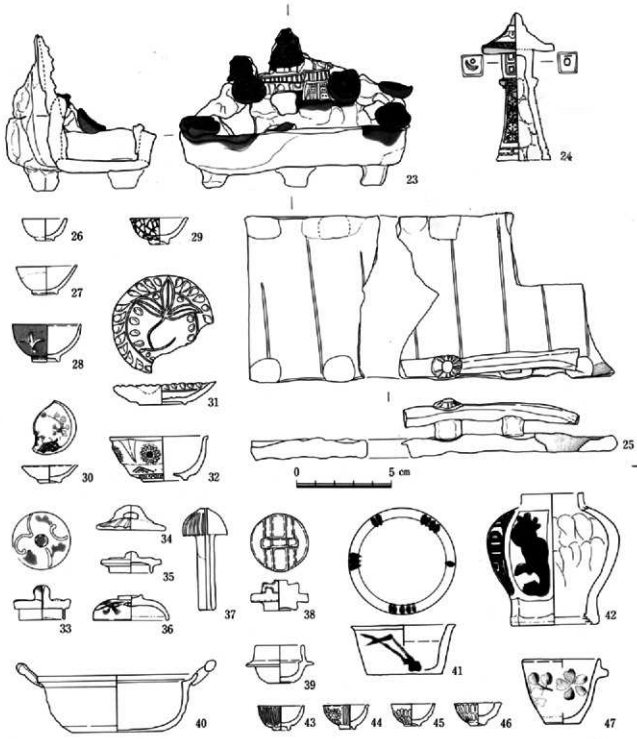


図228　近世人形類実測図(3)

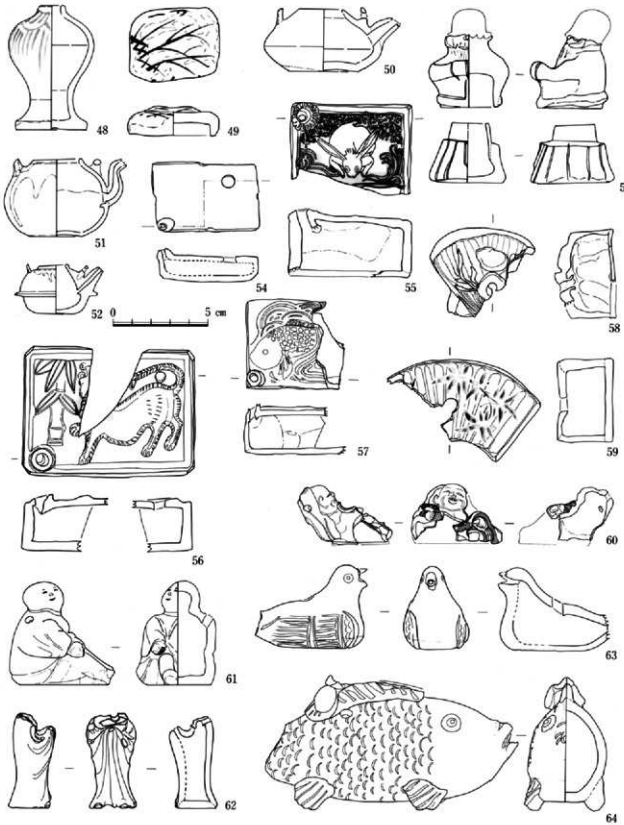


図229　近世人形類実測図(4)

(6) 木　製　品

今回の発掘調査で出土した木製品は、大きく漆器類、箸、曲物、結桶、下駄、建築部材、その他に分類できる。中でも漆器のなかに蒔絵が多く含まれていること、建築部材が限られた遺構から出土していることが特徴である。

漆器については、17世紀後半から18世紀代の遺構から多く出土し、該当の遺物を出土したＳＫ210、ＳＤ104、ＳＤ106等から判断すると一般的傾向として汚水溜まりからの出土といえる。またＳＫ014からは供膳具の椀の蓋と身が出土しているが、いずれも蒔絵の製品であり、単なる汚水溜まりとはやや性格を異にするかもしれない。

箸については、全出土量のうち70%に相当するものがＳＫ212から出土している。この遺構はＳＫ123、ＳＫ010の上層と切り合い関係が見られる。ＳＫ212とＳＫ123とを比較した場合、ＳＫ123からは、他の遺構には見られない木葉が多く出土しており、これらは屋根の下地に使用されていたものと考えることができる。また、ＳＫ010からは建築部材が多く出土しており、この２遺構は本来は屋組等の建物の処理に伴う瓦溜まり的性格であったと推定される。従って、この２遺構から出土している木製品は基本的にはＳＫ212に帰属する遺物群であると言える。

遺構	供膳具					調度具					その他	計	備考
	椀身	椀蓋	皿	不明	小計	箱物	曲物	不明	小計				
ＳＫ０１０	5				5			2	2			7	※
ＳＫ０１４	2	2			4							4	
ＳＫ１１８	2			1	3							3	
ＳＫ１０１	4	2	1	2	9			2	2			11	
ＳＫ１２３	8	2		3	13		1		1			14	※
ＳＫ２１２	2	2	2	1	7	4	4	1	9			16	※
ＳＫ２０６	3			2	5							5	
ＳＫ２１０	10			5	15	1		2	3			18	
ＳＫ２１１				3	3							3	
ＳＫ３０４	9	2	1	6	18		1	1	2			20	
ＳＫ３３３	3		2	4	9					1		10	※
ＳＫ４０１	1			2	3	1		2	3			6	
ＳＤ１０４			2	2	4			2	2			6	
ＳＤ１０６	3			1	4							4	
他の遺構	12		1	12	25	5		1	6			31	
計	64	10	9	44	127	11	6	13	30	1		158	
検出	1			2				1				4	

表42　近世漆器集計表

遺構	漆絵				蒔絵				根来塗				計
	椀	蓋	不明	小計	椀	蓋	不明	小計	椀	蓋	不明	小計	
ＳＫ０１０	1			1	4			4					5
ＳＫ０１４					2	2		4					4
ＳＫ１１８			1	1	1			1	1			1	3
ＳＫ１０１	2		1	3		2	1	3		1	1	2	8
ＳＫ１２３	1		1	2	6	1	2	9		1		1	12
ＳＫ２１２					1	2		3		2		2	5
ＳＫ２０６	2		1	3	1			1					4
ＳＫ２１０	3		3	6	7		1	8					14
ＳＫ２１１							2	2					2
ＳＫ３０４		1	1	2	7		2	9	1	1		2	13
ＳＫ３３３					3			3		2	1	3	6
ＳＫ４０１			1	1	1			1					2
ＳＤ１０４							1	1		2		2	3
ＳＤ１０６	1		1	2	1			1	1			1	4
他の遺構	3		3	6	3	1	2	6	3	2	3	8	20
計	13	1	13	27	37	8	11	56	6	11	5	22	105

表43　漆器供膳具の細工分類一覧

また、今回木製品が出土した遺構の遺物の出土傾向と調査区内での検出位置から、判明している居住者との関係は、ＳＫ010、ＳＫ014、ＳＫ118は山澄氏の屋敷地に帰属すると思われ、ＳＫ210、ＳＫ401は竹腰氏以前の居住者の投棄したものと考えられる。さらに、ＳＫ211、ＳＫ212、ＳＫ304は熊谷氏以前、ＳＤ104、ＳＤ106は山澄氏以前の段階で投棄された遺物群と考えることができる。

（川井啓介）

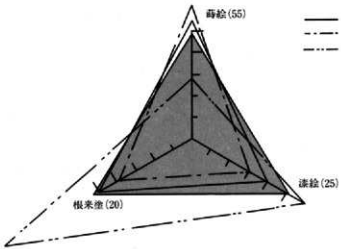


図230　漆器の出土傾向

番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
1		ＳＫ123	漆椀蓋	52
2		ＳＫ002下層	漆椀	52
3		ＳＫ212	漆椀	
4		ＳＫ212	椀	
5		ＳＫ333下層	櫛	52
6		ＳＫ212	刷毛	
7		ＳＫ123	刷毛	
8		ＳＫ356	刷毛	

番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
9		ＳＫ219	木札	
10		ＳＫ333	杓	
11		ＳＫ212	櫛	
12		ＳＫ333	蓋	
13		ＳＫ212	曲物の底板	
14		ＳＫ333	下駄（一木造り）	
15		ＳＫ212	下駄（差し歯）	

表44　近世木製品一覧

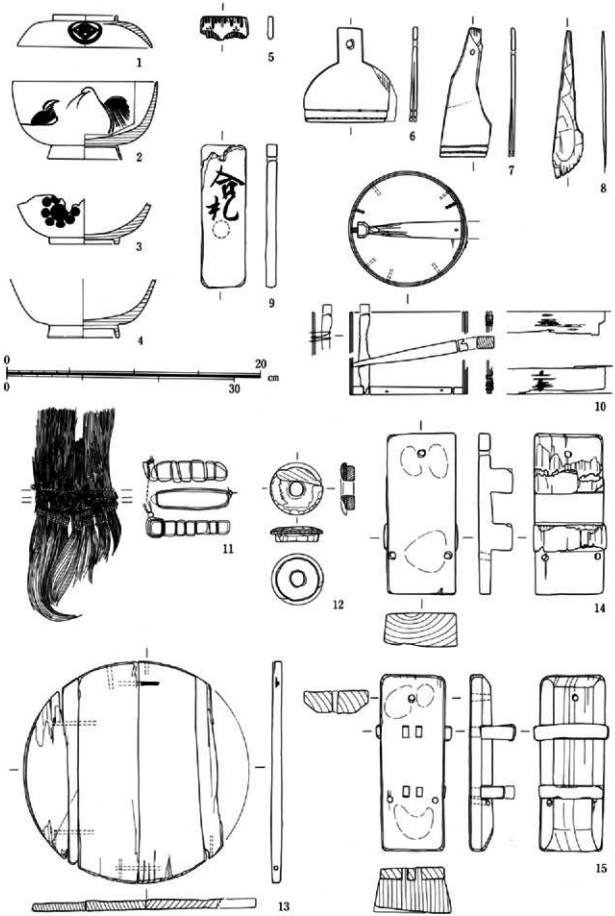
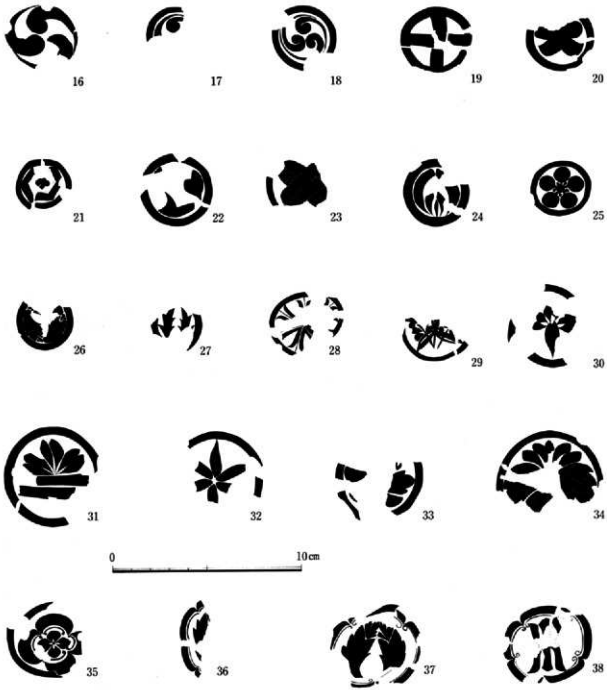


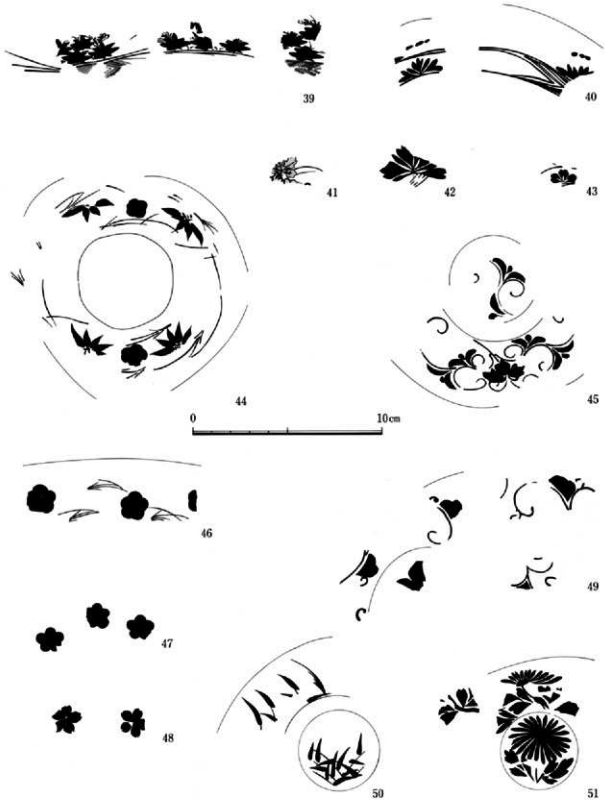
図231　近世木製品実測図



番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
16	102	SK333		
17	128	SK210		
18	151	SK210		
19	38	SK202		
20	86	SK101		
21	93	SK210		
22	53	SK210		
23	149	SK202		
24	56	SK356		
25	25	SK101		
26	16	SK014		52
27	105	SK210		

番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
28	76	SK304		
29	29	SD001		
30	121	SK210		
31	24	SK209		
32	15	SK210		
33	150	SK202		
34	152	SK210		
35	89	SK010		
36	97	SK304		
37	12	SK304		
38	97	SK304		

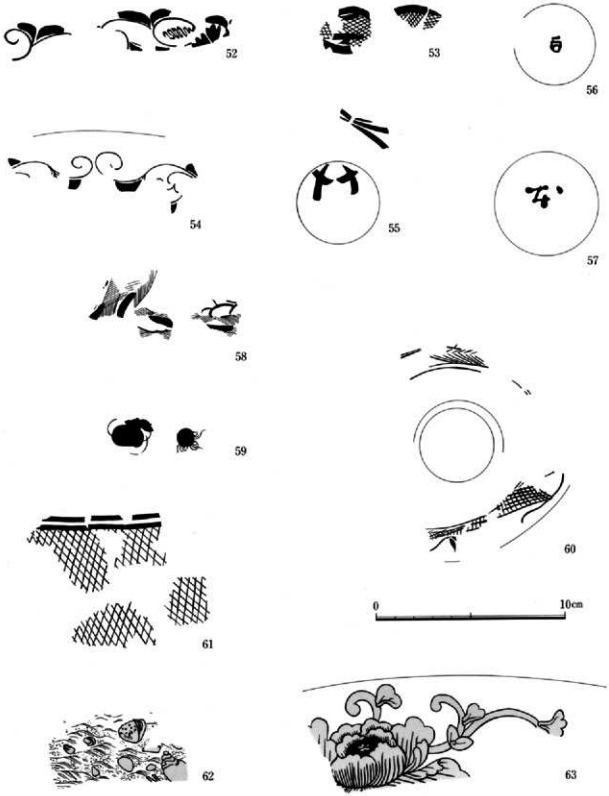
図232　加飾漆器の紋様集成(1)



番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	PL
39	125	SK123		
40	160	SK401		
41	54	SK101		
42	139	SD106		
43	164			
44	50	SK304		
45	13	SK304		

番　号	分析番号	出　土　遺　構	備　　考	PL
46	21	SK118		
47	51	SK304		
48	90	SK123		
49	55	SK014		
50	110	SK012		52
51	17	SK014		52

図233　加飾漆器の紋様集成(2)



番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
52	91	SK123		
53	95	SK210		
54	44(100)	SK123		
55	20	SK101		
56	81	SK101		
57	142	SD106		

番　号	分析番号	出土遺構	備　考	PL
58	62	SK123		
59	87	SK101		
60	112	SK123		
61	129	SK210		
62	14	SK009		52
63	42	SK356		52

図234　加飾漆器の紋様集成(3)

(7) 加飾漆器の製作技法

一般に漆器の製作は、原木から木地をつくり挽き物・板物の形態にする木胎製作の工程と、その木胎に下地および漆を塗布し、加飾・研磨作業を行う漆工の工程から成り立っている。この様な漆器資料の製作技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、それらが出土した遺構・遺跡の性格を考える上でも意味があると考える。本稿では、漆器資料の製作技法に関する調査として、まず形態・漆塗り表面の状況を表面観察した後、(1)用材選択（樹種鑑定）(2)木取り方法 (3)漆膜面の漆塗り構造 (4)色漆の使用顔料等の項目別に自然科学的な手法を用いた分析を行った(1, 2, 3, 4)。

調査結果

本遺跡の場合、木質等有機質の残存状態がそれほど良好な方ではないため、漆器資料も漆膜面のみの資料が多かった。今回の調査で用いた漆器資料は合計181点である。これらを項目別に記した方法を用いて調査を行った。その結果を（表１）に示す。

まず挽き物類である本漆器資料の形態は、椀・蓋型を中心にしており、それぞれ当時の基本的な飲食器類である飯椀・汁椀・菜椀である壺・平椀に対応するものと考えられる。また板物類は、箱物・曲物の部材破片を中心としており、いずれも生活什器としての調度品類に対応すると考えられる。

資料総数に比較して調査可能な点数はあまり多くなかったが、材の利用（用材選択）の状況をみてみると、挽き物類では、広葉樹のトチノキ、ケヤキ材が、板物類では、針葉樹のヒノキ、スギ材が確認された（写真１．２）。

末沢（1975）の研究によると、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晩材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材であるが靱性がある材を適材としている(5)。これらの木材の組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて分類すると、（表２）に示すようになる。また、板物である漆器類の用材には、アテ（アスナロ）、ヒノキを最良材とし、ネズコ、サワラ、ヒバ、スギ、モミ、マツ等の針葉樹が適材であるとしている。この点を考慮に入れて、本漆器資料の用材選択の傾向をみてみると、挽き物類・板物類ともに最良材であるケヤキ、ヒノキ材などと、かたや加工や入手の容易さという大量生産の点からみて、一般性が高い適材のトチノキ、スギ材の２種類のグループに

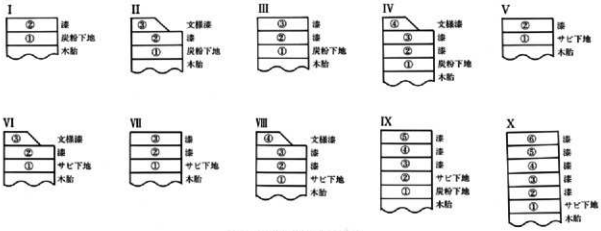


図235 漆塗り構造の分類

別れた。

次に、挽き物類である本漆器資料の木取り方法をみてみる。資料は、いずれも横木地であり、板目取りと柾目取りの２種類が見出だされた。須藤（1982）の調査によると、近世以降の近江系（小椋谷）木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柾目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとされている(6)。一般にトチノキは、芯を中心として割れ狂いの多い赤味が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分がある。シラタは、多く取れても四寸（約12cm）程度しか利用できないので、おのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナは、芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柾目取りの方法が適していることは理にかなっているといえよう。この事例を考慮に入れて本漆器資料の樹種と木取り方法の関係をみてみると、トチノキ材は、いずれも横木地板目取りを用いており、木胎製作の工程が一貫してそれぞれの材の性質を考慮に入れたものであった可能性が理解される。

次に、個々の漆器表面の漆塗り技法をみてみる。塗りは、地と文様からなり、本漆器資料の場合、無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには梨子地、蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。

漆塗り膜面の構造、.特に、各漆器資料の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、無機物を含んでいないためピークがほとんど見出だされない資料と、Al（アルミニウム）、Si（シリカ）、K（カリウム）、Ca（カルシウム）、Fe（鉄）など粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピークが認められる資料に分けられた（236―１．２）。

さらにこれらを顕微鏡観察し、前者を炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地(代用下地)、後者を細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地（堅下地もしくは本下地ともいう）と理解した。また、地の漆塗り層は、いずれも１層塗りから３―４層塗りまで見出だされ、文様等の加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた(写真３、４、５、６、７)。また、梨子地、蒔絵等の加飾は朱漆や生漆の上に蒔くいわゆる高蒔絵の技法や研ぎだしの技法がいくつか見出だされた。

このような近世漆器の製作技法のあり方を示す民俗事例の１つに、新潟県糸魚川市大所のナカジマ家小椋丈助氏による実用に即した近世木地師の漆器椀の生産技法に関する口碑資料がある(7)。

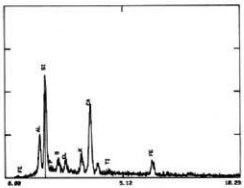
それによると、『[上品］布着せ補強（椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く）～サビ下地（砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布）～下塗り（生漆）～上塗り（生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆）の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。[下品］炭粉下地（柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地）～上塗り（生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物や油分を多く混入して用いる粗悪な漆)。[中品］下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したり、ミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。』などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。この事例を参考にして、本漆器資料の塗り構造をみてみると、きわめて簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料から、やや堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ優品資料まで、いくつかのランク別資料に分類された（図235)。

次に、色漆の性質についてみてみる。赤色系漆の使用顔料の定性分析結果では、Fe（鉄）のピークが

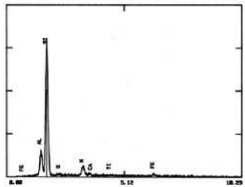
強く認められる資料（図236－3）、Hg（水銀）および S（硫黄）のピークが強く認められる資料（図236－4）、その両者のピークが強く認められる資料(図236－5）、の三種類に分けられた。これをさらに顕微鏡観察し、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3）、朱（辰砂もしくは水銀朱 HgS）、ベンガラ＋朱の三種類の異なる赤色系顔料を用いた赤色系漆であると理解した。ベンガラ、朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。近世漆器の顔料としては、幕府の統制物資であった朱に比較して、江戸時代中・後期以降人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラ方が廉価で一般的であったようである(8)。本漆器資料の場合も、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢で複雑な多層塗り構造を持つ資料には朱を使用する例や、地内面にはベンガラを地外面の家紋等の加飾部分のみに朱を使用する例が見出だされ、その状況が理解された。

金粉状装飾（金彩）の定性分析結果では、Au（金）のピークが認められる資料（図236－6）の他、Sn（スズ）や、As＋S（石黄、硫化ヒ素）のピークが強く認められる資料が確認された（図236－7・8）。この結果は、本漆器資料の金粉状装飾（金彩）として、金粉自体を使用する事例とともに、石黄粉や錫粉などの代用金粉を使用する事例の存在を示すものと理解しており、個々の漆器資料の性格を考える上で参考になろう。なお金粉（Au）を梨子地粉として用いる場合、若干銀（Ag）の含有が認められる資料もいくつか見出された（図236－8）。

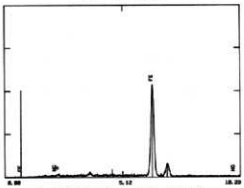
本漆器資料の場合、他遺跡と比較して、地外面の加飾として銀粉状装飾（銀彩）を施す資料が多い特徴を持つ。これらの定性分析結果では、Ag（銀）のピークが強く認められる例（図236－9）の他、Sn（スズ）のピークが強く認められる例（図236－10）も確認された。これなども、代用銀粉の使用を示す事例と考えられ、個々の漆器資料の性格を考える上で一つの指標となろう。



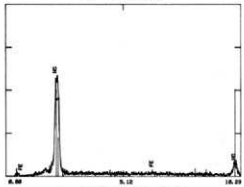
1　サビ下地(A)



2　サビ下地(B)

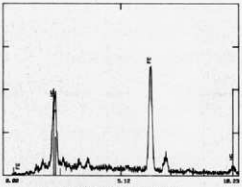


3　赤色系漆（ベンガラ　Fe_2O_3）

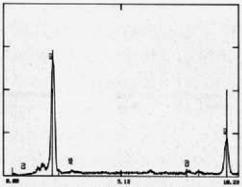


4　赤色系漆（朱　HgS）

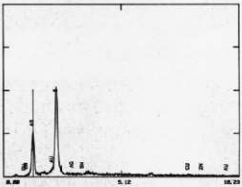
図236－1　漆器のX線分析結果(1)



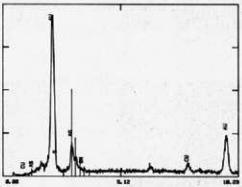
5　赤色系漆（ベンガラ十朱）



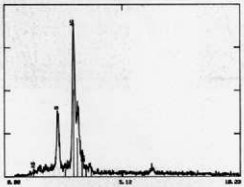
6　金粉状装飾（金　Au）



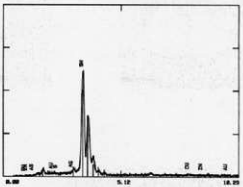
7　金粉状装飾（硫化ヒ素As＋S）



8　金粉状装飾（金＋銀）

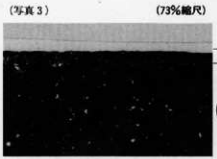


9　銀粉状装飾（銀　Ag）

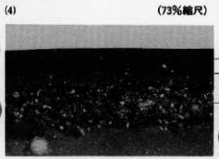


10　銀粉状装飾（錫　Sn）

図236―2　漆器のX線分析結果(2)



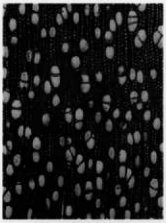
赤色系漆器（I）（100×）



黒色漆器（III）（100×）

漆塗り構造の顕微鏡写真

（写真1）とちのき科トキノキ

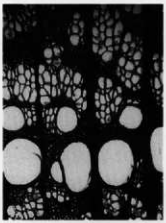


木口（30×）

柾目（100×）

板目（50×）

（写真2）にれ科ケヤキ



木口（30×）

柾目（100×）

板目（50×）

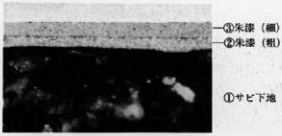
(5)　　（73%縮尺）

有加飾漂器（II）（100×）

(6)　　（73%縮尺）

赤色系漂器（横来系A）（VII）（100×）

(7)



赤色系漂器（横来系B）（VII）（100×）
縮尺100%（そのまま）

考察

以上、前項では項目別に名古屋城三ノ丸遺跡出土漆器資料の製作技法をみてみた。その結果、本漆器資料は簡素で一般的な日用漆器資料から、やや堅牢で複雑な漆技法を持つ資料、さらには梨子地・金蒔絵等高度な加飾技法を持つ資料に至るまで、いくつかのランク別のグループに分類された。そしてこれらは文献資料等を参考にしてみると、基本的にはいずれも実用に即した生活什器（飲食器）類を中心としているものの、いわゆる大名道具と呼称されるきわめて高度な漆工技術を有する上級武家の調度品類の破片と考えられる資料も幾つか確認された（No.19、42、46、54、144等）(9)。

そしてこれら本漆器資料の製作技法を名古屋城下町関連の他遺跡のそれと比較してみると相対的にサビ下地の優占率が高く、高度な加飾を施すなど優品資料が多いこともわかった（図237）（註10）。この点が、本漆器資料の大きな特徴の一つとも言えよう。

なお本漆器資料の製作技法の傾向を、共伴の陶磁器類の年代観を参考として分類してみると、基本的には各年代を通してあまり大差がなくほぼ同様の傾向が認められた（図238）。

しかし個々の漆器資料の糕漆技法を細かく検討してみると、いわゆる「根来手もしくは根来塗」と呼称される地塗りのみの朱漆器類では、中塗の黒漆を省く簡便な技法が後期の資料を中心に認められる点、若干石黄を顔料として用いる例が前期の資料に多く、銀粉を用いる例が後出する点など漆工技術史上の特徴の一端が確認された。また本遺跡からは、飲食器等の漆器製品類ではないが、容器内に残存付着した漆紙および漆樹液塗料の固化膜面や寄った漆濾紙の残片など、実際の漆工作業に伴う資料（No.1、27、28、33、98、134、135）も同時に検出されている。これなどは、文献史料等で知られる武家の屋敷内に出向いて注文の婚礼道具の作成や什器塗り直し等の作業を行った江戸時代当時の漆工職人の仕事ぶりの一端が実際の出土資料からも理解され興味深い。（北野信彦）

註

（1）樹種の同定作業は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料上は、遺物本体をできるだけ損傷しないように破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は常法に従い脱水し、検鏡プレパラートに仕上げた。

（2）挽き物である漆器資料の木取り方法の調査は、樹種鑑定の切片作成時に同時に行った。

（3）まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、簡易顕微鏡を用いて細部の観察を行った。次に漆器資料の表面洗浄作業の際に出た1㎜×3㎜程度の漆剥落片を採取し、合成樹脂（エポキシ系樹脂／アラルダイトＧＹ1251　ＪＰ．ハードナーＨＹ837）に包理した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ、塗り重ね構造、顔料粒子の大きさ、下地の状態について顕微鏡観察を行った。

（4）色漆に用いられた顔料の無機物に関する定性分析には、先の漆膜剥落片をカーボン台に取り付け、日立製作所Ｓ―415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所ＥＭＡＸ―2000エネルギー分散型Ｘ線分析装置（Ｘ線マイクロアナライザー）を連動させてそれを用いた。分析設定時間は500ＳＥＣ．分析ポイントは30倍照射。なお、分析チャートの補正には、Geochemical Journal vol.8 p175-192「1974 compilation of data on The GSJ geochemical reference sample JG-1 grandiorite and JB-1 basalt」Atusi Ando and others の JG-1, JB-1 サンプルを用いた。

（5）末沢春一朗（1975）「近世以降木地師のロクロ製品製作技法の研究」『京都大学農学部林学科卒業論文』
　　橋本　鉄男（1979）『ろくろ　ものと人間の文化史31』法政大学出版局
（6）須藤　　護（1982）『日本人の生活と文化⑤　暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編　ぎょうせい
（7）文化庁文化財保護部編（1974）『木地師の習俗　民俗資料選集２』国土地理協会
（8）『輪島市史　第六巻　資料編』（1973）輪島市教育委員会

（9）消費地における生活什器である漆器の販売状況を知る文献史料の一つとして『名古屋諸色直段集、寛延四来年小買物諸色直段帳』寛延四年（1751）の以下の記載がある。

「塗物

一、一匁一分	せしめ漆一匁	
一、三分七厘	こくその粉一袋	
一、二匁五分五厘	布着せ蝋色塗	一尺四方一坪
一、二匁	布なし　同	断一坪
一、二匁二分	上花	塗一坪
一、一匁五分	布なし堅地花	塗一坪
一、七分五厘	常花	塗一坪
一、二分五厘	上溜	塗一坪
一、一分七厘	常溜	塗一坪
一、三分	春慶	塗一坪
一、二分	常春慶	塗一坪
一、二分	上かき合	塗一坪
一、一分五厘	常かき合	塗一坪
一、八厘	拭	塗一坪
一、五厘	常拭	塗一坪　」

この記載内容から、当時、漆器の髹漆技法の程度別に、明確な価格のランク付けが存在していたことが理解される。

(10) 北野　信彦（1990）「近世尾張における生活什器としての出土漆器資料」『綜合郷土研究所　紀要35』愛知大学 P 82―94

北野　信彦（1982）「近世武家社会における生活什器としての漆器資料」『綜合郷土研究所　紀要38』愛知大学 P 115―134

ろくろ挽き物の用材分類一覧表

A環孔材	a．ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表われる。堅硬であるが靭性もあり、木皿など薄手物に適する。
B散孔材	b．サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ類、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なくて、やや堅さはあるが、加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c．ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カツラ、ホオノキなど	軟かくて加工は容易であるが、乾燥が難しくて狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d．エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目にもよく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

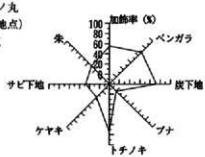
橋本鉄男「ろくろ、ものと人間の文化史31」1979などを参考にして作成

-1　横木地と竪木地の要領
（末沢春一郎「近世以降木地師のロクロ製品製作技術の研究」展図）

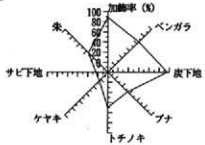
-2　近世会津木地師の木取りの方法
須藤（1982）より原図引用

近世以降の漆器（挽き物類）の木取り方法

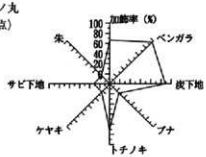
1．名古屋城三ノ丸
（県警本部地点）
資料数181点



3．幡下小学校跡
資料数26点



2．名古屋城三ノ丸
（市公館地点）
資料数35点



4．清洲宿場町
資料数10点

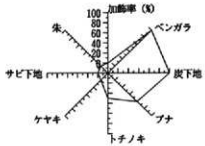
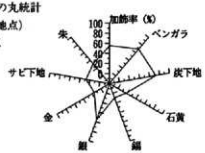
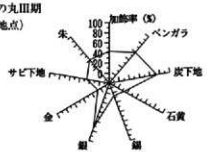


図237　遺跡別出土漆器資料の品質組成の傾向

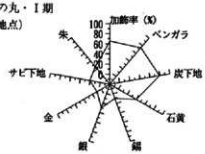
1．名古屋城三の丸統計
（県警本部地点）
資料数181点



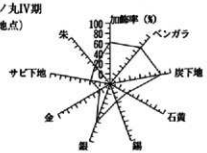
4．名古屋城三の丸Ⅲ期
（県警本部地点）
資料数39点



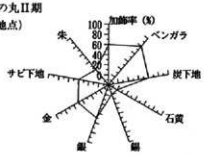
2．名古屋城三の丸・Ⅰ期
（県警本部地点）
資料数29点



5．名古屋城三ノ丸Ⅳ期
（県警本部地点）
資料数43点



3．名古屋城三の丸Ⅱ期
（県警本部地点）
資料数５点



6．名古屋城三の丸年代不詳
（県警本部地点）
資料数65点

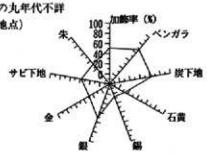


図238　年代別出土漆器資料の加飾技法の傾向

若宮遺跡三ノ丸遺跡

No.	年代	種類	生産地	表面塗りの技法 内	外	文様	使用顔料 内	外	文様	漆塗構造 内	外	備考
1			赤	赤			ベンガラ					
2	Ⅲ	ⅠⅡⅢ	赤	赤		赤	赤			V	V	
3	鎌	ⅠⅡⅢ	赤	黒	赤	赤一黒	ベンベン		Ag	Ⅲ	Ⅳ	
4	Ⅲ	ⅠⅡⅢ	赤	赤		赤	赤			V	Ⅰ	
6		ⅠⅡⅢ	赤	黒	赤一黒	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
7		ⅠⅡⅢ	赤	黒	赤一黒	ベンガラ			Ag,Au+S	Ⅰ	Ⅱ	
8	Ⅲ	ⅠⅡⅢ	赤	黒	赤一黒	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
9	Ⅳ	ⅠⅡⅢ	赤	黒	赤一黒	ベンガラ			Ag,Au+S	Ⅰ	Ⅱ	
10	Ⅳ	ⅠⅡⅢ	赤	黒	赤一黒	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
11	Ⅳ	ⅠⅡⅢ	赤	黒	赤一赤	ベンガラ			ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
12	Ⅲ			黒	赤一黒				Ag	Ⅰ	Ⅱ	
13	Ⅲ		赤	黒	赤一赤	ベンガラ			ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
14			赤	赤	紺一金,黒	朱			Au,Ag,Fe		Ⅵ	
15	Ⅰ		赤	黒	紺一黒,赤	ベンガラ			Au+S,ベンガラ	Ⅱ	Ⅱ	
16	Ⅳ		赤	黒	紺一黒,銀	ベンガラ			Sn	Ⅰ	Ⅱ	
17	Ⅳ			黒	紺一銀				Sn		Ⅱ	
18	Ⅳ			黒	紺一赤				Au+ベンガラ		Ⅱ	
19			型子地	型子地	有	Au+Ag,Ag	Au+Ag	Au+Ag,型	Ⅶ	Ⅷ	布巻せ	
20			赤	暗野	紺一銀	ベンガラ		Sn		Ⅰ	Ⅱ	
21	Ⅳ		赤	赤	紺一黒,銀	ベンガラ		Au		Ⅲ	Ⅱ	
22	鎌		黒	黒						Ⅲ	Ⅲ	
23			茶	茶野						V		
24			赤	黒	紺一黒,赤	ベンガラ		Au+S,ベンガラ		Ⅱ	Ⅱ	
25			赤	茶	紺一赤	ベンガラ		ベンガラ		Ⅰ	Ⅱ	
26		ⅠⅡⅢ	赤	茶		ベンガラ				Ⅰ	Ⅰ	
27			赤	赤		ベンガラ						
28			赤	赤		ベンガラ						
29			赤	赤						Ⅶ	Ⅶ	
31			赤	赤		ベンガラ						
32			赤	黒		ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
32-2	Ⅳ		赤	黒		朱	Au+Ag	Au		X	X	
34-1	鎌					朱				V		
34-2	鎌										Ⅰ	
35	鎌		赤	茶	紺一銀	ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
37	Ⅰ		赤	茶	紺一赤	ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
38	Ⅰ		茶	茶	紺一赤					Ⅰ	Ⅱ	
39			赤	茶	紺一赤	ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
40			赤	赤	紺一黒	ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
41				黒		朱				Ⅰ	Ⅰ	
42			赤	黒	紺一金					Ⅶ	布巻せ	
43			赤	黒			ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
44	Ⅳ		赤	黒	紺一銀	ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
45-1	鎌		赤	暗野		ベンガラ				Ⅲ	Ⅲ	
45-2	鎌		赤	暗野		朱	朱+ベンガラ			Ⅴ	Ⅶ	
				型子地			Au+Ag(少),朱			Ⅴ	Ⅶ	
47			赤	黒	紺一赤	ベンガラ		朱		Ⅰ	Ⅱ	
48	鎌		赤	赤		朱		朱		Ⅶ	Ⅶ	
49	Ⅳ		赤	赤		朱		朱		Ⅴ	Ⅴ	
50	鎌			暗野	紺一銀				Ag			
51	鎌		赤	黒	紺一銀	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
52	鎌			全	文字一赤		ベンガラ,Au				Ⅱ	
53	Ⅰ		赤	黒	紺一黒,赤	ベンガラ		Au,ベンガラ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	
54			赤	黒	紺一金	朱	Au+Ag?		Ⅶ	Ⅶ	Ⅶ	
55	Ⅳ			茶	紺一銀			Sn		Ⅰ	Ⅱ	
56-1							朱			Ⅰ	Ⅱ	
56-2			赤	黒	紺一赤	ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
57	Ⅲ		赤		ベンガラ					Ⅰ	Ⅰ	
58			赤	黒	紺一黒,赤	ベンガラ		Au+S,ベンガラ		Ⅰ	Ⅱ	
59			赤				朱			V		
60	Ⅲ		赤	茶		ベンガラ				Ⅰ	Ⅰ	
61			赤	黒		ベンガラ				V	V	
62	Ⅳ		赤	暗野	紺一銀	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
64				黒						V	V	
65	Ⅲ		赤	赤野		朱		朱		V	Ⅰ	
66			赤	茶	紺一赤	ベンガラ			ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
67			赤						黒一朱		Ⅶ	
68					ベンガラ					Ⅰ	Ⅱ	
69			赤	茶	紺一赤	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
70	Ⅲ			茶						Ⅰ	Ⅱ	
72				茶						V		
73	Ⅲ				ベンガラ					Ⅰ	Ⅱ	
74	Ⅲ		赤	黒	ベンガラ					Ⅰ	Ⅰ	
75			赤	茶	ベンガラ		朱		Ⅲ	Ⅲ	ベンガラ+ウルシ	
76	Ⅲ		赤	黒	紺一銀	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
77	Ⅰ			赤								
78			赤	茶	↑一銀	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
79						朱		朱		V	Ⅰ	
80	Ⅳ		茶	黒白金	ベンガラ	ベンガラ				Ⅰ	Ⅰ	
82	Ⅳ		赤		ベンガラ					Ⅰ	Ⅰ	
83	Ⅳ				ベンガラ					Ⅰ	Ⅰ	
84			赤	茶						Ⅰ	Ⅰ	
85			赤	黒	紺一金	ベンガラ+金				Ⅰ	Ⅱ	
86			赤	茶	紺一赤	ベンガラ				Ⅰ	Ⅱ	
87			赤	茶	紺一銀	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
88			赤	茶	紺一銀	ベンガラ			Sn	Ⅰ	Ⅱ	
89	Ⅳ			茶	紺一銀				Sn	Ⅰ	Ⅱ	
90	Ⅳ		赤	茶	紺一銀	ベンガラ			Ag	Ⅰ	Ⅱ	
91-1	Ⅳ		赤	茶	紺一銀,赤	ベンガラ			Au,ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	

No.	年代	種類	生産地	表面塗りの技法 内	外	文様	使用顔料 内	外	文様	漆塗構造 内	外	備考
91-2	Ⅳ				黒	紺一赤			ベンガラ		Ⅱ	
92-1	Ⅳ				黒	紺一赤			ベンガラ		Ⅱ	
92-2	Ⅳ							朱		V		
95	Ⅰ			赤	茶	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
96				赤		朱					V	
97				赤	茶	紺一銀			Ag		Ⅱ	
98							ベンガラ					
99	Ⅳ	ⅠⅡⅢ		赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
100	Ⅳ			赤	茶	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
101	鎌			赤	黒	紺一赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
102	鎌			赤	黒	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
103	鎌			赤	黒	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
104	鎌				茶	紺一黄			Au+S		Ⅱ	
105	Ⅰ				黒	紺一赤			ベンガラ		Ⅱ	
106	Ⅳ									Ⅰ		
107	Ⅳ			赤		朱		朱		Ⅶ	Ⅶ	朱(鞘一部)
108	Ⅰ									Ⅰ	Ⅰ	
109-1	Ⅰ			赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
109-2				赤			ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅱ	
111				赤	茶	紺一黒,銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
112	Ⅳ			赤	黒	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
113	Ⅳ			赤	黒	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅲ	Ⅱ	
114				赤	茶		ベンガラ	ベンガラ	Ag		Ⅱ	
115	Ⅳ			赤	茶	紺一赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
116	Ⅳ				黒	紺一黒,金			Ag		Ⅱ	
117	Ⅰ			赤	茶	紺一赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
118	Ⅳ			赤	赤	文字一赤	ベンガラ			X	Ⅰ	
119	Ⅰ			赤	茶	紺一銀	ベンガラ			Ⅰ	Ⅱ	
120				赤	茶		朱			Ⅶ	Ⅶ	黒-朱-朱
121	Ⅰ			赤	黒	紺一金,黄	ベンガラ		ベンガラ,Au+S	Ⅰ	Ⅱ	
122	Ⅳ			赤	茶	紺一金,黄	ベンガラ		Au,ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
123				赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
124				赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅰ	
125	Ⅳ			赤	黒	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
126	Ⅰ			赤	赤		朱	朱		Ⅶ	Ⅶ	黒-朱
127							ベンガラ+朱			Ⅶ	Ⅶ	ベンガラ-朱-ベンガラ
128	Ⅰ			赤	茶	紺一銀,銀	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
129	Ⅰ			赤	黒	紺一赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
130-1							朱			V		
130-2				赤	茶	紺一銀	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
131				赤	茶	紺一黄	ベンガラ		Au+S	Ⅰ	Ⅱ	
132	Ⅳ			赤	黄		朱			V	V	
133	Ⅳ									Ⅰ		
134	Ⅳ			赤								
135				赤			朱					
136	Ⅰ			赤			朱	朱		Ⅶ	Ⅶ	黒-朱
137	鎌	ⅠⅡ/Ⅲ		茶	茶					Ⅰ	Ⅰ	
138	Ⅳ			赤	赤		ベンガラ			Ⅴ	Ⅴ	
139	Ⅳ			赤	黒	紺一赤,黄	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
140	鎌	ⅠⅡ/Ⅲ		赤	黒		金			Ⅴ	Ⅴ	
141				赤	茶		ベンガラ	朱		Ⅶ	Ⅶ	ベンガラ-朱
142-1	Ⅰ			赤	黒	紺一赤	朱		朱	Ⅶ	Ⅶ	
142-2	Ⅰ			赤	黒	紺一赤	朱		朱	Ⅶ	Ⅶ	黒-朱-朱
143	Ⅳ			赤	黒	紺一黒,銀	ベンガラ		Au+S	Ⅰ	Ⅱ	
144	Ⅱ			赤	茶		朱			Ⅰ	多	
145	鎌	ⅠⅡ/Ⅲ		赤	茶		朱			Ⅰ	Ⅱ	
146	鎌			赤	茶		朱	朱		V	Ⅰ	
147	Ⅳ	ⅠⅡ/Ⅲ	生産	生産						Ⅰ	Ⅰ	
148	Ⅰ		黒漆	黒漆								
149				茶		紺一銀			Ag		Ⅱ	
150				赤	茶	紺一赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
151	Ⅰ			赤	茶	紺一赤	ベンガラ		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
152	Ⅰ			赤		紺一赤			ベンガラ		Ⅱ	
153	Ⅰ			赤	黒	紺一黒,黄			ベンガラ,Au+S		Ⅱ	
154-1	鎌			赤	茶	紺一銀	ベンガラ		Sn	Ⅰ	Ⅱ	
155	鎌			赤	茶	紺一赤			ベンガラ		Ⅱ	
156	Ⅰ			赤	黒	紺一赤,銀	ベンガラ		ベンガラ,Sn	Ⅰ	Ⅱ	
157	Ⅰ			赤	黒	紺一銀,銀			ベンガラ,Au+S		Ⅱ	
158-1	Ⅱ			赤	黒	紺一金	ベンガラ		Au	Ⅰ	Ⅱ	
158-2	Ⅱ						ベンガラ				多	
159	Ⅱ			赤	茶	紺一赤	ベンガラ		ベンガラ	Ⅰ	Ⅱ	
160	Ⅱ			赤	茶	紺一銀	朱		Ag	Ⅰ	Ⅱ	
161	Ⅳ			赤	茶		朱			V	V	
162	鎌			赤			ベンガラ				Ⅰ	
163				赤	赤		朱	朱		V	V	布巻せ
164	Ⅳ			赤		紺一銀			Ag		Ⅱ	
165	Ⅰ			赤	茶	紺一赤			ベンガラ		Ⅱ	
166	Ⅰ			赤	赤		朱	朱		Ⅶ	Ⅶ	黒-朱
167				赤	赤		朱	朱		V	V	
169			生産							Ⅰ	Ⅰ	
170	鎌		黒	黒						Ⅰ	Ⅰ	
172	Ⅰ			赤	茶		ベンガラ			Ⅰ	Ⅱ	
173	Ⅳ			赤	茶		ベンガラ	ベンガラ		Ⅰ	Ⅱ/Ⅲ	
174					茶	紺一銀			Ag		Ⅱ	
175	ⅠⅡ/Ⅲ				黒	紺一金,銀			Au+S,Ag	Ⅳ	Ⅳ	
A				赤	黒	型子地	朱		Au+Ag,朱	Ⅶ	Ⅶ	
B				赤	黒	型子地	朱		Au+Ag,朱	V	Ⅵ	

年代
Ⅰ—17世紀（中）
Ⅱ—17世紀（末）
鎌—18世紀（前）
Ⅲ—18世紀（中）～19世紀（中）

表45　出土漆器資料観察表

(8) 金　属　器

今回の発掘調査で、金属製品が出土した遺構は90遺構である。その内、工具等下記の一覧に表示した各種の遺物が数点ずつ、合計10点未満の遺構が69遺構にのぼる。これに対し、合計10点以上出土した遺構は21遺構で、遺構出土の遺物の83%を占め、包含層出土を含めた全遺物量に対しても73%とその大半を占める。言い換えれば、金属製品の出土は限定された地点（遺構）に集中していると考えられる。この点については、個別製品についても、工具はＳＫ101･118に、武具はＳＫ118に、調度具はＳＫ206に、喫煙具はＳＤ106に、といった様に出土傾向に集中性を窺うことができる。

こうした出土傾向は、第一に、武具は比較的江戸時代でも早い時期の遺構から多く出土しており、遺構からの出土遺物はある程度、遺構が形成された時代差に基づくであろうことが推定される。第二に、例えば工具が多く出土しているＳＫ101は、隣接して瓦溜として使用されていたＳＫ123が存在し、同様にＳＫ210には瓦溜のＳＫ213が存在している。このように、瓦止めとして使用された工具（釘）は、当然のことながら瓦溜の周辺に位置している。つまり、遺構から出土する遺物は、各遺構の性格の差異に基づくものであると考えることができる。但し、この観点から各遺構の性格を考えた場合、ＳＫ118については工具に合わせて武具が大量に出土しており、単純にその性格を規定することは困難であり、一考を要する。

個別の遺物について、注目される点の一つは先述の釘と瓦の関係である。また、これ以外にも幾つかの点を挙げることができる。まず銭貨であるが、ＳＫ002・ＳＫ333からは「さし」の状態で出土している。その内の大半が寛永通寶であったが、他に２枚の元祐通寶が混入していた。これは「さし」状態で

遺　構	工具	武具	調度具	調理具	容器	装身具	喫煙具	その他	計	銭貨
ＳＤ１０４	37	6	3		1		1		48	
ＳＤ１０６	16	5			1		12		34	
ＳＤ２０３	16								16	
ＳＫ００２	16					1	2	1	20	74
ＳＫ００９	11								11	
ＳＫ０１４	29		1					1	31	1
ＳＫ１０１	140	3	8		1		4	11	167	2
ＳＫ１０３	16	1	1	2					20	2
ＳＫ１０５	18								18	
ＳＫ１１８	112	12					1	1	126	1
ＳＫ１２３	11	1		1	1		1	1	16	1
ＳＫ２０２	17		1					2	20	
ＳＫ２０６	88	2	13		1		1	1	106	
ＳＫ２１０	67	4	1				5	2	79	3
ＳＫ２１１	53		2					2	57	
ＳＫ２１７	6	4							10	
ＳＫ２１９	13	1	1						15	1
ＳＫ３０４	13		1				6	1	21	5
ＳＫ３１２	12		2				1	1	16	
ＳＫ３３３	57	1	1	1	1		5	5	71	47
ＳＫ４０１	36	2					1	5	44	1
小　計	784	42	35	4	6	1	40	34	946	138
計	1030	53	66	7	10	1	62	65	1294	209
小　計	246	11	31	3	4	0	22	31	348	71
その他	146	5	12	1	2	0	12	14	192	54
検　出	100	6	19	2	2		10	17	156	17

表46　金属製品出土遺構一覧

の貨幣取引が行われるとすれば、明らかな違法行為であり、武家の屋敷地から出土したことをどの様に解釈すればよいのであろうか。また、表46の一覧でその他として記載した銭貨の54点のうち、41点がＳＫ010から出土している。実際はＳＫ010とＳＫ002には切り合い関係があり、ＳＫ010からはこれ以外の金属製品は殆ど出土していない。この点から、ＳＫ010出土の銭貨は本来はＳＫ002に帰属するものと考えることが妥当であるとおもわれる。

いま一つ注目されることは、ＳＤ302から出土した溶鉱炉である(図239)。溶鉱炉の径が60～70cmあり、かなりの容量を有していたことが想像される。この他にフイゴの羽口やルツボ、鉄滓・銅滓の付着した椀の転用品も出土している。このことは屋敷地内で多様な金属製品の製造が行われており、それも簡単な修理の範囲を越えた製品の鋳造と言えるものであると理解し得る。

(川井啓介)

図239　出土した溶鉱炉

番号	出土遺構	備考	PL
1		鉄	
2	ＳＫ401	鉄	
3	ＳＫ333	鉄	
4	検Ｉ	鉄	
5	ＳＫ101	釘	
6	ＳＫ206	釘	
7	ＳＫ333	鎹	
8	ＳＫ263	ヤリガンナ	
9	ＳＫ010	鋏	
10	検Ｉ	(へら カ)	
11	南壁	鞍番	51
12	ＳＫ101	不明	
13	ＳＫ118	刀	
14	ＳＫ333	刀装具	
15	検Ｉ	刀装具	51
16	検Ｉ	小柄	
17	ＳＫ210	小柄	
18	ＳＫ408	小柄	
19	ＳＫ014	火箸	
20	ＳＫ101	火箸	
21	検Ｉ	(火箸カ)	
22	検Ｉ	火箸	
23	ＳＫ306	櫛金具	
24	ＳＫ103	鳥金具	51
25	検Ｉ	箱問取手	
26	ＳＫ361	鳥金具	
27	ＳＫ101	錠前	51
28	ＳＤ104	引き手	
29	検Ｉ８区	座金・割ピン	
30		鳥金具	
31	南壁Ｉ区	鳥金具	
32	ＳＫ408	不明	
33	ＳＫ333	銅線	
34	ＳＫ206	鎹	
35	ＳＫ117	鎹	
36	ＳＫ302	鎹	
37	南壁立会	ジャカゴ	52
38	ＳＫ208	火キリ金	
39	ＳＤ401	火キリ金	
40	検Ｉ	(つまみ)	
41	ＳＤ103	注口	
42	ＳＫ333	鎹型容器	
43	ＳＫ210	鎹金具	
44		把手	
45	検Ｉ３区	鹿角(鹿)	52
46	ＳＫ212	金部(三葉葵)	52
47	検Ｉ２区	不明	51
48	ＳＫ346	(毛抜きカ)	
49		キセル	
50	ＳＫ206	キセル	
51	ＳＫ304	キセル	

表47　金属製品観察表

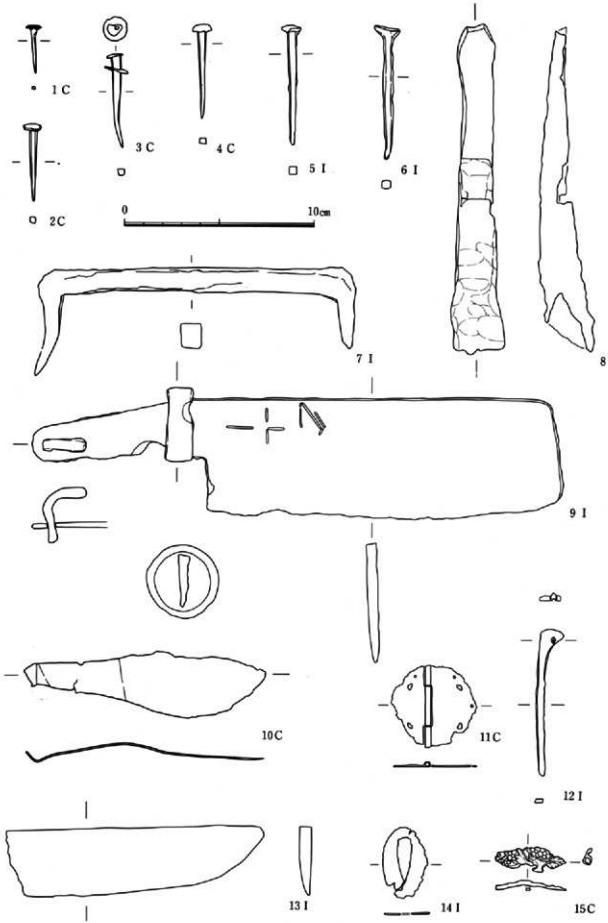


図240　近世金属製品実測図(1)

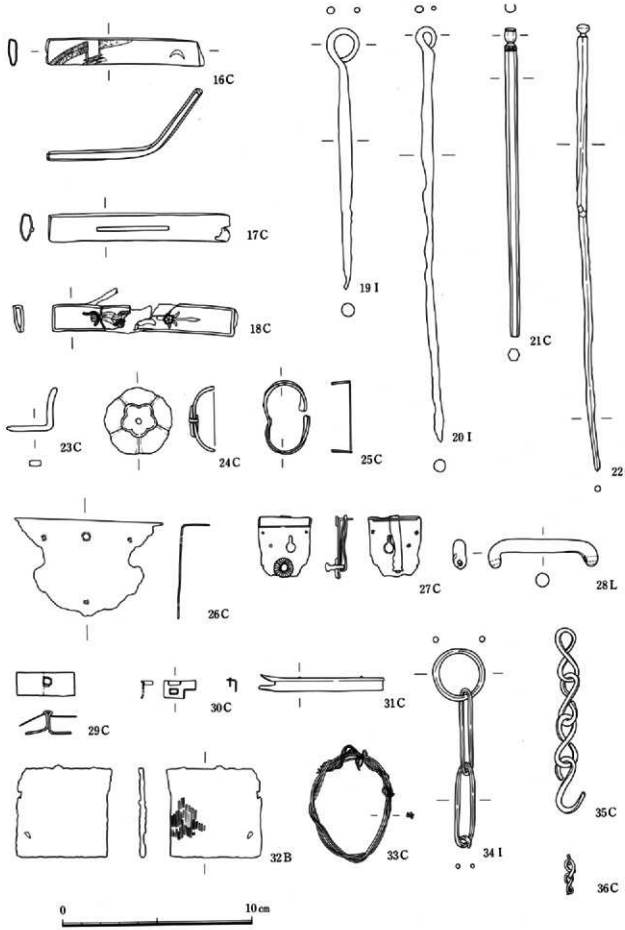


図241　近世金属製品実測図(2)

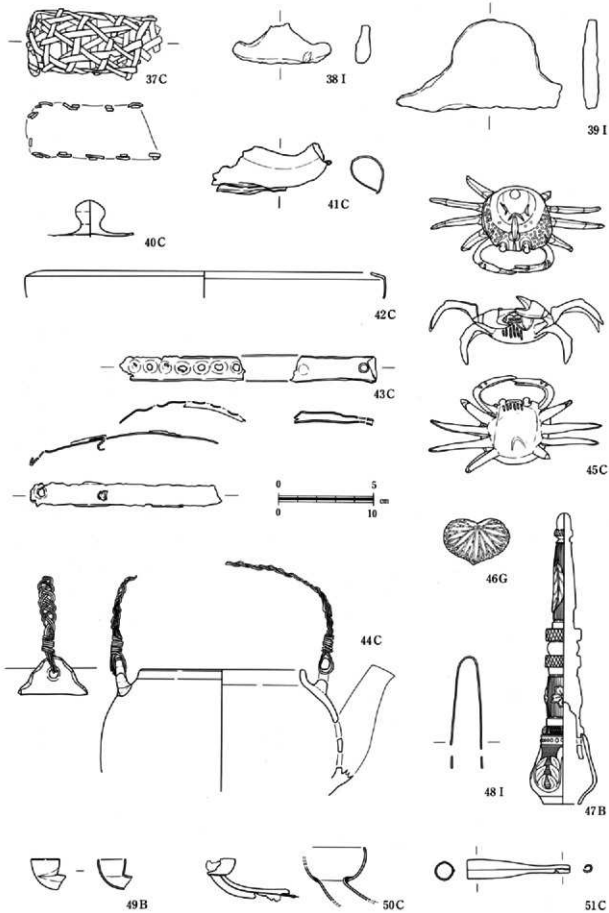


図242　近世金属製品実測図(3)

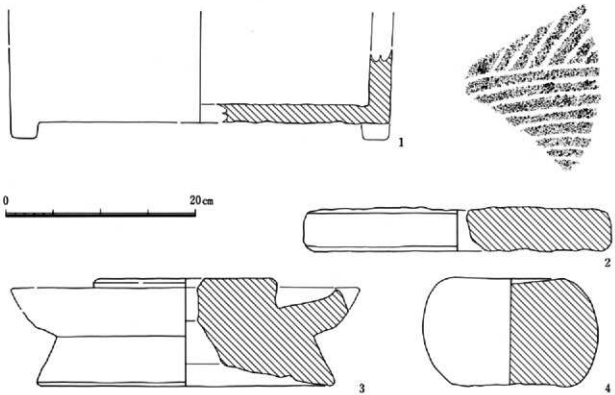
(9) ガラス・石製品

出土した石製品には、ガラス製品も含め、白、かんざし、硯等がある。

(1) は不明石製品である。(2) は石臼、(3) は茶臼である。(4) は五輪塔の一部、水輪と思われる。(5) から (10) はガラス製のかんざし。(5) は断面が隅丸長方形で花 (桜?) の細工が施されている。(6)・(7) は断面が花弁状に細工されている。(10) もかんざしの一部と考えられ、花 (?) の細工が見られる。(11) はガラス製の合子の蓋と思われ、やはり上面に花の細工が施されている。

(12) から (19) はいずれも硯である。うち (12) と (14) の底部に線刻が認められる。

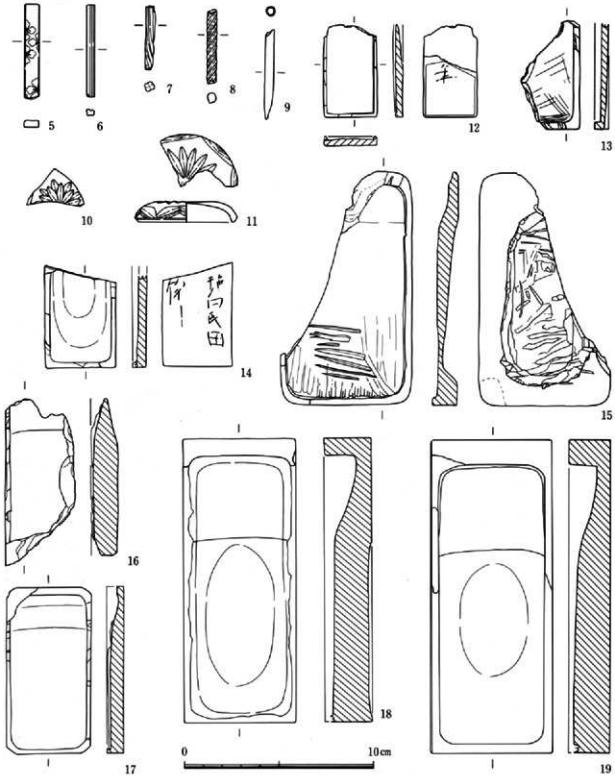
(川井啓介)



番号	出土遺構	備考	PL
1	SK123		
2	SK101	石臼	

番号	出土遺構	備考	PL
3	SK214	茶臼	
4	SK123	水輪	

図244 近世石製品実測図



番号	出土遺構	備考	PL
5	SK333	かんざし	53
6	SK333	かんざし	53
7	SK333	かんざし	53
8	SK333	かんざし	53
9	SK333	かんざし	53
10	SK206	かんざし	53
11	掘建	合子	
12	SK101	硯(線刻あり)	

番号	出土遺構	備考	PL
13	SK101	硯	
14	SK101	硯(線刻あり)	
15	SK101	硯	
16	検I	硯	
17	SK321	硯	
18		硯	
19	SK202・207	硯	

図245　ガラス製品・石硯実測図